

一
起
一
起

明治廿六年
一月廿三日
於苦澁橋

靖蜒之洲。首尾蜿蜒。餘勢起伏。右控沖繩對馬。左延于千嶋。儼然爲東海之門戶。據此形勝。扼吭拊背。可以制馭大局。而守禦不豫。將翻有長鞭不及馬腹之嘆。是豈非志士之所慨哉。距今八十年前。露國派其海員測樺太及千嶋之水路。海圖始成。今之航客所用。即是當時露人至于國後。爲我巡丁所捕獲。其冒險蹈危。籌圖遠略。如此也。明治八年。與露國約成。千嶋歸于我版圖。然得撫以東各

明治廿六年
一月廿三日
於苦吟樓

蜻蜓之洲。首尾蜿蜒。餘勢起伏。右控沖繩對馬。左延于千嶋。儼然爲東海之門戶。據此形勝。扼吭拊背。可以制馭大局。而守禦不豫。將翻有長鞭不及馬腹之嘆。是豈非志士之所慨哉。距今八十年前。露國派其海員測樺太及千嶋之水路。海圖始成。今之航客所用。即是當時。露人至于國後。爲我巡丁所捕獲。其冒險蹈危。籌圖遠略。如此也。明治八年。與露國約成。千嶋歸于我版圖。然得撫以東各

鳴爲无人之境。而圖誌亦未有悉其詳者。笹森君。前拋官。牧馬牛于陸奧之野。客歲。齋糧探險千嶋。著探險記。嗚呼。舉世滔滔多議涉日。余讀千嶋探險記而有感。於是乎書。

明治二十六年一月二十四日

正三位勳一等 井上 毅

北門鎖鑰。人皆言之。而千島則不與焉。以夫樂翁景山二公之先見而猶不論千島。縱令當初未屬我版圖。自具眼者言之。竊爲二公耻焉。近日岡本氏唱千島義會。美則美矣。其能保無隔鞞之感乎。千島雖曰叢爾小洲。試以目今大勢論之。占東洋咽喉。可以制米魯之交通。是豈可袖手傍觀。再踏樺太覆轍乎。舊弘前藩笹森儀助君。滿腔熱血之士也。一身皆膽之士也。夙有憂於此。聞朝廷使磐城艦實測本島。雀躍請官隨。實以客歲七月拔錨函館。往復凡百餘日。冒突海嘯。澌立之間。出入狼嗥熊臥之中。死而不死。殆三回。實踐精查。無人絕境。未嘗遺錨銖也。經緯度數。寒暄昇降。島嶼位置。至草木禽獸。礦物魚族。及所經由沿海人情土俗。捕採多少。商賈隆替。網羅之小冊子中。命曰千島探險。抑魯西亞。世皆此之攀鷺百鳥。爭脫其暴。攫歐米猛虎也。其視耽々。不噬東洋不措。笹森君嘗曰。西比利亞鐵道一竣。其功乎。猛虎攀鷺。欲各逞其慾於東洋。然則我千島實當其

必爭之衝。余亦曰。千島豈管山崎役之天王山。既已入我版圖。東洋輸贏既決矣。今而余知魯之大悔樺太交換也。今夫熟睡者可澆水而警醒焉。乃至醉生夢死非永所能警醒也。嗚呼我千島所關如此。其大矣而四千萬同胞。如醉如睡。袖手傍觀。至今日。不爲猛虎擊鷲所攫去。抑幸而已。樺太交換以後。踏查本島者。除片岡侍從一行外。惟有本艦實測。笹森君隨之。至其搭端舟欲航東察加之一言。豈無傷公子輩所能企及。余益信其滿腔熱血一身皆膽也。今郵報其公之世。一喜聳聽我奇傑之士。一喜警醒醉生夢死而不悟者。我千島其庶幾乎無虞拓植將大起也。

明治二十六年弘前葛西於菟叙

自序

千嶋の實地を踏査して其現状を目撃するに嶋の延長六百五拾海里これに接續せる嶋嶼二拾餘總面積凡一千三十方里にして此の地積及び沿岸の漁利は多く外國密獵者の特占する所となり而して曩に魯國と交換せる十八嶋四百四拾海里の群島は全く無人の郷にして一の土人も見る能はず以て其大概を推す可し按するに北海道根室港は北緯四十三度二十分にありて國境占守島は北緯五十度五十五分にあり千島群島は此間に横はるものにして氣候寒烈ならざるに非すと雖も魯領東察加は北緯五十三度〇五十八秒の氷海に沿ふて猶ほ能く「ペーダーゴースク」の首府を成し又露都「セントペーターズバルグ」は北緯六十度に位し冬十一月より春四月迄は堅氷封鎖して海路の交通絶無となるも猶ほ能く繁榮を誇り國勢宇内に雄飛せり然れば則ち北緯五十度以南の群島豈人類の棲息に堪へざるとあらんや否地球上南北兩極と亞非利加濠

太利亞の内地將た西伯利氷海地方を除くの外は復た斯る良土にして斯る状態に在るものゝ比すべきなきは勿論今世記宇内の形勢は亦決して之れあるを許さざるなり更に近く對岸の魯領を見れば樺太オコック東察加等魯都を距ると數千里而も西伯利亞の大漠荒野を隔つるにも拘はらず海陸の警備能く整ひて寸時も油斷あることなし嗚呼何ぞ我か千島群島を外人に委棄すると相似ざるの甚だしきや我か

聖明なる天皇陛下爰に叡慮を勞せられ昨明治廿四年を以て片岡侍従を特派し給ひ千島群島の實況を踏査せしめ給ふ海内の臣民誰か恐察し奉るに堪へんや特に立法行政に任する者叡旨に奉答ずる所以を熟慮せざる可らず然りと雖も專制の時代に在ては經國の責一に當路者に歸す可くも立憲政体に在ては天下公衆と共に任せざる可らず故に書中間を既往の事に涉るあるも以て政府を攻撃せんとするには非ず既

往の得失に鑑みて將來公衆と共に其の宜きに處せんと欲するのみ此等國家の要務は須らく黨熱政争の外に講究して特に其の海陸の警備を嚴にし國境に島廳を置き及び交通の便を開く等は實に急務中の急務たる可きものならん讀者幸に之を杞憂となす勿れ

世に一種の論者あり北海道は北鑰の鎖門千島は北海道の又鎖鑰なり急に拓植に従事せざる可らずと有志者また之に附和して千島遺利多し徒手以て萬金を一攫す可し云々予其壯圖を喜と雖も其の之を畫するに順序を守り且つ邊境の事最も慎重を要するの一事は深く注意あらん事を望まざるを得ず聊か附して記す

青森縣弘前市長坂町

明治廿五年十二月

笹森儀助謹識

目次

千島群島航路畧圖

根室國記

千島總論附沿革

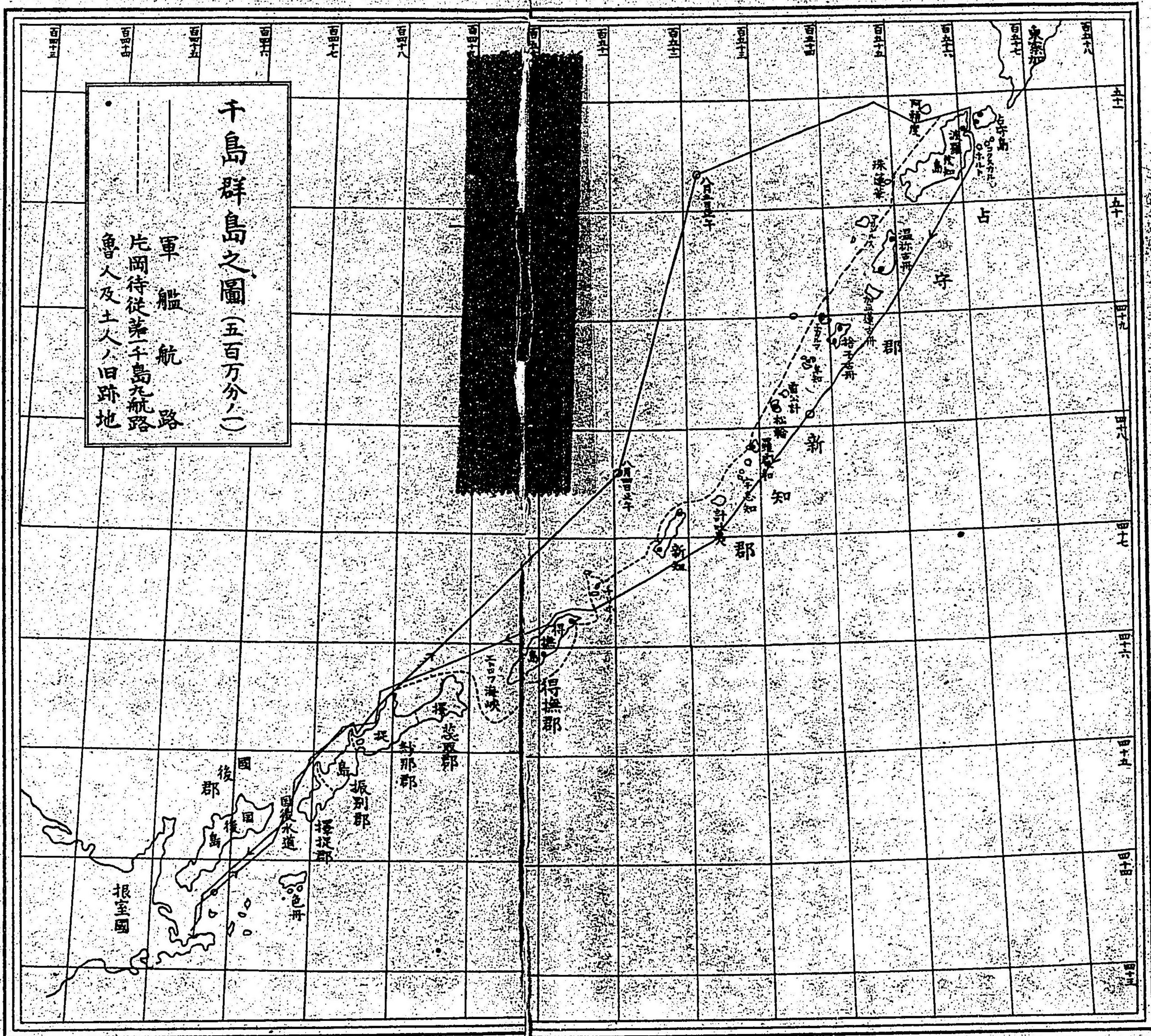
擇捉島

占守島附片岡侍從公探險ノ概況

各島別記附東察加畧記

結論千島群島警備私見

止



千島探險

第一

探險中ノ事實并沿革大意

別ツテ二項トス

第一項千島群島ニ關スル事付根室國ノ下

第二項北海道ニ關スル事此項ノ著後ニ譲ル

第一項

明治二十五年六月二十二日北海道探險トシテ起程同十月十五日蘆中告乏不得止一先
ツ歸縣セリ日數凡百十六日間トス内チ在艦六十一日五十五日ヲ陸行トス

發端

我家固ヨリ貧シ而シテ年壯ニシテ遠遊ノ志アリ就中明治十五年ノ春以來矮陋ノ舍ニ
盤居シ家族ト共ニ粗食ニ甘シ飲酒ヲ廢シ明治十七年ニ至リ常盤野牧場ニ遁寓シ一層
節約ヲ爲ス初メ郡長ヲ辭シ十四年十二月以來毎月必ス二十錢或ハ三十錢ノ貯蓄ヲ爲

二
不拾五年農牧社創立以來薄給アルヲ以テ其十分一ハ社約ニ從テ貯蓄シ一層又一層節
儉ヲ事トシ餘裕有ル時ハ月ニ一圓ヨリ五圓ニ至ル貯蓄目的ヲ立テ拾圓ニ滿ツレハ之
ヲ拂戻シ別ニ確實ニシテ利子ノ多キニ托シ昨廿四年一月一日ノ計算ニハ元利金合シ
テ貳百餘圓トナル爰ニ於テ昨春ヲ以テ先ツ伊勢太廟ヲ拜シ遂ニ日向ニ向テ旅シ祖宗
興起セル霧島山ノ頂キニ登リ祖宗ノ神靈ヲ感拜シ本年ハ北海道ヲ跋涉セント欲シ二
月十八日社用ヲ帶ヒ上京ス政府千島探險艦ヲ發遣サルハノ舉アルヤヲ傳聞セリ竊ニ
謂ラク北海本道行ヲ明年ニ譲リ先ツ千島ヲ探險セント其意ヲ當路者ニ陳ス四月六日
(我が帝國議會) 歸縣ノ路ニ就キ歸縣以來天未明ニシテ起キ菜圃ニ從事シ股引半天ヲ平常
ノ服ト爲ス外ニ出レハ草鞋山野ヲ跋涉シ或ハ飢渴ヲ耐忍シ或ハ風雨ニ淋沐シ以テ健
康ヲ一途ニ企ツ同六月十二日東京ヨリ電信アリ軍艦千島行キ定マル彌行クカ何分ノ
報知アント(六字)予希望ノ返信ヲナセリ同十五日其手續及願書差出方等(百五)ノ電報ヲ
發シ海軍大臣ノ許可ヲ得タリ時ニ知人アリ歸期其指目スル處ノ地ヲ問フ余曰フ囊裡ノ
有ラン限リ生命ノ續ク丈決行スル心得ナレト時ト場合トニ由リ或ハ函館ヨリ歸ルカ或
ハモロタン(札幌)ヨリ歸ルカ或ハ根室千島國境ヨリ歸ルカ豫メ期シ難シ予ガ志望既ニ

十、余、年、前、ヨ、リ、ア、リ、ト、雖、再、未、ダ、ニ、レ、テ、實、行、セ、ザ、ル、ニ、容、易、ク、コ、レ、テ、云、ハ、ハ、人、ヲ、欺、キ、言、ヲ、
食、ム、ノ、耻、ズ、ル、ヲ、恐、ル、ハ、ナ、リ、假、令、幾、回、死、生、ノ、間、ヲ、往、來、ス、ル、モ、幸、ヒ、ニ、我、カ、祖、宗、ノ、靈、ニ、依、
テ、僅、カ、ニ、生、命、ヲ、全、シ、テ、又、諸、君、ニ、見、ル、コ、ト、ヲ、得、ハ、幸、甚、ニ、耐、ヘ、サ、ル、ナ、リ、ト、

二十五年六月二十二日午後一時弘前出發六時青森着此日用具携帶ノ大要ハ冬洋服外
套襦袢一週間ヲ支ヘル干飯別製ノ草鞋筆墨紙參考圖書類ヲ主ナルモノトス

二十三日前九時縣廳へ出頭長官出京中ニテ書記官ニ軍艦乗組ノ由ヲ語リ願書ニ添翰
ヲ附セシメトテ請フ此行弘前青森ニ於クルモ出發テ一二ノ知人ニ面語スルノミ實
ニ脱走人ト異ナルナシ午後九時流船某號ニ上ル

二十四日前六時函館へ上陸巖キニ數回國家ノ爲メ千島探險ニ關シ斡旋スル知已ニ向
テ謝狀ヲ送ル

二十五日區長代理井川武策ヲ訪ヒ予千島探險企ツル茲ニ年アリ今日初メテ實施スル
ヲ得タリ何ノ喜ヒガ之ニ加ヘン如何セン牛ノ後ニ鞭ヲ執ルト圃園ノ蔬菜ヲ鋤ク如
キハ多少手心アルモ北海道ノ現時ハ水産ヲ以テ主要トナス况ンヤ絶島ノ千島オヤ
見ルモ聞クモ所謂馬ニ小判ノ譬ヘト異ナル無シ未タ意胸ノ安メル所ヲ知ラス敢テ

教ヲ請フト同氏一二漁業ノ實況ヲ語リ尙ホ本年道廳出版ノ北海道水産豫察調査報告ナル一冊ヲ惠與セラル曰ク之ヲ一見セハ思ヒ半ニ過ルモノアラント

二十六日南北代子ヲ杉浦ノ別荘ニ問フ萬目成明旅亭ヲ訪ハル成明ノ厚意ヲ以テ北水協會幹事齋藤承明カ沿海漁業家ノ重ナル人ヘ充テタル保證狀及紹介狀ヲ得タリ旅中實業家ト面晤ニ際シ親密ニ取調ノ益ヲ得タルハ實ニ少ニアラサル也

二十七日北代子ヲ訪ヒ談千島ニ及フ同子云フ嘉永安政ノ頃藤田東湖ノ徒國防ヲ論スル必ス千島ノ探險ニ及フ其精神ノ凝ル處發シテ詩歌トナル其一ヲ言フモ玉鉞ノミチノク越テ見マボシキ蝦夷カ千島ノ雪ノ明ホノ下然リ而シテ其志ヲ達スルコト能ハ

ス余東湖ノ爲メニ浩嘆セサルヲ得ス圖ラサリキ天運巡還今日其實事ヲ君ニ於テコシテ見ントハ實ニ國家ノ爲メニ之ヲ慶セザルヲ得ス唯人間ノ死再度ナシ死生誓テ其精神ヲ貫徹シ其素志ヲ挫折セズンハ余カ君ニ望ム所既ニ滿ツト

函館千島義會支部ニ至リ岡本監輔ト面會ス同氏ハ東京ニ於テ數々面識アルノ人ニテ義會加盟ヲ勸ムル一日ニ非ス本日又々義會所有船占守丸へ乗レヨト云フ予曰フ拙モ四拾八歳既業ニ初老ヲ過クルノ身ニシテ未タ一見モ遂ケサル千島ヲ談シ我蹉

蹟ハ固ヨリ期スル所他人ヲ誘導シ萬一人ヲ誤ラハ亦タ何ヲ以テカ世人ニ見ルノ言語アラソヤ是レ從來堅ク執テ動カサル所以ナリ且ツ貴老(岡本翁)モ老年實歴アリト雖也亦是一官員ノ類ナリ身親ヲ漁業ニ從事スルニモ非ス名實齟齬ト云ハサルヲ得

ス貴老ノ爲メニ計ルニ貴老ハ主トシテ千島拓殖ノ唱道ニ從ヒ盛ニ聲援ヲ張リ大ニ全國ノ人心ヲ興起セシムルニアリ拓殖漁業ノ如キハ第二ノ演伎ト謂ハサルヲ得ス宜クユンテ北海道中有力家ニ讓ルヘシ唱道ト實行兩々相待ヲ始メテ完全ナル拓殖

漁業ノ實蹟ヲ見ルヲ得ベシ况ンヤ率キユル所ハ大概壯士連ナリ困難ニ處スルハ固ヨリ覺悟ノ前ニシテ假令百雜ヲ經タリト謂フモ予コレヲ異トセザル也所謂千島拓殖ノ先鞭ハ主唱ノ貴老ト二三壯士ノ外ハ皆漁夫ナラサレハ甚不可ナルモノ有リ徒

ニ拓殖會社ノ如キヲ名トシ坐食談等ノ徒ハ不必用ナリ万一理論家若手ニ出ル様ナレバ決シテ其拓殖ノ實業ヲ全フスルコト能ハサルハコレヲ全國實業隆替ノ實蹟ニ

徵シテ歴然ヨリ然ラハ則チ本港ヨリ占守丸ヲ徒航セシムル如キハ中止可然岡本翁曰ク虎穴ニ不入ノハ虎子ヲ得ス實業ニ千島ニ就カスノハ焉クニカ大事業ヲ成ステ

得ンヤト翁遂ニ予カ言ヲ用ズ余ハ千島拓殖前途ノ爲メニ遺憾トセサルヲ得ス辭シ

二十八日北代子ノ紹介ヲ以テ栖原ノ元支配人若松忠次郎ヲ訪テ同氏ハ本籍東京々橋區新榮町五丁目三番地ニシテ函館ハ其出張所ナリ年五十餘少壯ノ時ヨリ漁業ニ從事シ過ル十七年頃栖原家々政困難ニ際シ改革ヲ委任セラレ奮挺從事シ遂ニ營弊ヲ一洗シ能ク一段落ヲ終ヘ昨年某ノ月ヲ以テ退身セリ同氏ハ「エトロフ」島ニ居ルコト五十年ナリ十九年該島ノ内「ヤマンベク」港ヲ發見シ今ニ至テ漁船東風ヲ避ケ得ルノ良港ト爲レリ若松氏ノ談ニ曰フ初メ七年ノ頃栖原家「ウルツ」島ヘ漁場ヲ開キ二十餘人ノ漁夫ヲ移セシニ年ヲ出スシテ十二人迄ヲ病死セリ世論囂々毒水飲用ニ起因スト何ゾ圖ヲノコシ全ク當時未タ防害除得ノ注意粗漏ナリシニ因ラントハ別ニ惡水アリテ人ヲ害スルニアラス但航路便ナラス万品運賃高度ニ達シ損得相償ハザルヨリ遂ニ次年ヲ以テ廢場トナセリ昨廿四年根室ノ九本ナルモノ其殘礎敗屋ヲ基トシ漁場ヲ再興セルモ既ニ數千金ノ損ヲ來タシ本年又々繼業シ怠ラザルモ恐クハ鉅利益ヲ博スル亦難カルベシ若松氏又タ云フ「ウルツ」島ニ對シテハ全島ヲ借受シコレヲ二ニ分ツテ若シ黑狐ノ繁殖ヲ計ラハ數年ノ後ニ必ス大ニ見ル可キ者有ルヘシ黑狐

ノ皮一枚其價二拾五圓ニ下ラス故ニ該島ニ就キ其繁殖改良ヲ計リ一產物トスルヲ得傍ヲ漁業ヲ兼テナバ始メテ生活ノ本ヲ建ルヲ得ヘシト

又タ曰ク千島ヲ開クハ先ツ航路ヲ開クヨリ急務ナルハナシ六月ヨリ九月迄毎月一回ツ、ノ通航トナシ國費若シ之ヲ許サスンバ四月九月二回ノ航路丈ク保護アレハ漁業ニ着手スルノ人モ出ルハ必然ナリト

二十九日
三十日

北代子ニ就キ禪道ヲ質議ス曰ク道元云フ儒佛二ツナシ死生亦タ何ノ疑ヒアラソ

七月一日
博物館ヲ覽ル

二日今曉磐城軍艦入港ス同艦ハ客月二十六ヲ以テ品海ヲ拔錨スト午后二時艦長柏原長繁ヲ本艦ニ問ヒ初メテ面會ス疊キノ電信ノ通報ニ從ヒ左ノ書面ヲ提出ス

千島探險軍艦乘組願

儀助一介卑陋ノ野民ナリト雖モ聖朝ノ恩波ニ沐シ生テ兩間ニ享クルヲ得ル者其聖德

廣大ナル天地ノ間ニ比スヘキ者ナシコソカ報効ヲ圖ラント欲スルモ蟻蝼ノ資其道ヲ知ラス獨リ北海無人ノ境ニ渡航シ衣食住ノ元資ヲ探窮シ國家万一ノ報効ヲ謀ラントスル久シ矣然レ千島ハ北海ノ極端ニ僻在スルノ地ナルヲ以テ渡航ノ便ヲ得ル能ハス儀助常ニ以テ遺憾トスル所ナリ幸ヒ今度御省ニ於テ同島探險ノ軍艦ヲ發スルノ報ヲ得欣喜措ク能ハズ故ニ奮フテ同島ニ航シ實地ノ調査ヲ遂ク更ニ計畫スル所アラント欲ス何卒特別ノ御詮議ヲ以テ自費乘組御許容被成下度此段奉願候也

青森縣弘前市大字長坂町拾番地

士族 笹森儀助 印

明治二十五年六月

磐城艦長柏原長繁殿

朱書ニテ

願之趣允許ス

印

明治廿五年七月二日

本省大臣ノ傳達ニ依リ拙者ヨリ免許ノ證ヲ附與スト云フ

本艦ノ艦長(元津浦藩士天性其學自重曾論ヲ好マス頗ル能ク部下ノ信親ヲ得タリ且ツ號令嚴

醇ノ常トスル所ナリ今度ハ少シモ其艦ナク軍艦ノ操テナ以下水兵共百拾二名ノ定員其

他便乘ニハ札幌電信建築所長吉田正秀技手蘆谷貞次郎同地ヨリ千島ノ中ニトロフ

「クナシ」根室へ海底電信建築取調トシテ又東京ヨリハ日本新聞社員大我居士櫻田

文吾(元仙臺藩士盛キニ大坂東京ノ貧民ノ集積探窮ストシテ妻ヲ扮シテ餘財ニ變シ)他二名ハ

千島義會ノ壯士ニテ石原弘(武州川越)森勘介(九州大分縣)

本艦ハ明治十一年我カ横須賀造船廠ニ於テ悉皆日本人ノ手ニテ始メテ造船ノ効ヲ

顯ハシタル者ニテ平時速力一時間八海里馬力四百七拾九噸數七百零八長二拾五間

巾四間三尺内車ニテ三本ノ帆柱アリ形小ナレモ構造堅牢也

三日辯南陸氏ヨリノ信書ヲ大我子ヨリ落手ス披見スルニ大意先ツ今回ノ壯圖ヲ祝シ

次キニ探險ノ綱領條目ヲ惠答セラル其要領左ノ如シ

一境界及廣袤(島ノ周圍里數)

二海岸

三氣候及風土

四山岳及河川

五湖沼

六產物 海産、林産、礦産

七草木禽獸ノ種類

一人種及風俗

二管理方法

三言語及衣服

四生業ノ風

五家屋

六宗教

七種々ノ慣習

一歴史(薩人又ハ他ノ外國人來リシ時代ノ如シ)

二傳説(義經トカ神孫トカ天照ノ御孫トカ)

三實蹟(薩ノ業トカ誰ノ陣屋トカ日本役人ノ住所トカ)

一航路ノ難易

二陸行ノ難易

三牛馬運搬ノ便否

四舟車ノ有無

五根室迄ノ里數

爾來日々大我居士ト相謀ル艦中ハ席ヲ同フシ上陸ハ室ヲ共ニシ大ニ探險行ノ益ヲ得タリ

四日谷地頭ノ温泉ニ於テ北代子ノ盛衰ヲ受ク平常ナレバ紅裙能ク酒間ノ快ヲ添ユ三弦能ク坐上ノ興ヲ加フルモ今予聊カ決スル所アレバ別ニ面白モナクレバ不粹ノ者ト冷評セラレシモ辭スルノ外ナシ而シテ談論ノ中別ニ自ラ眞快樂ノ存スルアリ誰カ能ク之ヲ知ラン

五日雨午前九時乘艦北代子岡本監輔唐牛撫四郎波止場迄送ラル(同氏深キ交際ナキモ予ヲ以テアル)夏衣ハ悉皆旅宿ニ托シ冬服ノミ携帯ス艦員一統ハ面ス后チ分隊長ヨリ船中心得要事ヲ示サン釣床一箇ヲ渡サル其形苴ノ兩端ニ緒ヲ付タルニ似タリ製ハチ

二百九十五海里... 艦長予カ老身ナルヲ憐ミ特令ヲ以テ直チニ上陸ヲ命ジボト下ヲ以テ送ラル餘ノ便
乗者ハ皆テ翌朝ニ至リ上陸ヲ許サル

十一日大我居士及義會ノ二人共ニ上陸

十二日小雨正午七十一度石郷岡準(地理課在勤)氏ノ厚意ヲ以テ一ヶ月金七圓ノ下等

下宿屋ニ寓シ大我居士ト同居ス議會ノ二人ハ艦中ニ宿泊ス

十三日午前五時六十五度正午六十九度是ヨリ大我居士ト手ヲ別テ郡役所警察署大日

本帝國水産會社等ヲ訪ヒ千島ニ關スル事項及密獵船等ノ事ヲ私偵ス

外國密獵船ハ厚岸港ニ度々寄港スルモ當港ニハ來ルヲ稀ナリ何トナンハ本港ハ所

謂大場ニシテ屯田兵警察署裁判所等アルヲ以テナリ

市中ノ論評ヲ聞クニ曰ク昨夏モ千島探險密獵船取締トシテ軍艦海門號來ルモ一ク

月ノ中根室ニ二十日位色丹島ニ十日位ノ碇泊新知島ニ航スルハ一回ニ不過况ンヤ

千島諸島悉ク巡航セザルヲヤ然ラハ則チ外國密獵船取締ハ只名目ノミニシテ假令

外國密獵船ト認ムルモ彼ノ暴擧ヲ憚ルガ如ク何ノ益カコソ有ラント頗ル不信用ノ

態アリ

又タ水産會社出張所ニテハ水夫(同社臘虎獵ノ特權ヲ得テ密獵内外船)ハ元ヨリ出張

役ト申合セ己シカ獵獲ノ臘虎ヲ外國密獵船ニ一枚若干ノ貴價ニ賣拂ヒ之ヲ分配ス

本社ノ収入僅少ナルモ固ヨリ怪ムニ足ラストノ風評アリ又タ色丹得撫島ニ該社ヨ

リ取締所ヲ設ク派出員アルモ取締ノ實効寡ナシト右等ノ事既ニ當地方新聞ニ掲載

シアルモ取柄等ノ請求アルハ毫モコレ無キガ如クナレハ密獵者ハ白晝強盜スルモ

孰シカ我ニ敵スルモノソト云フ意氣ヲラシテ信ス隱

外國密獵ハ大概木製ノ帆ナレ船中ニハ大砲小銃劍戟等ノ武器十分備ハリ二三ノ

巡查ヤ水産會社ノ船員ノミニテハ取締ハ爲シ難キハ固ヨリノ事ニシテ若シ我ヨリ誰

何スル有ラハ其ノ慶トナルハ必然ナリ之ヲ聞ク昨夏唐太餅出稼ノ日本船歸航ノ際

他國ノ巡邏船様ノモノ一艘密獵船ト聞ヒ遂ニ密獵船ノ大砲ニ射撃セラレ沈没セリ

他國ニシテ如此ナレバ况シテ我ガ現今ノ取締法ノ實行セラレザルハ眞ニ其謂ヒ無

キニアラヌト云フ風評アリ

三上某(舊見島)昨年中ヲ厚岸郡書記ニ奉職シ海産ニ從事セシ人トヤ同氏ヲ

記ニ十六年中我カ千島ニ密獵外國船ノ入ルモ拾六艘ト私ニ疑ヌ現今獵虎取締
 法ヲ設ケテ内國人密獵スル者アレハ直チニ法ニ從テ處分スルモ却テ外國密獵ニ對
 シテハコレヲ見テ見サレカ如シ内地人乃チ我カ臣民ナラスヤ何ソ我カ臣民ニ對シ
 テ酷甚ニシテ彼ニ對シテ寛假ヲ與フルヤ由是ニ以テ觀レハ獵虎アリテ然後如此
 ハ不都合ヲ來スナリ若シ獵虎盡キレハ密獵自ラ止ムヘシ故ニ現取締法ヲ全廢シ彼
 我競争從事セシメバ數年ナラスシテ獵虎盡キレ如斯クハ我同胞刑罰ヲ免レ隨テ外
 國密獵船モ自ラ來テサレ可シユレテ一舉兩得ノ策トス之ニ反シテ彌現法ヲ存セシ
 下欲セバ宜ク内外人ノ別ヲ十分ニ取締法ヲ實行スルコトヲ希望スト云フ眞ニ止ム
 ヲ得ザルコト言ニシテ其衷情ニ立入レハ痛哭流涕スルモ猶足ヲサルモノ有クモ
 布告第十六號
 自今北海道ニ於テ獵虎并オツトセ獸ヲ獵獲スルヲ禁ス侵ス者ハ刑法第三百七十三
 條ニ照シテ所斷ス尙ホ其獵獲物ヲ沒収ス之ヲ賣捌ケル者ハ其代價ヲ追徴ス但農商
 務省ノ特許アル者ハ此限ニ非ラス

明治十七年五月二十三日

同シク十八年四月二十三日根室縣戌第二十一號達

別番ノ通り内務卿某ヨリ達相成候事

海軍省

根室縣下千島巡視トシテ年々壹回軍艦派遣可致此旨相達候事

但軍艦巡視ノ儀内務省協議ノ上密獵取締可取斗事

十八年三月十六日 太政大臣公爵 三條實美

同シク二十二年五月十日北海道廳令第三十五號

明治十九年十二月北海道廳布達甲第十五號獵虎并臘肭獸獵取締手續左之通改正
候事

第一條 臘虎臘肭獸獵取締期限ハ毎年四月十五日ヨリ十月三十一日迄トス

第二條 獵區域ハ千島ノ内得撫以東占守島以南ノ各島トシ左ノ三區域ニ分チ毎年

一區域内ヲ限リ獵業セシム

第一區 得撫 知理保以 フテトチエルポエー 撫郎頓 牟知 知林古丹

雷古計

合シテ七島

第二區 新知 計吐夷 宇志知 須禮吐宇波 羅處和 松輪

合シテ六島

第三區 捨子古丹 越輕磨 加亞連古丹 温稱古丹 阿字遠須 磨勘留志

占守

合シテ拾二島

第三條 獵船ノ名號噸數乘組人名ハ出獵ノ際根室若クハ千島色丹獸獵取締出張所

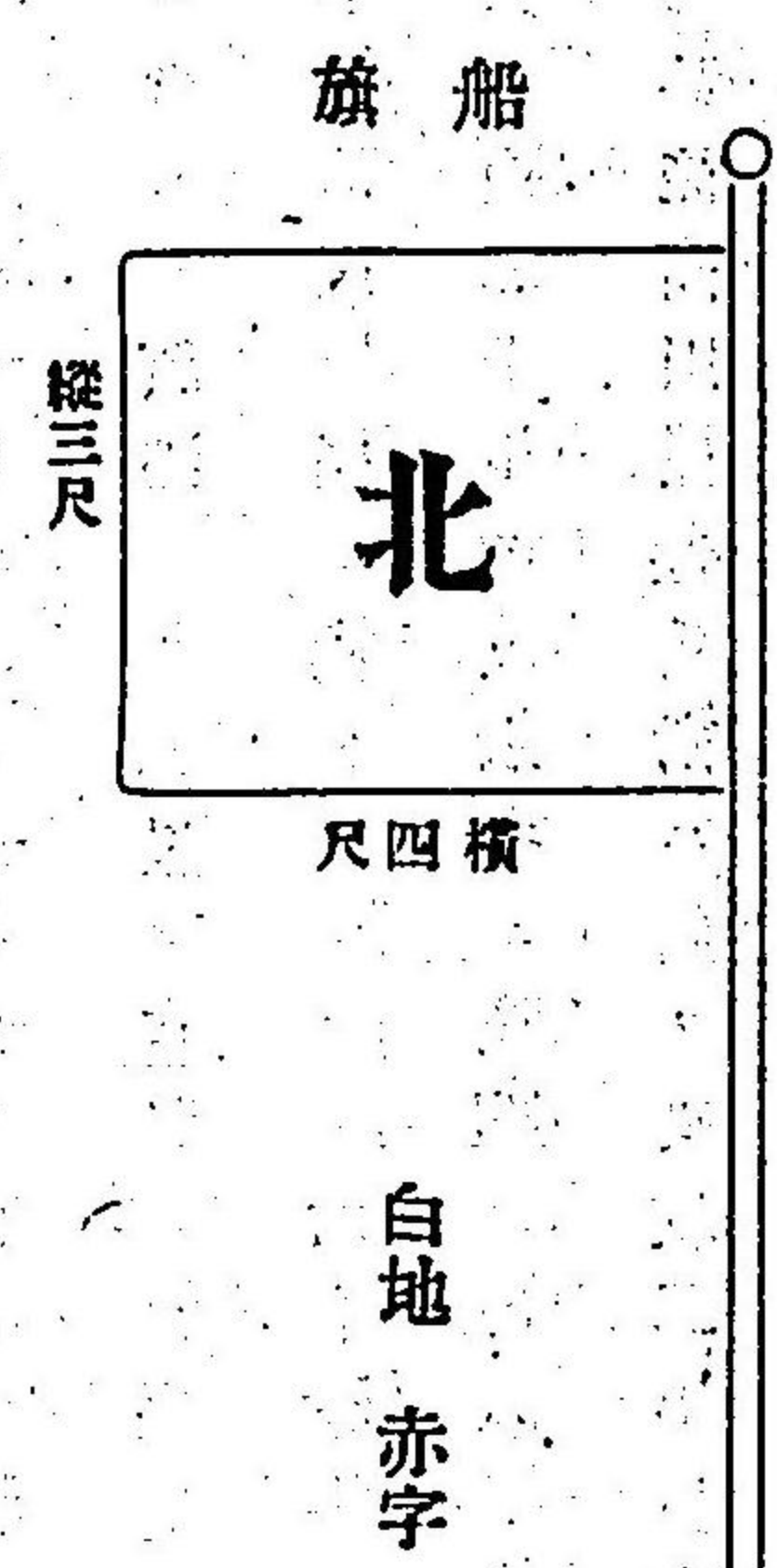
ヘ届出検査ヲ請フヘシ

第四條 「ラツコ」并「オット」セ獸獵取締出張所ニ於テハ第三條ノ届書ヲ検査ス無相違

時ハ左ノ雛形ニ示セル船旗ヲ交附スヘシ

第五條 獵獲セル生皮ヲ輸出版賣セントスル者ハ現品ヲ根室若クハ色古丹并取締

出張所ヘ差出其檢印ヲ請フヘシ



北海道廳令第十一號

過ル二十一年當廳令第三十五號「ラツコ」并「オット」セ取締手續左ノ通り改正ス

第二條 獵場區域ハ千島國得撫以東占守以南ノ各島トス右ノ内左ノ三島ヲ蕃殖地

ト定メ該蕃殖地ニ於テハ獵業ヲ禁ス

國後 色丹 擇捉

按スルニ根室國ハ北海道ノ一部ナレバ本道調査ノ項ニ記載スベキハ順序ナレバ
苟モ我が千島群島ヲ經營スルニハ現今ノ形勢該國ヲ以テ基本トセザレバ勢ヒ爲シ
難キモノアリ然レ後來拓殖ノ順序立ツノ時ニハ横濱箱館港等ヨリ直航シテ根室ニ
求メサルヲ得ルニ至ルノ時モナシトセス今ハ然ラス依テ根室國ノ統計ヲ附記ス職

者之ヲ了セヨ

十四日

根室國

根室國東ハ海ヲ隔テ千島國國後島ニ對シ(根室港ヨリ國後島泊村ヘ二十三海里色丹村ハ海里)南ヨリ西ハ釧路國ニ隣リ北ハ北見國ニ界ス東西凡十九里十八町南北凡二十九里二十七町

地勢納紗布岬東南ニアリ知床岬東北ニアリ恰モ兩翼ヲ張ル如ク野付灣其中ニ當ル(野付國後ノ最近ノ海峽三里ニ過キス)現今ニアリテハ千島渡航ノ要津也

沿海六拾壹里土地肥沃ニシテ漁利多シ號シテ東部第一ト爲ス冬春ノ間風濤流水斷多クシク航海ニ便ナラス明治十八年花咲郡花咲港ニ波止場ヲ築キ冬期中定期航海ノ用ニ供セリ該港ヨリ二里ノ陸運ニテ根室港ニ達スルヲ得ベシ傳ヘ云フ根室ハ寛永九年松前氏里程ヲ量リソレヨリ六十餘年ヲ經テ元祿中松前氏ノ政教此ニ漸及シ今ヲ去ル百二十年前安永中ニ飛驒ノ民久兵衛始メテ稅鋪ヲ建テ享和中材木屋七郎右衛門其後高田屋金兵衛ニ代リ文政二年勤番所交代長屋倉米廩各一戸民戸十一人

口男女三十六土人戸數三十二コイト井ニ砲臺ヲ築キ天保三年藤野喜兵衛十年山田文右衛門弘化二年白鳥宇兵衛嘉永二年藤野某ニ屬セリ寶曆以前ハ商船未ダ根室ニ至ラズ根室國後等ノ貨物ハ皆釧路國霧多布ニ於テ交易ス故ニ該時ハ根室國後等ヲ總稱シテ霧多布ト唱フト云寛政十一年正月箱館奉行ニ隸ス野付根室標津ニ官署ヲ設ケ榜文ヲ揚ク文政四年十二月再ヒ松前氏ニ復シ安政二年二月又函館奉行ニ隸ス六年九月伊達氏會津氏ニ賜フ明治二年根室國ヲ置キ五郡ニ分チ四年八月開拓使ニ隸シ五年九月根室支廳ヲ置キ十五年根室縣廳ヲ置キ十九年今ノ道廳ニ隸ス測候所ニ至ル測地ハ(根室郡花咲町六丁目北緯四十三度廿)所長諏訪某(舊仙臺藩士族)ト面談シ予カ携フ處ノ寒暖計測定ヲ依頼ス後一週間(冰点ハ結氷ヲ以テ沸騰點ハ)左ノ證明ヲ與ヘラル

某示度ヨリ器差ヲ減スレバ準基ト同度ヲ示ス

示度	器差
32.5	-0.5
48.2	-0.6
62.3	-1.5
66.1	-1.9
73.8	-2.1
78.1	-2.3
83.0	-2.7
87.8	-2.8
92.8	-2.6
平均差	-1.9

寒暖計比較證

二十四年中官報攝氏最低最高溫度(該數ハ九ヲ乘ソテ五ヲ以テ除シテ得)

廿三年 溫度				
地名	平均	最低	最高	
東京	一三、七	九、三	一八、五	
函館	八、五	四、二	一二、四	
根室	五、九	一、八	九、五	
青森	九、〇	五、二	一三、三	
札幌	七、一	二、一	一二、〇	
宗谷	五、九	三、〇	七、八	

(備考) 攝氏十度九分ノ五ヲ乘タ三十二度ヲ加ヘ以テ五十度トナル
 所長又曰フ函館ヨリ古守島ヲ推測スル時ハ大凡平均五度位ノ差トナルベシト
 又云フ一少年平均溫度攝氏零度ノ地ニハ樹木生長セスト
 又云フ根室雨量平均一少年二尺八寸内地ハ大凡六尺ニ當ルヘシ濕氣ハ是ニ反シ内
 地ヨリ多シト

廿三年 年 度				
地名	初 雪	終 雪	初 霜	終 霜
上川	十月二十日	五月一日	十月四日	六月十八日
根室	十一月七日	五月六日	十月十九日	五月十四日
宗谷	十月廿八日	五月一日	十月廿日	四月九日
札幌	十月廿七日	四月十九日	十月四日	五月五日

積雪三尺ニ充テス一月ヨリ四月ニ至テ融解ス海水ハ海水直チニ凍ルニアラスシテ
 氷海ヨリ流漸來リ夫レハ海水雨雪混シテ沿岸ヨリ五六海里ノ間一面起伏波紋狀ヲ
 爲シテ氷海トナル

耕地ヲ一見スルニ水田茄子南瓜等一切ナシ怪テ問ヘハ右等ハ果實ヲ結モ好結果ヲ
 見スト云フ海邊一帶苹果梨モ結實セス其他ノ根菜類能ク生長シ野畑ノ夏大根馬
 一尺長サ一尺八寸ノモノアリ

舊縣廳ハ總二階ノ洋風模造ニテ高燥入地ニアリ新築ノ費用地形ヨリ内造作迄凡ソ
 九万余圓金ト云フ其斜角對ニ新築裁判所アリ何カ以テ舊縣廳ノ屋舎ヲ用ビスシテ
 故ヲニ如此ニ新築ヲ營ムヤ今ヤ九万余圓ヲ消靡シタル大屋舎徒ラニ狐狸ノ棲所ト

ナル真正ニ民力ヲ論スル者注意セシムルハアルヘカラス
或人云フ根室郡役所々轄五郡三島合シテ大凡五万人物産代金収入概計百万圓ニ下
ラス故ニ男女老幼ヲ問ハス一ク年一人ニ付テ平均金貳拾圓ノ生産力ニ當ル之ヲ内
地ノ生産ニ比スル時ハ富力ノ極ニ達セシト云フヘシト

和田村ノ屯田所ニ至ル根室郡役所ヨリ二里程第四大隊本部廳マテ戸數四百四拾余
云フ

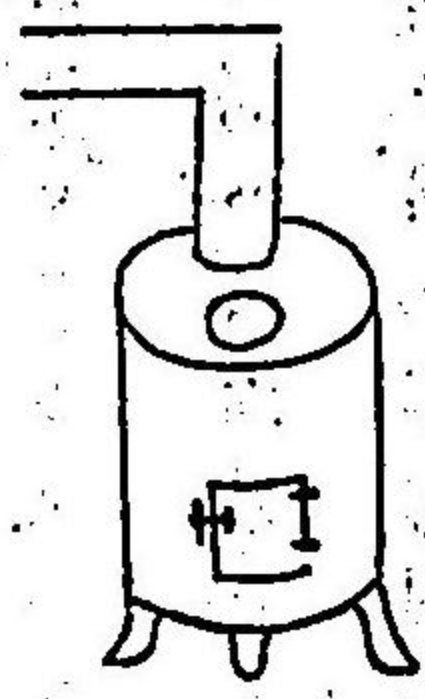
堰八主税ヲ訪ヒ(元藤崎村堰神社堰八段後ノ後ナリ現今下土官農積雪ノ實況ヲ問フ曰ク
乘現術ノ卒業生ニテ隊中壯者ノ一有志者ナリ)積雪ノ實況ヲ問フ曰ク
二尺ニ滿ツル希ナリ極寒ノ度ヲ問フ曰ク華氏ノ零度以下七度位ニ下ルト一少年一
回位アリ畑作大概衰頽ヲ見ル其故ヲ問フ曰ク昨年迄屯田俸米アルヲ以テ嚴ニ耕作ヲ
督責セル故ニ其爲狀現今ノ比スヘキニアラス本年ヨリ俸米給與セラルノ期約消滅スル
ニヨリ自ラ放任ニ歸スルヲ以テ如此ト元ヨリ當地ハ海霧ノ深キト海嵐ノ強キヲ以
テ耕作ニ適セス根菜類ハ毎年可ナリ其宜シキヲ見ルモ豆麥ニ至リテハ實収ヲ必ス
ル能ハス本國總テ農業退歩ノ傾キアリ現ニ本年ノ播種反別ハ前年ニ比スレハ殆ン
ト一割強ノ減少ヲ見ル故ニ進テ農業ニ從事シ生計ヲ立ントスルモノ殆ント稀ナリ

假令僅々ノ収獲アルモ其販路ノ困難ニ耐ヘス是以テ壯丁勞力ニ堪ル者ハ既ニ漁場
ノ雇夫トナリテ口糊ヲ計ルノ場合ニ至リタシハ耕地モ追年荒蕪トナルノ恐アリ
昨二十四年中屯田畑地壹反歩収獲ノ概畧左ニ示ス

- 大麥三斗
- 小麥九斗
- 裸麥四斗
- 蕎麥四斗
- 燕麥一石
- 大豆五斗
- 扁豆三斗
- 碗豆五斗
- 馬鈴薯廿五俵

右ノ内確實ニ毎年収獲ヲ見ルハ馬鈴薯燕麥大根ノ三種トス其他ハ年ニヨリ減少ア
リ殊ニ蕎麥大豆扁豆等此地ニ適セス又タ本年一戸ノ仕付反別ハ平均五反歩位ニ相
當ス

問フ如斯ハ屯田モ其實ヲ失フニ似タリ何故ニ郷里ニ歸ラサルヤ曰海岸數ヶ所ノ漁
場アリ數百万町歩ノ茂林樗櫟アリ協同收場アリ海利ト森林ノ収利以テ三年ノ凶荒
ヲ支ヘテ尙ホ餘アリ漁業期ニハ事ニ漁業ニ從ヒ尙ホ日ニ五拾錢ヨリ拾錢内外ノ雇
賃ヲ得ルニハ甚タ易々タルノミ故ニ老弱男女ノ別ナク皆漁業者ノ雇需ニ應ス故ニ
耕地ノ如何ヲ問ハス内地ヨリ遙ニ生計ヲ立ルノ餘裕アル所以ナリ
家内防寒ノ具ヲ問フ答露國製ノスト一箇ヲ用レハ家内中暖カナリ如圖



函館邊ニテ製造代價煙筒添テ金五
圓位真中ニ口ヲ明ク飯汁等ヲ炊ク
ノ用ニ供ス各室ヘ暖ヲ引クニ足ル

花咲山間各所ニ自費移民地數十戸アリ其多數ハ漁場ニ雇ハル其中一戸深霧有ルニ
モ拘ラス厭惡ノ色無ク夫婦ノ耕作スルアリ奇特ノ人ト思ヒ其耕地ニ至リ農夫ノ本
籍ヲ問フ答フ下總也ト余曰フ近傍ノ人擧テ漁場ニ出テ、傭賃ヲ取ルニ何ヲ苦テ此
瘠地ノ耕耘ニ努ムルヤト曰ク漁場ハ一時ノ利益アルモ又夕溺没ノ恐レアリ然シテ
容易ニ得ルノ貨ハ容易ニ耗費スルノ憂アリ我等夫婦ニテ三町歩余ノ畑ヲ耕シ三人
ノ子供ヲ養育シテ尙ホ毎年若干ノ貯蓄ヲ爲スト予屯田ノ畑ヲ見レハ荒蕪ニナシテ
シタル彼レカ如ク敢テ其故ヲ問テ云フ瘠土ニシテ耕スモ得失相償ハスト果シテ然
ルヤ否ヤ農夫冷笑シテ云フ屯田ノ畑ハ耕地ニアラス彼カ如クセハ肥地モ年ヲ追フ
テ瘠地トナラシ彼ハ終身耕スモ其利ヲ得ル能ハサルヘシト以テ知ル可シ官費ヲ頼
ム者ハ怠惰自費移民ハ勤勉ナルヲ屯田畑ノ日ニ荒蕪ヲ見ル豈怪ムニ足ランヤ
内國通運會社根室出張店取締役兼支配人對馬伍三郎ヲ訪フ(同氏ハ元弘前ノ人ニシテ)同氏昨二

十四年八月二十三日海門艦ニ乘リ新知島ニ至ル時ニ午前九時華氏寒暖計二十六度
陸地ニ雪アルヲ實見セリト該島ヨリ根室迄直航二十八時間ヲ要セリト

十五日

或曰フ屯田豫備隊ニ月給五十三圓ノ大尉一人三十八圓ノ中尉一人アリト然レモ無
給大尉一名ニテ足ル何ゾ如此ノ冗費ヲ要センヤ蓋シ冗費上ニ注意スレハ豈啻一大
中尉ニシテ止マランヤト又屯田銀行ハ二十五圓ヲ一株トス其組織ハ扶助料ヨリ成
ル舊來貸金ノ償還スルモノ無キニヨリ此企圖アリ賣買ハ屯田兵限リトナス其株金
滿ハ二十五圓ナルニ拘ハラス當時實際ノ賣買ハ一株代價拾五圓以内ノ卑キニ下落
セリ不信用モ又夕甚シト云フ可シ然レ是等ハ行員株主共協力改良ニ從事シアンハ
遂ニ改良功ヲ奏スル時アルヘシ

十六日

根室ヨリ

郵船會社下等一人ノ船賃

國後島戸長役場泊村へ

二十三海里

一人運賃金壹圓五十錢

色丹島斜古丹戸長役場へ

六十三海里

二人運賃金壹圓五十錢

同輸入品ノ重ナル物ヲ舉ゲルハ (一)米穀 (二)漁網及網糸類 (三)繩疋 (四)呉服
太物 (五)鹽 (六)金物類 (七)和洋小間物類 (八)和洋酒類 (九)煙草砂糖其他 (十)雜

貨類 (十一) 曹洞四ノ日蓮一 計九ヶ寺

同教會所黒住派一 大社教一 御嶽教一 大成派一 計四所其他ニ説教

教所一 教務支局一 若三由リ大概人民宗教ノ寄向ヲ洞知スルニ足ラン

西洋形帆船七艘四噸六十日本形五十五艘六千石解及小廻船二百五十六艘免稅船二千〇

三十三艘 學校根室市街ニツア其花吹小學校ハ明治九年ノ創立ニカ、ル梅ヶ枝町ニ

アリ郡村ニ五小學校アリ合シテ一國七校トス 入港ノ船數九百九十四艘内二百六十五艘ハ汽船トス其他洋形帆船及日本船トス

日用品平均相場 玄米一石 九圓五十五錢四厘 酒一石 十八圓十四錢八厘

味噌一石 十七錢三厘 醬油一石 十五圓五十八錢三厘

鹽一石 一圓六十四錢三厘 砂糖百斤 十圓〇〇八錢三厘

石油一圓 二圓三十八錢七厘 炭十ノ目 三十五錢

郡衙及警察費金貳万四千九百十四圓九十四錢四厘内二千三百七十一圓二十九錢ハ

内地旅費トス 十七日 夜大雨雷鳴強シ

知人皆云フ當港丸本柳田藤吉ハ全道卓越ノ人物且ツ千島群島ヲ一週セリ此人ノ外

ニ語ルベキノ人ナシト昨年ヨリ無人ノ得撫島へ試験トシテ漁場ヲ開ケリ外ニ成田

富太郎ナル者モ該島ニ出願中ナリ丸本ヲ訪フ之ヲ面會ノ初トス當地風指ノ大漁業

者ニシテ其ノ營山所千島ニ及フ同氏云フ昨午六月初ヲ得撫島へ二十五人ノ漁夫ヲ

送レリ場所ハトコタンニ許可ヲ得是ハ十余年前栖原角兵衛氏ノ開場ニシテ該時ノ

舊建物現存セリ初メ栖原氏二十五人渡海セシメタルニ漁夫十二人迄死亡シ爲メニ

廢業セリ必竟當初如此人ノ多ク死セルハ今ト稍異ニシテ漁船モナク万般ノ不便事

急ニ及ハス冬期ノ冬籠リ防寒食物ノ不十分ヨリ起リタルコトハ昨午水産會社

ノ漁夫三名冬籠リヲ爲スモ別ニ異狀ナシ故ニ昨年ヨリ試ニ開場セリ然ルニ夏秋漁夫ヲ往返ノミニテ四千圓余ノ運賃ヲ費セリ漁船ニテ天氣極宜シキ航海ニモ尙ホ二晝夜ノ時間ヲ費スヘク昨年季秋ニ及ヒ無人島へ多クノ漁夫ヲ居ク甚ク憂慮ニ堪ヘス數回郵船會社へ掛合ヒタルモ應セス去リトテ見殺ニモナシ難ク運賃ノ高下ヲ論セス漁船矯龍丸ヲ備切一日金二百五十圓下定メ(小ナル漁船ナレハ一日金百圓位ニテモ應スベシ)一週間ノ約ヲ結ヒ狂瀾怒濤ヲ冒シ漸ヤク漁夫ノミヲ乘船セシメ荷物ハ捨置キ僅カニ免レ歸ルコトヲ得仕込及運賃共九損同様ナリ昨年ハ時節後レタル故本年ハ早ク漁夫ヲ送レリ然ルニ本年モ又損耗セリト本年ノ損耗ハ既ニ大我居士ヨリ承知セリ右矯龍丸ヲ送ル前ニ一度社外漁船ヲ向ケタルニ二十日余ノ日數ヲ空費シテ人モ荷モ積マス毎日ノ激浪ノ爲メニ空シク歸レリ是ニ懲リテ二回目ニ矯龍丸ヲ送リタル次第ナリ問フ水産會社ハ帆前船ニテ獵業ニ從事セリ何ソ帆船ヲ用ヒスシテ船賃ノ高キ漁船ヲ要スルヤ曰獵虎船ハ其構造堅牢ニシテ通常洋形帆船ノ外別ニ數百金ヲ要スル設計豫算ニシテ通常洋船荷船ノ如ク多クノ荷ヲ積ムヘキ容積ナシ故ニ大抵ノ波濤ヲ冒シ進ムコトヲ得ルモ帆前船ハ然ラス春秋ノ候ニ至レハ進退便ナラス漁船モ尙ホ通航

ヲ憚ル况ンヤ風ヲカトシ走ルノ帆前船焉ソ切迫ノ期ヲ定メテ航スルコトヲ得ンヤ是レ大金ヲ要スルモ漁船ヲ備フ所以ナリ

又タ曰ク私モ明治十七年官備船ニ乘リ湯地先縣令ニ隨ヒ七月二十一日占守島へ土人引移ノ爲メ上陸シ平原ナレト三里ノ奥ニ入りタルハ尙ホ雪ヲ踏メリ土人云フ唯八月一ヶ月丈ク奥ニ雪ナシト其風濤ノ險ナル根室ノ春彼岸前後季ニ比スヘシ第一驚キタルハ數日ノ所謂時化ニテ上陸中ノ縣令ヲ棄テ、拔錨セント船員覺悟スル場合ニ至レリ然レモ豫テ若シボトト毀壞スルアレバ縣廳辨償ノ約アリシ故ニ無理々々ニモ縣令ヲシテ僅カニ乘船セシメタルヲ得タリ世間無謀ニモ無資カハ壯士輩某ノ會トカ千島探險トカ何トカ蚊トカ他人ノ懷中ヲカニシテ半分ハ義捐金ヲ募集シ千島開拓ヲト唱道スレト其實益ハ毫モ勿カルヘシ誠ニ國家ノ爲メニ盡サントナラハ先ツ獵船數艘ヲ組ミテ一体トナシ船大工ト經歷ノアル漁夫五名也十名也ヲ軍艦ニ便乗セシメ一兩年モ越年シテ漁獵ノ傍ヲ取調致サズハ何ノ功用モナカルヘシト信セリ

又タ曰ク魯國ノ國情ヲ見ルニ日本人千島ヲ等閑ニ附シ其開拓ヲ一日モ遲延スルハ

彼等ノ希望スル所ナルヘシ爰ニ至レハ日本人ノ資力ノ薄弱ナルハ實ニ痛嘆ニ堪ヘサルナリト今日千島開クヘシト唱フルハ大抵無資産ノ士族ナリ偶々資力アル人ハ手ヲ袖ニシテ傍觀ス是天下ノ通患也

十八日 正午七十度

本日測候所ヨリ予カ寒暖計ヲ測定メ送ル依テ本日ヨリ之ヲ用ユ

十九日 正午七十七度

午后六時對島伍三郎方ヘ大我居士ト共ニ行キ覽セラル初メテ色丹土人(元占守島者)及同島戶長和田良成(鹿兒島士族也)ナリ同氏ニ同島ノ形狀ヲ問フ答フ此土人九十七名ハ明治十七年七月十一日占守島出帆(船也)五晝夜ニシテ今ノ色丹島ヘ上陸ニク所ニ分村シ是ヨリ無人ノ色丹島土人ノ居住地トナル

是ヨリ儀助土人ノ酋長ヤコブ副役イヨント懇意トナル時々千島ノ實況ヲ聞クヲ得タリ

二十日 正午七十度(正午ノ表度ニヨル以下之ヲ略ス異時ノ測定ハ特ニ掲ク)

曩キニ大橋順吉來訪本日往テ答禮ス其父年五十余三十余年北海道ニ住シ漁業熟達

二人ナリ順吉ノ紹介ニテ面晤スルヲ得其妻弘前商人山形某ノ女也同氏永ク漁場ニ居ルヲ以テ土人(エソ)語ヲ能クス即チ云フ土人語ノ全体ヲ知ルニハ女夷ニ非サレハ能クセス土人唱歌ノヲテ問フ曰ク「ヤエガダニカル」ト云フ(「ヤエガダ」ハ自分ト云フ「ニカル」ハ作ルト云フ)其他色丹島ノ「ハ」後ニ讓ル又タ云フ昆布ハ支那貿易ノ主要ヲ占ムルモ過ル明治九年頃迄ハ百石目金八拾五圓位迄下落セリ之ヲ救フ爲メ十二年頃函館ニ工業商會起リ資本金拾六万圓餘ノ會社也其後黒田前開拓長官漁業貸付法ヲ實行シテ再ヒ之ヲ救フ當時又々支那奸商ノ爲メ百石目二百圓位ニ下落セシメラレソレニ抗スル爲メ今ノ昆布會社ヲ起ス資本金五拾萬ト云フ此度該會社ヨリ漁業者ヘノ貸付金ハ其約定額ノ半ヲ出テサルニ至レリ爲メニ全道ノ不景氣ヲ來セリ其原因ハ重ニ堀氏ノ免職ニ在リ其故ハ内實是迄鉄道會社ノ資本ヲ流用メ該社ノ不足ヲ補フタルモ其道ヲ斷タレ支那人其虛ニ乘シ貸付ヲ始メ竊カニ斡旋人ヲシテ漁業者ト密約ヲ結ベシムルニ至レリ前例ニ徴メ支那人ニ利益ヲ壟斷セラル、ノ悲境ニ陷ルハ明カ也支那地方ノ相場ハ上海等迄ノ運賃倉敷諸掛リ手数料ヲ引キ去ルモ尙ホ百石目平均金八百八拾五圓也先渡邊長官ノ意見ニハ函館ニ此會社ノ株ヲ悉皆引請サセ今ノ役員ヲ改正スル

時ハ是迄ノ昆布會社ノ費用半減スルヲ得ルハ容易ノ業也今該社ニテ漁業者ヘ九
 万圓ノ貸損アリト唱フレモ該社ニ向テ漁業者ヨリ百石拾五圓ノ割ヲ以テ計拾万圓
 位ノ積立金アレンハ差引損ト云フヲ決シテナキ筈ナリ故ニ函館商人ト漁業者トノ會
 社トナシ維持スル時ハ十分安心ナル營業ニシテ支那人ニ當ルニ足ル利子ハ一割五
 分ナレハ適當ナリ然シテ資本ハ金八拾万圓ヨリ不足ナレハ不可ナリ
 又々云フ海産稅御改正ニ付各所ヨリ請願人出テ、露々スレモ大藏省ノ前五ヶ年間
 ノ平均相場ハ鯨鮑百石目金五百四十五圓ナリ是ニ對スル稅金ニ苦ムト云ヘモ是ハ
 内地ノ必需品ニテ意外ノ亂高下甚ダ少ナシ何トナレハ全國ノ農家ハ現今二百萬石
 ノ魚鮑ヲ要ス之レニ對シ北海全道ヨリノ產出入十萬石ヨリ多クテ内地ヨリノ產
 出魚鮑ハ五拾萬石ニ過キス然レハ年々六七十萬石ノ不足ヲ告ケリ是レ代價ノ騰貴
 スル一因ナリ故ニ鹽鮭鱒ノ類ハ需用地ニ定リアリテ多漁ナレハ忽チ下落シ魚鮑ハ
 常ニ之レニ反スト右昆布魚鮑ノ一ハ現今全道經濟ノ如何ニ關スル大ナルヲ以テ茲
 ニ附記ス

二十一日 雨雷鳴 六十九度

本日當郵船會社出張所へ本社ヨリ電信來リ矯龍丸是ヨリ準備ヲ整ヒ千島群島ヲ經
 占守島迄航海シ得ルヤ否ヤト然ルニ該船長ト相談ノ處目今ノ季節ナレハ可ナレモ
 來月末二十日(八月三十日)後ニ至レハ風波ノ爲メ該船ニテハ航海ナリカクシト
 ノ返信ヲ發シタリト是ハ後ニテ聞ケハ藤波主馬頭片岡侍從ノ音信絶へ且ツ磐城艦
 モ絶嶋ノ航海如何ト憂思スルヨリ問ヒ合セタル處該社ヨリハ如此ノ返信ヲ發シタ
 ル次第ニテ其航海ノ困難以テ推知スルニ足ル
 爾來柏原艦長ニ予カ主意ヲ陳シテ云フ此絶島ノ探險ヲ幸機トシ魯國東察加ノ警備
 ヲ窺フト欲スト曰ク外國ノ探險ハ外務省ノ手續ヲ經公使ヨリ魯政府ノ許スヲ得ナ
 ケレハ能ハスト予曰ク貴下職務上又ハ海軍省本務ニ於テモ近接外敵ノ舉動ハ前以
 テ知ラサルヘカラス若シ我ヨリ彼レカ警備十倍ノ手ヲ盡シタルヲ實驗シ明ニ我カ
 海備ヲ等閑ニ附スヘカラサルヲ示シ議會ニ向テ其費用ヲ要求セハ議會何ノ辭ヲ以
 テ之ヲ拒マンヤ又以テ天下ノ人心ヲ興起セシムルニ足ル貴下予ニ許スナシハ
 一トテ盜シテ予カ素志ヲ貫ント艦長曰ク足下ノ志了承セリ余ニ一策アリ抑モ占守
 島ニテ石炭食糧ヲ欠乏セハ根室へ歸ルニ數晝夜ヲ要スルモ東察加ナレハ一晝夜ニ

ヲ事辨スルヲ得ヘシ唯石炭食糧ノ供給ノ有無ヲ魯國領事館ニ問合セ然後云々セシ
ト正銀貨若干圓ヲ準備シ爰ニ密議ヲ一決ス

二十二日 雨 六十九度半

二十三日 雨 七十度

根室國一圓ノ牛馬數ハ 牛 四百九十九頭 馬 三千〇九十三頭

二十四日 曇 七十五度

二十五日 七十四度

根室屯田牧場ニ至リ屯田少尉兼牧場支配人某ト面晤是ハ別記ニ讓ル

二十六日 七十二度半

二十七日 雨 六十九度

二十八日 曇 七十一度

二十九日 七十二度

本日乘艦ノ命ヲ達セラレ

三十日 六十六度半

午前五時九本ヲ訪ヒ乘艦ノ意ヲ告ク同氏云フ千島ハ政府干涉シテ開クト放任スル
トハ二途アルハミ假令放任スルモ荷モ不虞ノ事アルニ非スハ四五十年ノ後常ニ
一二個人手ヲ着クテ遂ニ拓殖スルノ時アルヘシ海山ノ風致ト云ヒ漁獵ノ遺利ト云
ヒ我捨レハ彼外人拾フハ自然ノ理也之ヲ永々拋擲ニ付スル能ハスト勃興ノ念止ム
ル不能ハ見聞スル内外人ノ感觸スル所ト信セラレ

同氏又曰フ占守ノ土人ヲ色丹島ヘ移セシトハ過ル八年唐太ト交換ノ際隔年置キニ
一回ツ、需用品米酒ヲ積ミ一船ツ、派遣セシムルノ定メナルヲ或ハ時節ニ後レ爲
メニ約ノ如クナラサルコアリ之ヲ横濱ガゼット新聞ニ掲ケテ政府保護ノ薄キヲ露
々論責セリ其以前十一二年ノ頃モ本道近クニ移ルコトヲ勸誘スレモ遂ニ聞カサルニ
十七年ニハ漸ヤク移住ヲ承諾セリ故ニ其機ヲ失ハサランヲ欲シ取ルモノモ取取ヘ
ス早々ニ移セル也當時ノ當路者ノ意千島ヲ無人島ニ爲シ置カハ彼我共ニ無事ナル
ヘシトノ妄想ヨリ起リシト思ハル若シ當時千島ヲ開クトノ政府方針一定シ居ラ
ハ土人ヲ移サスニ彼ノ地ニ置キ之ニ相當ノ保護ヲ與ヘハ現今ハ餘程開クタルノ好
機ヲ與ヘシナルヘシ之ヲ思ヘハ實ニ痛恨ニ不耐ト開關以來土人ノ住居有リシニ徴

スシハ人間ノ住居ニ適シ碍リナキハ探險ヲ要スルニモ及バヌコナリト

三十一日 午後七時六十三度(甲板上下測定)以下之ヲ略ス(艦中ニテモ甲板上下室内ト八十度ノ差ヲ見ル)

午前八時大我居士ト共ニ乘艦前十時拔錨

八月一日 南風 正午七十二度

千嶋總論

千嶋國記一

午前五時半エトロフ島留別港へ投錨本年ヨリ同港ニ石炭ノ備アリ艦用石炭積載ノ爲メ一日碇泊ノ豫定ニシテ前七時十分上陸明朝六時歸艦ヲ命セラル

千島ノ國タル根室ノ東北緯四十六度ニ起リ大小廿七島(明治二十三年根室外九郡)点線基

時シテ斜ニ東北ニ走リ五十一度ニ至リ久里留海峡ヲ隔テ魯領東察加ロバートカ岬

ト相對ス東南ハ太平洋ニ面シ(其海洋最深ノ所四千七百尋ニ及ヒ是迄發見スル各大陸)西北

ハ荷哥斯科海ヲ受ク總面積凡ソ千〇三十三方里四六(明治二十三年四月北海道ニ據ル)島名ク

ナシリシニコヤン「エトロフ」ウルツン「ボンチリポイ」マラットチルノウ「プロト」シ

ムシル「クタイ」ウシシリ「シリエラー」ラシヨワ「イツ」ライロク「ムシリ」ツニリ

エジコタン「シヤシロタン」エカルマ「カレン」コタン「タマ」コタン「マテス」ヤカ

シ「シリ」シ「ハラ」モシリ「島島」アライト「占守」二十七島之ニ根室ノ屬島十二島アリ

其島名水晶多樂「シボツ」ニール「モシルカ」アキニル「カルカル」コタン「ボン」ハボマイモ

シリ「トモ」シリ「モシリ」ハボマイモシリ「ベン」テシ「ニシヨ」嶋トス之ヲ千嶋國ノ嶋喚ヒ

加ベテ或ハ三十餘嶋或ハ四十餘嶋呼ト諸説區々世人ノ疑ヲ懷カシムルモノアリ識

者之矣了セヨ所謂蝦夷千嶋是チリ土人(チユブカ)ト云ヒ(「チユブカ」トハ日出處ト云フ)

諸島ニ來ル時其人ニ語テ曰フ我國ノ帝主ハ日洋人ハ久里留諸嶋ト呼ラ(「ケリル」トハ烟ヲ)

昔火山實ニ烟霧其諸島也千嶋諸嶋ニ關スル古傳諸説左ノ如クニ大別スルヲ得ベシ

北海隨筆ニ東蝦夷ヨリ大洋ヘカクテ嶋々多シ松前ニテ知レルハ三十七嶋ニシテ大

小ノ嶋ニハ「エ」在居シ漁獵セリ

沿海異聞「ク」ナシリ「ヨ」リ「カ」ム「サ」ツ「タ」迄大島十五嶋アリ土人充滿ス近來魯人嶋名ヲ

改メ令テ下シ土人ヲ懷クシ今ニ土人ハ皆日本ノ土地ナリト思ヘリ

豫見録ニ天明五年(當明治廿五年ニテ首八)幕府ノ勘定奉行松本秀持翁ヲ受テ「エ」ヲ探

驗セシトス乃チ屬吏山口高品(兼五郎)佐藤行信(兼六郎)皆川秀道(兼右衛門)青嶋軌起(兼藏)等ヲ

派不同六年五月^二ト^三航シ魯人イマニユク等三人ニ會シ論スニ國法ヲ以テス
 「イマニユク」命ヲ聞ク高品等進テ得撫ニ至ル此時最上常矩(徳内)青嶋ノ從僕ト爲リ共
 ニ至ル寛政三年四月最上徳内和田兵太夫ニ命シ「エゾ」ヲ巡察セシム二人五月四日歸
 國ノ(本月二日)魯人ヲ追フテ得撫ニ至ル及ハスシテ歸ル
 同十二年近藤守重山田嘉充(肥後)命ヲ受テ「エトロフ」ニ至ル從是大日本ト書スル標柱
 ヲ立ツ
 休明光記ニ享和元年富山保高(元十)深山運營(宇平)八王子千人同心二人ヲ得撫ニ遣
 魯人少狀況ヲ探ラシム六月二十八日二人「ウルツ」ニ至リ魯人滑失方ニ會談シ標
 柱ヲ建テ天長地久大日本屬島ト書スル
 文化八年五月石坂武兵衛ニ命シテ「エゾ」夷ヲ護送シテ得撫ニ至ラシム
 沿海異聞附録ニ「ウルツ」へ渡リタル印シテ建ツヘシト調役富山執筆シテ天長云々
 テ書ス文字ヲ夷人ニ彫ラシメテ旅宿ノ傍ラ小高キ處ニ建テタリ
 千嶋誌料徳内按スルニ元來「カムサツカ」迄日本領内タル處寶曆年間魯人「カムサツカ」ニ
 城郭ヲ築キ得撫迄拾余嶋奪ヒ取リ島名迄テ改ムルヲ松前家ニテ知ラサル杯トハ言

語同斷テ云々
 野作雜記談說卷五ニ「カムサツカ」南ノ諸嶋ハ悉ク「エゾ」ノ屬嶋ニテ古ヨリ「エゾ」ノ千嶋
 下云フ「エゾ」ノ總稱ニテ東ノ諸島夷モ皆本島ノ「エゾ」ニ從テ交易生活ヲ求メ本「エゾ」ハ
 又テ陸奥ヨリ交易生活シテ總テ皆皇國ノ屬島ナリマナシ故ニ千島ノ「エゾ」ノ名モ
 早ク世ニ弘マリクナリ「エトロフ」^二「ウルツ」^一ノ土人ハ日本ニモ魯ニモ服從セス今尙
 猶獨立スルモノナリト云ベリ右三島ノ夷ヲ悉ククリンルス人ノ末裔ナリト雖モ本
 末ヲ知ラヌ妄言ナリ元祿ノ頃ヨリ「カムサツカ」有テ知テ初メテ遷移スル魯人イカテ
 カ千歳ノ上ニアル事体ヲ知ル可キクリンルス人ハ更也「カムサツカ」ニ至ル迄本蝦夷ノ
 末裔也其本「エゾ」ハ又々上古本邦ノ常陸出羽陸奥ノ「エゾ」ノ餘裔ナレハ總テ曰フ時ハ
 皆皇國ノ天威ニ服從シタル夷人ノ裔ナルヲヤ此事体ヲ知得シテ見解ヲ立ルヲ古意
 ナ知ルト云フ又々「カムサツカ」ニ近キ諸島ハ魯ニ服從スレモ遠ク離レタルハ何國ニモ
 屬セス自立セリト昔々本「エゾ」ニ從屬セシカ其事絶ヘテ年經ヌレハ倚賴ヲ失ヒ忘レ
 タルニテ艱苦シ居ルヲ早ク諭導スル人勿カリシカハ終ニ魯人ニ掠奪セラレタリ
 ラシヨクハ渡來一件ニ明和四丁亥年ノ調ニ古來ヨリ「ウルツ」ヤンケチリホイ「エゾ」

千島誌(版)國人之始メテクリル島ノ存在ヲ知リタルハカムサツカニカザクノ至
 以ル時ニ即チ千六百九十七年五十八隊ノ長シテヨシタラツカカサタシ
 隊ヲ率ヒ此半島ノ北部ヨリ南部ニ至リゴリギナ河ニ達セシキカムサツカノ南岬ヨ
 リ南方海上ニ群島並列セルヨシヲ聞キタリ時ニ偶々日本ノ難破船カムサツカニ着
 キ一ノ日本人其本國ノ書類所持セシヲ伴ヒヤクトツカニ歸リ追々魯語ニ通シク
 成ル島ノ景况及其接近ナル日本國ノコトヲ語リ後カムサツカニ居テ定メシカザク
 其共ニバルシヤ河邊ニ柵ヲ構ヘ之ヲ根據トメ未タ服セサルクリル主人ヲ降サント
 セシト始メテ海峽ノ南ニ島アルヲ見タリ是千七百六年(我百八十年廿五年)支配人
 「カシリー」ユンソフ氏ヲバツカ岬ニ達セルト僅七海里キリノ海峽ヲ隔テハ一番島(即
 島也)ノアルヲ親シク目撃セリ故ニ同氏親ラ往テ此諸島ヲ穿鑿セント企テシガ土
 人ニ惱マサレテ果サリキ
 千七百十一年(我百八十二年廿五年)都督「ダニ」ロアチチフエロフ「アサラ」イワシ
 ヲシテ「フスキ」ト罪ヲ侵セルハ「カサク」ヲ率ヒ同年八月「クリル」島ヲ經略セリ此時ニモ又
 其前年漂着セシ日本人ヨリ諸島ノ事ヲ委シク聞タリ此時ノ報ニ依シテ一番島ニ

「カムサツカ」種ノクリル人等防戦セシガハ遂ニ戰勝ス小舟三艘ヲ奪ヒ之ヲ用ヒテ
 二番島(即チ「ホ」)ヲ見ルニ純然タルクリル人種ナリ翌年又「カムサツカ」ニ漂着セシ
 日本人「アリ」夫レヨリ「ユンソフ」氏ガ聞取リタル所ニテ此群島ノ續ニ「松前島」アリ、
 二續テ日本國アリ貨財ニ富メルヲ知レリ
 千七百十三年(我百八十四年)「ヨシ」フスキ氏ハ指揮官ノ命ヲ受ケ償罪ノ不足ヲ補フ爲メ「バ
 イタル」ニ乗テ大砲二門「カザク」五十五人「カム」チヤタル十一人ヲ率ヒ出發セリ氏ノ第
 二番島ニ着セシキ其島民ハ全ク獨立ノ民ニテアリシ島民已レノ獨立ヲ保護セン爲
 メ死力ヲ盡シテ奮戦セリ然トモ「カザク」ニ破ラル途ニ第三島ヲ併セタルニ第三島ヘ
 渡ル企テ廢セリ故ニ羅針モナク帆モナク案内者モナク且ツ秋季海荒ク流急ナルニ
 ヲ以當時分取ハ日本刀木綿及ヒ「エ」ト「フ」ヨリ日本ノ品ヲ以テ三番島ヘ貿易ヲ持
 來リシ遠島ノクリル人「シヤ」タ「イ」ナル者ヲ捕ヘ來レリ
 千七百二十年(我百八十五年)「ヨシ」フスキ氏ハ「クリル」島ニ至リ「クリル」島ノ諸島ヲ探
 大平洋等日本岸ニ出テ探險船其目的分明ナラサレ「クリル」諸島探險ト「イ」ウ「フ」
 其在「クリル」島「フ」ヨリ「クリル」島「フ」ヨリ「クリル」島「フ」ヨリ「クリル」島「フ」ヨリ

航海者「バルカス」(無甲)に乗リテ此出發ノ前年正月二日ノ教令ニ白峽ヲ斷續其經緯度ヲ探驗スルキヤ「サツカ」ノ事ハ當時皇帝ノ深ク秘スル所ナルヲ以テ其教令ヲ知ルヲ得ス日本國ノ方カ「サツカ」ノ南々東ニアル諸島ヲ取調ヘ其島民ヲ歸從セシメテ爲メ千七百二十一年五月廿二日「バリシヤヤ」川出帆クリル諸島ノ邊ヲ航行シ第六島ニ至リテ時大風ニ遭ヒ帆ヲ破ラシテ網ヲ切ラシ遠ク洋中ニ漂流セリ七八日ヲ經テ第二番島ニ漂着セリ碇ヲサシテ大砲及金床ヲ代用セルモ再ヒ網ヲ切ラシ困難ノ處順風ニテ六月ノ末「バリシヤヤ」川ヘ歸着セリ「ボルシユ」ニ船具ヲサシテハ不得已木ヲ以テ碇ヲ作り鐵ヲ以テ之ヲ包ミ七月十二日「サツカ」向テ出發ス此航海ハ日本ト「カムサツカ」ノ間ニ諸島ノ在ルヲ證セテ爲メ繪圖ヲ製シ「サツカ」ニ於テ皇帝ニ謁見シ皇帝ハ大ニ其功ヲ稱賛セリ

千七百三十一年七月廿二日「バリシヤヤ」布告中クリル諸島ニ行ク收稅吏ニ示ス教令アリ前略「鹿皮一張ツ」ノ稅ヲ納ムベキモノハ其數ヲ調ヘ新ニ名簿ヲ作ルベシ且ツ從前納稅セサル諸島ヲモ爾後從屬セシムル様注意スベシトノ事アリ

「クハル」諸島ヘ來ル收稅吏ハ大抵無學者ナルカ中ニ千七百四十四年ノ收稅吏「ラザラ

ク」シ「ン」ノ「ハ」シ「ム」シ「ル」ヨリ「マ」カ「ン」ル「シ」ニ歸リ來ル「ル」ク「リ」ル「人」ノ話也トテ「ク」ナ「シ」リ「島」松「前」ノ「吏」人「ハ」魯「人」共「カ」諸「島」ヘ「諸」品「ヲ」少「シ」ツ「ハ」持「來」テ「シ」ヨ「リ」一「經」ニ「シ」テ「此」ク「ナ」シ「リ」島「ニ」持「來」ラ「シ」コ「ト」願「ハ」シ「ト」語「ル」由「テ」報「告」セ「リ」且「ツ」此「人」租「々」諸「島」ノ「人」口「及」草「木」禽「獸」ノ「コ」ヲ「取」調「シ」ベ「リ」ヤ「鎮」臺「ニ」呈「セ」リ

千七百四十五年收稅吏「ス」ロ「ボ」ツ「チ」コ「フ」二「番」島「ノ」ト「ヨ」ン「(會」長「ノ)」出「前」ス「ト」ロ「ゼ」フ「ト」共ニ九番島「チ」リ「ム」コ「タ」ノ「ヨ」リ「ノ」歸「途」七「月」三「十」五「日」五「番」島「チ」チ「コ」タ「ノ」ノ「ウ」カ「モ」ル「港」ニテ日本人「ニ」リ「ン」チ「ニ」イ「ニ」逢「ヒ」其「人」所「持」ノ「地」圖「ニ」ヨ「リ」テ「日」本「松」前「長」崎「津」輕「等」ノ「全」体ヲ「見」タ「リ」

千七百三十一年「ス」ベ「リ」ヤ「ノ」新「令」ニ「テ」ノ「ザ」ラ「ク」ラ「ブ」レ「ン」ノ「イ」氏「ハ」三「十」四「年」ニ「五」六「七」八「九」番「諸」島「ノ」住「民」ヲ「魯」國「ニ」從「屬」セ「シ」メ「タ」リ

千七百五十三年以來「ト」ヨ「ン」ニ「島」々「收」稅「ノ」事「務」ヲ「任」シ「別」ニ「魯」人「ノ」收「稅」吏「ヲ」發「遣」セ「サ」ル「コ」ト「ナ」セ「リ」

千七百五十四年日本ノ難破船十二番島ニ漂着セシキ其「人」ヲ「殺」シ「其」品「ヲ」奪「ヒ」以「テ」大「ヒ」ニ「得」タ「リ」ト「ス」コ「ノ」島「人」衣服「ノ」様「ヲ」以「テ」見「シ」ハ「日」本「ト」往「來」貿易「ス」ル「ハ」疑「フ」マ「テ」モ

ナケレ其日本ニ從屬セルヤ否ヤハ知ルベカラズ
千七百五十五年モメヨシノゾイヨフ氏派遣セラレ十番島迄自身ニ巡廻シ十六番島迄ハ己レカ子ヲ遣リ以テヤサクヲ何ノ苦モナク取集メタリ

千七百六十四年ヤルコブアブリチノヲシバツヤノ士族ニ擧ケ一ケ年食料ノ外八ルノアル八十二カベイキヲ給シクル諸島ノトヨシノ總頭トス其子二人ヲ第五第七ノトヨシニ命セリ

千七百六十六年百騎ノ長イワシヲヨルノイハ五月十七日ボルセツクヲ發シ六月八日一番島ヲ經十二番島ニ冬ヲ經ル積ナルモ同島ハ食物ニ乏シキヲ以テ十一月五日ニ二番島ノツクルニ繋船其後一番島ニテ冬ヲ經タリ時ニ弟ガボルセツクヨリ食糧ヲ運出シ達スル迄ノ間ハ其前殆ト飢ニ迫マレツ

翌六十七年六月二日二艘ノハイタルニテ十一番島ニ着是ヨリ南向ノ十三十四番島十六番島ニ冬ヲ經翌六十八年春風濤ヲ冒シ十七十八番島ニ航ス時ニ同行ノ中一人ハ溺死一人ハ凍死ナリ同年六月二日アルツク島ニ上陸セシニ其島トヨシ五人并ニ其親族十九番島ニトロボノヨリ家族ト共ニ獵ニ來リ居ル者モ一同出テ迎ハ一同ハヤ

サタヲ納ルトトナレリ尙ホ十九番島ニモ案内シ已カ親屬共ニモ進メテヤサクヲ納メシメント其子弟ヲ引連シ六月十六日ヲ以テエトロボ島ニ至リ(我カ明和五年ニシテ今前西曆千七百六十八年ナリ)僅カニ七日ニシテ全島ノ毛人ヲ歸服セシメ悉クヤサクヲ納メシム且ツ二十番島ヨリ來リ合セシ者モ悉ク服從セシメタリエトロボノ最貴重ナルトヨシノ子某ヨリチヨルノイニ銀裝ノ太刀ヲ贈リ又エトロボ島トヨシ總頭別ニ臨テチヨルノイニ約スルニ同人カ此島ヘ再ヒ來ル迄ニハ廿一廿二番島ノ諸毛人ヲ悉ク勝

ビテ魯國ニ服從セシムベキヲ以テス六月十八日ヲ以テウルツク島ニ歸リ翌年五月九日迄同所ニ留マシリ此行毛人八十三人ヲ服從シ十八番島ヲ發シ十七十六番島ニ臘虎三十六頭ヲ獲タリ熊狐アザラシ等ハ除キ臘虎皮六百枚ニ及ベリ順次各島ヲ經テ九月九日ヲ以テ一番島ニ至リ同月廿五日ヲ以テボルセツクニ歸着十九番島ニ至

レル報告書ヲ出セリ

千七百七十年ヤクトツクア商社臘虎船ヲクルルニ出ス十八番ウルツクニ冬ヲ經ル

翌七十一七十二年ノ間ニ毛人ノ爲メ男女三十三人殺害セラレ殘十八人ハ千七百七十二年九月十二日ヲ以テホウロウスクニ歸レリ其所得ノ臘虎皮ハ二百五十枚ト云

「ク」諸島ヲ算スル順序ハ魯國ニテ唱ル所ハ右ニヨルノイノ日記ニ據ルナリ
 千七百八十年魯人「レ」ベテ「千五百人」ノ「ク」ルル人（當時千島人口最モ）服従セシメタ
 リ全年代得撫島ニアンチーピン「カ」麥ヲ種キタルニ収獲ノ多キ他ニ讓ラス
 千七百九十年日本漂流民（伊勢國白子村）護送ノ際其死亡ヲ取調タルニ元十七人ノ漂流民東
 察加滯留八年ノ間ニ十二人死去セリ其故ヲ考フルニ畢竟勞苦ノ甚シキト氣候ノ嚴
 ナルト食餌ノ全ク變シタルトヨリ來ルモノナリ
 右漂流民日本へ護送ノ際魯國女帝エカテリナ第二世ハ一千七百九十一年九月十三
 日附テ以テ全鎮臺へ諭勅アリ其第十一條ニ日本人ヲ連レ行ク費用ハ總テ官費タル
 へシ其外別紙目錄ノ通り幸太夫以下一統へ御手許ヨリ賜ルベキヨ其別紙目錄ニ頭
 目幸太夫へハ三「ル」トルノ金貨百五十枚金ノ記念牌一金時計一其他ノ日本人へハ
 同金貨五十枚ツ、銀ノ記念牌一ツ、魯ニ在留テ願テ者ニハ二百「ル」トルツ、ヲ賜フ
 右ノ條々遵守奉行スベキ者也
 附記 千八百三年「レ」ザ「フ」軍艦「ナ」エシ「ダ」號ニ乗リ貿易請求ノ爲メ長崎へ向ケ出帆ノ際受ケ
 附記 千八百三年「レ」ザ「フ」軍艦「ナ」エシ「ダ」號ニ乗リ貿易請求ノ爲メ長崎へ向ケ出帆ノ際受ケ

又「千八百」十四年「レ」イ「ン」ノ言ニ據テ再ヒ出使ノ職ヲ決セリ鎮台トレスキン「ヨ」リ
 總督ヘ左ノ申告アリ第四條ニ得撫ヲ露國領トスエトロフ「チ」日本領トス其以南ヲ領スルノ望
 リト云フ此地ニ手ヲ出サハ支那政府ヲシテ激セシメ却テ大害ヲ引キ出ス「ト」モ計ルヘカラス
 故ニ此地ニ手ヲ出スヘカラスト然レテ該年度迄モ露國樺太ニ關係ナキヤ明カナリ本條ニ關
 セスト雖モ國境ノ忽セニスヘカラス一証トスヘシ○千八百五年四月四日露使「レ」ザ「フ」日
 本ノ不法ヲ憤リ應接役人ニ向テ發シタル語ニ松前以外ノ日本領ハ最早其有ニアラサルモ
 ノト覺悟アレ等ノ言ヲ述ヘタリト然レテ當時此事ハ秘シテ漏サス故ニ掲ケテ參考ニ供ス
 右ハ魯國原版ニカ、ル千島誌ニ就テ千島ニ關スル要領ヲ掲ルノミ

之ヲ再ヒ我カ舊記古誌ノ千島ニ關スル者ニ就キ其大要ヲ左ニ掲ク
 寛永二十年（西曆千六百四十四）和蘭國船「ク」ナシ「リ」エ「ト」ロ「フ」ウ「ル」ツ「フ」ノ諸島ニ至リ去テ奧
 州ニ至テ捕ヘラル○同七月又蘭船一艘厚岸ニ漂着ス
 元文二年魯帝ノ命ニヨリ日清兩國ノ虛實ヲ試ミ交易ヲ計ラシメ官吏アルベルヒ
 ア和蘭ノ「カ」ヒ「タ」ン「ス」ハ「ン」ベ「ル」久「ト」日本地方ニ航シ「カ」サ「ツ」カ外露領及千島三十四
 島ヲ巡廻シ魯船日本海ニ至ル之ヲ始メトス
 明和二年（西曆千七百四十六）魯人「イ」ハ「ン」レ「ン」チ「千島」ノ「ラ」シ「ヨ」ク「島」ニ至リ翌年「エ」ト「ロ」フ「
 至」リ又「ウ」ル「ツ」ス「ニ」歸ル留住三年ニ「巨」ル（按スルニ露國地誌會社ニテ千八百七十二年
 刊行魯人「カ」ロ「ン」スキ「ク」リル「諸島」記ニ據
 本「文」ノ「記」事「ハ」明「和」五「年」ニ「シ」テ「ハ」ン「ニ」非「ラ」ス「メ」テ「ヨ」ル「ノ」也

同五年魯ノ大船「ウルツ」ノ「ア」ニ入リ越年ス

同六年魯人「イ」ハ「ボ」シヒ「カ」ノ「フ」
「ウルツ」ニ來リ「チ」ヨル「シ」イ「死刑」ニ處ス前年ノ
非ヲ陳シ他意ナキヲ證言ス

同八年「エ」ト「ロ」フ「ラ」シ「ヨ」ウ「ア」夷ト計リ魯人ノ統ヲ發シ獵ヲ害スルト其珍寶ヲ奪フヲ
大ニ怒リテ魯人二十餘人ヲ殺シ其怨ヲ報セリ○此年魯人千島ニ來リ東海ヲ廻リ阿
波ニテ薪水ヲ乞フ大島ニ至リ書ヲ長崎關ノ「カ」ヒ「タ」ニ送リ必ス千島松前ヲ奪取ス
ル「キ」ハ「法」方「テ」告「ク」

安永二年（或ハ元年）魯人六十大船ニテ「ウルツ」ニ來リ屋ヲ構ヘ漁獲ス當時教導撫
育ヲ事トシ租稅ヲ収メ千島二十餘島ノ島名ヲ改ム

同三年魯船ニ「ヨ」ライ「號」西浦「ア」タツト「イ」ニ破ル魯人「エ」ソ「ト」和シ貿易シ六年ニ至ル

同六年魯「ナ」タリ「ヤ」號「ウルツ」ニ來ル

同七年魯人「ヘ」ント「ウ」セ「メ」テ「リ」ヤ「ウ」コ「ヘ」ツ「ニ」ラ「シ」ワ「八」ヲ以テ「譯」トシ「ウルツ」ヲ發シ
「エ」ト「ロ」フ「テ」經「テ」キ「リ」カ「ツ」フ「ニ」至リ通信交易ヲ請フ八月「ウルツ」ヲ經テ「オ」ホ「ー」ツ「ク」
ニ歸ル九月又々至リ過年ス

同八年「ヘ」ント「ウ」セ「メ」テ「リ」再ヒ厚岸ニ至リ互市ヲ請フ「ウルツ」ニ歸ル

同九年四月「ウルツ」ノ海嘯地震魯船ナダリ「號」飄波ノ山上ニ至ル溺死四人

是ヨリ先（延享元年）南部ノ漂民勝左衛門等五人魯主之ヲ撫恤スル甚タ厚シ其子（勝左）ヲ

以テ一船ノ帥トス七十人ヲ率ヒ巨艦ニ駕シ日本ニ至ラシム海路人ノ爲メニ殺サレ
一船ノ人皆死ス空船「ウルツ」ノ「ア」タツト「イ」ニ至ル「エ」ト「ロ」フ「出」獵夷之ヲ視テ露貨多

キヲ以テ之ヲ奪ヒ其空船ヲ燒テ跡ヲ滅スト魯人后ニ之ヲ聞キ大ヒニ怒リテ曰ク國
王ノ臨ム所必ス政道アリ故ニ其人民匪法ノ事ヲ爲シ肯セス是政道ナシ以テ其君主
ナキヲ見ル「ヘ」シ安ソ千島ハ日本統轄ト云フヲ得シ唯其地ヲ開拓スル者即島ノ主君
ナリト

天明元年「ヘ」ント「ウ」セ「メ」テ「リ」小船ヲ造リ乘テ國ニ歸ル

同四年「ヘ」ント「ウ」セ「メ」テ「リ」重テ「ウルツ」ニ來リ山上ノ船ヲ下サントシ能ハスニ歸ル
爾來魯人ノ千島及「エ」ソニ至ルハ年トソアラサルコナキヲ以テ之ヲ奪ス
是ヨリ先キ魯ニテ國後島ヲ「ハ」チ「ヤ」ト「イ」テ「シ」ト「ロ」ツ「フ」擇捉島ヲ「ト」ヘ「ツ」ナツ「チ」ヤ
ト「イ」テ「シ」ト「ロ」ツ「フ」ト島名ヲ魯語ニ改稱ス殆メト并吞ノ勢アリ松前氏禦ク能ハス

天明六年最上常矩幕府ノ命ヲ奉シ千島ヲ巡視シ魯人既ニ國後ニ至ル常矩嚴命ヲ演
 テ之ヲ逐フ遂ニ去リ得撫島ニ止ル其後近藤守重等相續テ二島ヲ開キ全ク皇國ノ屬
 地ト定ム寛政文化ノ間幕府兵ヲ遣テ守ラシメ僅カニ其香噬ヲ免ルヲ得タリ嘉永六
 年樺太經界ノ議起リ紛々擾々決セス明治八年ニ至リ和約成リ久里留諸島ヲ以テ北
 蝦夷樺太州ニ換ヘ千島再ヒ職方ニ入り島名皆其舊ニ復セリ(北海道誌)

斷 按

儀助謹テ我國史及舊記ト西洋諸國ノ地學其他ノ記事等ヲ考フルモ大抵上載ノ如ニ
 シテ目今千島ト稱スル者ハ根室ヨリ東察加ヘ連ナル三十余ノ群島ノ總名タレト古
 ノ所謂蝦夷ノ千島ナル者ハ果シテ此群島ヲ唱ヘシ者ナルカ否ヤハ保シ難ク管ニ保
 シ難キハミナラス恐クハ今ノ北海道ヲ漫然指稱セシカ如クモ思ハルハナリ如何ト
 ナシハクリル諸島ヲ日本人カ支配セシトモ居住セシトモ探險セシトモ無クシハナ
 リ現今稱スル所ノ千島クリル群島中ニ就キ第一第二島ナル國後擇捉島ノ始メテ我
 カ版圖ニ入りシバ寛政十年近藤守重魯人建ル所ノ十字架ヲ倒シテ木標ヲ建テ後
 大日本ト書シタル當時ヨリ始メテ正シク我カ版圖ニ入りシモノニテ其以北東ナル

得撫島ヨリ東察加ニ連ナル十餘島ハ我カ版圖ニ入りシ者ニアラス然シテ魯人ハ既
 ニ我ヨリ早ク我カ元祿十年(西曆千六百九十七年)東察加ヲ奪取シ我カ正徳元年(西曆千七百一十一年)
(西曆千七百一十二年)前)彼ヨリ第一ナル占守島ヲ征服シテ貢物ヲ徵セリ此時我ヨリ一言ノ問フ
 トモナク問フトナキノミナラス天下一人ノ之ヲ知ル者有ラザリシニアラスヤ我カ
 明和五年既ニ彼レ得撫島ニ據リシニアラスヤ此間クリル諸島ヲ魯國官民共ニ協力
 シテ巡廻シタルト幾回ナルヤ史ニ徵シテ其類々タルヲ概知スヘシ夫レ「エトロフ」ク
 ナシリハ今ヲ距ル百二十餘年前迄ハ不羈獨立ノ酋長アリテ自カラ其地ヲ領シ其部
 下ヲ統治シ絶ヘテ他國松前及ヒ東察加ノ命令ヲ受ケシトナク又々右他國人此島ニ
 移住セシトモナカリシナリ(近藤守重ノ手記ニ安永ノ頃ヨリクナシリ島ヲ開ク故ニ奥地
 ニ至リテハ本邦人ノ往來ナク又々「エソ」モ往來稱ナレハ委シ
 キトハ知リ難シ昔テ道ノ古記借覽中ニ有功略傳アリ村山傳太夫記事ニ寛政元年飛騨屋久
 兵衛諸島地東エソ地クナシリニ於テ土人撫育不行屈ヨリ土人ト争闘ヲ起スヲ以テ引上ケ更
 ニ傳太夫ニ被仰)魯人ノ「エトロフ」ニ來リシハ我カ明和五年(チヨルノイ)ヲ以テ始トス
 續テ我カ安永七年(シヤバリン)魯ヨリ來リテ島民四十七名ヲ魯籍ニ入レ稅皮ヲ収メ
 リ又々數回ノ宣教師來テ島民ヲ誘導シタルモ魯國ヨリ公然官吏ヲ置キ島民ヲ撫育
 セシニモアラス故ニ魯國ハ敢テ「エトロフ」ヲ以テ其屬地トハ認メザルナリ

我々日本官吏イ始之クナマリ「エトロフ」ウルツフニ渡リシハ天明六年山口高品最上常距ヲ以テ嗚矢トス(露人「エトロフ」ヲ實ニ十九年ナリキ)續テ寛政三年最上及和田兵太夫全ク四年工藤庄右衛門クナスリ「エトロフ」ヲ經テ得撫島ニ至ルト云フ近藤守重記事ニ「エトロフ」島モ古來日本人往キシト更ニナシ寛政十年守重初テコノ島ヘ渡リシハ前後日本人渡海ノ四度目ナリ(則チ天明六年ト寛政三年ト其後工藤)同十二年初メテ日本船ヲ通シ會所ヲ立ツ是レ日本家屋ヲ立テシ初メナリ高田屋嘉兵衛ハ直チニ漁場十七ク所ヲ新開スコレ漁場ノ始メナリ當時我カ漁夫ノ「エトロフ」ニ渡リシ者ハ甚タ稀ニ其住スル者ニ至テハ絶テナク又タ松前藩ヨリモ吏ヲ置キ民ヲ撫育セシト全クナク殆ト魯國ト異カラサルナリ然レハ魯人ハ得撫島ニ假住シ更ニ我カ民ニ先チ「エトロフ」島ニ來リタルヲ以テ遂ニハ今ノ本道蝦夷ヲモ蠶食スルノ志ヲ逞フミタルハ論ナキノミ故ニ明治八年「クル」群島交換以前ノ「クル」群島ヲ指稱シテ我カ所有ノ千島トスルハ斷シテ信スル能ハス記シテ之ヲ大方ノ職者ニ問ハント欲ス

千島國記 二

得撫島 再出ノ部后ニアリ

八月二日 南風 正午七十二度

午前五時半紗那郡留別港ニ碇泊ス港灣ハ全島ノ西岸ニ位スノト「岬」最モ長ク西北ニ突出シ又タ北方ニ黑色ノ巖角アリ「シニシ」ノ角ト相對シ「ルベツ」灣ヲ爲セリ土地皆平坦ニシテ三里ヲ隔テ、東岸單冠灣ニ通ス夏季海霧ヤ、多シト云フ午前七時十分上陸ヲ許サン翌前八時歸艦ノ命ヲ傳ヘラル大我居士外二名ト共ニ栖原角兵衛ノ漁舍ニ投ス同地海軍省石炭ヲ貯藏ス右石炭ヲ船積スル爲メノ碇泊ナリ朝飯ヲ喫シ直チニ戸長役場ニ至ル戸長海野龜吉(秋田縣七族也)ニ面會ス篤實ノ人ナリ悅テ予等ノ質問ニ應シテ官簿ヲ出シ辨明ヲ與ヘタリ

明治二十四年中寒暖表 華氏計 留別戸長役場

月	日	最高	最低
一月	十日	三十二度	十二度
二月	廿八日	三十二度	十六度
三月	廿二日	四十六度	二十二度
四月	廿四日	四十七度	二十八度
五月	九日	五十八度	三十八度

十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月
廿一日	廿六日	廿六日	十五日	廿六日	十五日	廿四日
四十度	四十九度	六十四度	七十二度	七十七度	七十五度	六十九度
三日	十九日	廿一日	廿日	三十日	十九日	一日
十八度	二十五度	三十七度	五十八度	五十三度	五十三度	四十一度

同年間

商船入港數

留別灣

漁船 卅五艘

風帆船 十九艘

日本形 一艘

單冠灣

全 二艘

全 四艘

振別灣

全 一艘

全 一艘

老門灣

全 三艘

全 一艘

內保灣

全 五艘

全 二艘

得茂別灣

全 一艘

全 一艘

全年間

水產輸出品

鹽鮭四千卅七石

此原價四万七千八百卅六圓

鹽鱒三千石

全 二万四千圓

干鱈三百四十四石

全 二千七百七十八圓

雜魚粕卅石

全 二百五十圓

鮭筋子三百七十三石

全 三千三百五十七圓

鹽鮭二十三石

全 百七十五圓

計七千八百九十七石

計七万八千三百九十六圓

同年間

輸入品

米九百五十二石

代價一万〇四百圓

鹽八千卅七石

全 一万三千二百一十一圓

味噌四千六百九十一石

全 八百七十六圓

酒百六十九石

全 四千二百八十五圓

醬油二十三石

全 三百二十一圓

石油八十一函

全 二百〇九圓

繩纒類四千七百九

全 九百卅二圓

網類三百八十人目

全 七百廿二圓

計三万九千〇廿九圓

輸出入金差引

輸出超過三萬九千三百七十一圓

戶長海野氏トノ問答左ニ記ス

戶長云フ輸出超過金四万圓ニ近シ一見スレバヨノ地方ニ殘金多キ様ナレ左ニア
ラス何ントナレバ主トシテ漁場持主ハ函館ニアリテ漁場一切ヲ仕込ミ末ニハ高利
ヲ附シ差引勘定ヲ立ツンハ悉皆拂渡シ了ルト云ニハ非ラサルモ地方ニ殘ル金高ハ
誠ニ少シ是レ從來ノ實驗ナリ故ニ戶數モ十分ニ繁殖セサル勢アリ

當村上等ノ地所百五十坪ヲ一戶ノ屋敷地トス現今賣買價金百八十圓位ナリ
戶數八十軒アリ然シテ窠數ハ凡ソ百四十戸ニ及フ人口三百六十九人(内本籍二百八

十八)當今鮭漁ノ期ニ近ク然レ今時ノ如ク南風ナレハ鮭漁ハ悪ク鮭漁ニハ至極都
谷宜シト云フ
耕地ハ大根、蕪菁、大角豆、ギヤベチ、馬鈴薯、胡蘿蔔、牛蒡皆適シ能ク成熟セルヲ見ル秋麥
ハ土地凍凝スル爲メ害アルモ春麥ハ可ナリノ收穫アリ

物價ハ一人夫日傭一日賃金六拾錢 大工金七拾錢 木挽長サ六尺物一口
ニ付金九錢 酒一升六拾錢 白米一石十圓五十錢 冬期高價ノ時ハ
拾二圓五十錢ニ至ルト云フ

半紙一帖三錢 (大根一本壹錢 一反歩三千五百本)
(馬鈴薯一俵五十錢 一反歩ノ收穫卅五俵)

當村ヨリ西北ノ海岸ヲ上場所ト稱ス往々明キ場所ヲ見ル又々東海岸ハ大抵明キ場
所ナリソハ漁獲少ナクレハナリ全島東海ハ鮭漁ノミニテ若シ鮭漁ナクレハ計算立タ
スト云フ故ニ本年ハ如此東ニ明キ場所多シ鮭ハ素ヨリ鮭ノ四倍ノ高價ナレハナリ
昆布ハ東ニ多ク産スレモ俗ニ猫股ト稱スルモノ多シ下等品ナリ又下場所クナマリ
海ニ接シテ多ク産スレモ短縮ニシテ宜シカラスト云フ一漁夫ニ問フ昆布アリヤト
曰クアリ何ソ取ラサルヤ曰ク毎戶需用丈クハ取レリ然レ他ノ漁獲ノ爲メ採取ノ

暇ナク且ツ海霧深キカ爲メ干燥十分ナラス是レ自ラ度外視スル所以ナリト然リト雖モ隣島クナジリ昆布ヲ以テ主産トシ頗ル名アリ恐ラクハ干燥云々ハ遁辭ナランノミ之ニ由リテ之ヲ觀シハ本島モ年々追ヒ人口増加スルニ隨ヒ採取ニ從事スル者アルニ至ルハ必セリ

積雪ハ十二月ヨリシ融雪ハ四月末ナリ然レモ地水ノ全ク融クルハ猶數十日後ニ在リ故ニ五月末ニ至ラザルハ耕作ニ從事シ難シト云フ

海面ノ流漸ハ本年ハ二月十一日ヨリ初マリ五月三日ニ盡キタリ例年ハ四月下旬ニテ盡キルヲ常トス

十二月中ハ海上荒クシテ西北ノ風強シト雖モ一月中ハ至テ穩ニシテ平安ナリ漁船ハ昨年十二月七日ヲ最終航海トシ本年五月十日ヲ以テ初航海ト爲セリ

紗那郡役所迄陸路六里
昨年ハ未曾有ノ大漁ニテ五万石ノ収獲アリト云フ

三里半ニシテトクタリ灣アリ北面ヲ塞ク和船百石十四五艘モ碇泊スルニ足ル巖キニ矯龍丸根室丸ノ難風ヲ避ケシハコノ灣ナリ

栖原ノ漁場ハ舊來ノ習慣ニ泥ミ出入相償ハスト云フ或曰ク新開漁場ハ皆ナ栖原ノ次位ニアレトモ改良漁法ヲ施行スルヲ以テ入費モ少ナク漁利モ可ナリノモノニシテ栖原ニ優レリ栖原ノ守舊シテ動かサルハ豈浩嘆ノ至リニアラスヤト嘗テ栖原元支配人若松忠次郎ヨリ聞ク從來「エトロフ」全島ハ同家ノ金庫ナリ然ルニ近來數万石ノ收獲アルモ航海不便ノ爲メ收獲ノ大半ハ翌春漸ヤク箱館へ送ルヲ得故ニ古物ト見做サレ百石ニ付百圓或ハ二百圓ノ價格ヲ減セラル某擔任ノ際ハ主トシテ晩秋迄ニ多分積送リ翌春ニ涉ラザル様一途ニ注意セリ元ヨリ夏中ハ根室迄百石ニ付七十圓位ノ運賃ナレトモ秋ニ至レハ昨今年ニテモ尙百二十圓位ニ騰貴セリ然レモ翌春ニ廻漕スルニ比スレハ計算上大利益アリト云フ

栖原ノ硫黃山ハ字「ベルタル」ト云フ礦物不充分ニテ終ニ廢山ニ歸セリ今般東京代理人武藤直中出願ハ純良無比ノ良坑ナリト某技師ノ話ナリ十一時喫飯十二時東海岸トシモ「ニ」趣ク(留別村ハ平坦砂地ニシテ北ニ留別川アリ凡拾間餘餘多ク登ルト小ナス且ツ地勢ノ佳ナル漸次隆盛ニ赴クノ見込アリ昨午以來海軍省石炭庫設置ノ考按アリト云フ住民漁業家其大半ヲ占メ商賈之レニ次ク日用ノ需用能ク便スルニ足ル戸長役場病院學校郵船會社支行ク「ト」數丁ニシテ「小湖」アリ長サ二十丁巾大約二丁川魚アリト云フ

是ヨリ與ニ進ム地味肥沃耕耘適當ノ良土ナリ一小徑四五尺ノ雜草ヲ穿チテ行ク極
 メテ困難ナリ且ツ樹木繁茂セリ二里ニシテ大湖アリ湖畔ニ温泉アリ湖ノ長サ一里巾
 大約二十丁川魚アリト云フ留別ヨリ二里半ニシテ又タ砂地トナル此小徑二里二十八丁
 ト云フ午后二時五十分トシモニ村へ着キ、ニ栖原出張所アリ中澤三太郎ナル者居
 守ス總稱ノ單冠灣ト云フ本嶋南東岸ニ於テ巨船ヲ碇泊スヘキハ唯ユノ一灣アルノ
 ミ然レモ灣口闊大ニシテ南風ノ外ハ風濤ヲ遮キルニ充分ナラスニ部落アリ西テオン
 チヘツト云ヒ東テトシモヘト云フ人家五六戸アリ灣ノ沿岸至ル所家屋ヲ散見スル
 モ悉ク漁舍也船舶ノ定繫所ハ兩所アリ風雨ニ應メ拔錨スレハ以テ災害ヲ免カルヘ
 シ樹木ハ東岸ニ多ク雜草至ル所ニ繁茂ス漁夫五十餘人アリ冬季ハ番人數名ヲ殘ツ
 其他ハ皆歸國ス河流ニツアリ一ハトシモヘニアリ一ハオンテベツニアリ皆小船ヲ
 モ入ルニ足ラス

畑作ハ留別ニ同シ村落ニシテ積雪三四尺山ハ大概九尺以上一丈餘ニ及フ九月ヨリ
 降雪十一月ニシテ根雪トナル三月ノ末ニ至リ融雪ス然レモ地下猶殘氷夥ク故ニ六
 月中旬ニ至ラサレハ耕耘ニ從事スル能ハス西岸ヨリ後ル、一週間以上也ト云フ而

メ温度ハ西岸ヨリ早ク暖ナル方也ヤチメ草綱ニ作ルモノ也ベシサラサ草(土人ノ糞
 糞ヲ取ハ血ノ道ニ用ユト)「ボクサ」草「コシヤク」草熊笹ノ若芽(試ナルニ又クニ足ルテ)共ニ食用ニ供ス食土
 ハ二十二里先キノ「スベトロ」郡シヨキヤ川ノ川床ヨリ出ツ其調理法清水ニ溶解シ土
 砂ヲ器底ニ沈澱セシメ其上ノ白水ヲ取り是ニトマ草ノ根薯ヲトリ皮ヲ剝キ其白水
 ニ入テ能ク煎シ以テ食物ニ代用ストマ草ハ早春紫色ノ一輪花ナリ

二日 午前六時 六十一度

石炭積載終了午后六時乗船是ヨリ先キ軍艦ハ百二十五人ノ乗組ニ四十日分ノ食糧
 ヲ積込(小艇ナルヲ以テ之ヨリ多ク積ムヲ能ハス)必需ノ石炭ハ僅ニ七晝夜ヲ支フルノ料ヲ蓄フルニ過キ
 ス留別ニテ更ニ二晝夜分ヲ積ミ且ツ之ヨリ無人ノ境ニ進ムヲ以テ食糧ノ窮乏スル
 テ慮ハカリ備付差綱ヲ投スルニ差障リノ有無ヲ問ヒ人民ノ漁場ニ差支ナキ海ニ漁
 シタルニ前後三回ニテ五六百ノ鱒ヲ獲タリ之ヲ貯フルノ器ナキヲ以テ「コツベル」
 一トニ盛リテ之ヲ鹽藏シ食糧ニ備フ艦長用意周到ナルノ一端ヲ見ルニ足ル此兩日
 間草木標本百餘種ヲ採取ス(後九月三日根室着直チニ改ムレハ三分ノ二ハ)
 三日 上海正午六十七度半 午后六時六十一度

午前十時十七分出帆午後四時遙カニ得撫島ヲ遠望ス五時濃霧ノ爲メ海洋見ヘズ

四日 曇 前六時五十一度
正六時五十二度
后六時五十二度

終日霧塞毫モ海洋ヲ見ス正午新知島ノ西岸ヲ航スト云フ

五日 曇 前五十一度
正五十一度
后五十一度

正午潮流ノ爲メ百五十海里余ヲノチコタンノ島ノ沖ニ漂流ス

六日 前四十九度
正五十二度
后五十三度

午前四時卅分始メテ遠洋遙カニアライトノ島ヲ望ム針ヲ東々北ニ轉シテ前日來ノ漂

流ヲ返航シテ原路ニ進ム續テ「ホロモシリ」シユムシユ島ヲ見ル過半皆ナ雪ノ爲メニ

白シ

正午片岡侍從乗組ノ水産會社臘虎獵帆前船第一千島丸ニシユムシユ「ホロモシリ」ノ海

峽ニ遇テ宮内省屬子林精一直チニ小艇ニ駕シ來艦ス是ヨリ千島丸本艦ノ水先キヲ爲

ス占守島ニ着シ先ツ「ボルト」ヲ以テ占守「ホロモシリ」小千島海峽ノ測量ニ從事ス深サ四

尋ノ「ホロモシリ」島乙女灣ニ碇泊ス時ニ午後一時也「エトロフ」ヲ發シヨリ此處ニ至ルノ

間ニハ艦ヲ泊スル港灣ヲケンバナリ海峽兩島ノ間北ハ廣サ二海里半南ハ二海里兩島

相盛ル處ハ僅ニ一海里ニ過キス南北峽ノ長サハ十海里トス該島ハ海面ヨリ四處ニ積雪アリ之ヲ要スルニ全島ノ大半ハ積雪ニシテ堅キテ鉄ノ如シ鶴嘴ヲ以テ之ヲ穿ツモ容易ニ碎クス誠ニ万古ノ凝雪ナリ

午後六時艦長以下ノ諸員千島丸ニ行テ侍從片岡子ヲ訪問ス

七日 前五十三度
正六十六度
后六十六度

本日片岡侍從ノ一行六人(屬子林精一 道尾多羅尾忠郎 省丁某 千島丸ヨリ軍艦ニ移乗)

セラル

是ヨリ先キ侍從片岡利和公ハ昨年十一月長クモ我カ

天皇陛下ノ救命ヲ奉シ北海道千島諸島探險ニ赴カン廿四年十一月十一日松前丸ニ

搭シ函館ヲ發ス時冬期ニ際シタルハ風吼ヘ波立ツ同十三日根室港ニ入ラル同十四

日晚再ヒ該船ニ搭シ十五日曉キ千島ニ向テ進航同十六日色丹島ニ上陸土人酋長ヤ

「ユフ」ニ占守島等ノ實況ヲ尋ラシ同十七日曉キ抜錨留別ヲ經テ紗那ニ着セラレタ

ルガ風濤ノ爲メ投錨ニ困難ナリ船客一同ハ辛クメ僅ニ上陸スルヲ得タルモ荷物ハ

一個モ揚ルヲ能ハス該船ハ其難ヲ十五哩ノ「シヤヤマ」港ニ避ケタリ(此港ハ明治十九年 栖原之支配人

若松忠次郎ノ發見ニカ(コノ港ハ)エトロフ島ノ良港ニテ安全ニ碇泊シ得ルニヨル同十
 八日未明漸ク風濤ノ穩ナルヲ待テ再ヒ紗那ニ來リ荷物ヲ陸揚シ終テ「シベトロ」ニ向
 テ拔錨ス午后二時「シベトロ」ニ上陸セラレ該船ハ即日紗那ニ歸航セリ冬期「ウルツ」
 ノ航路絶ヘタルヲ以テ「エトロフ」嶋「シベトロ」ヲ撰定シテ越年ノ根據トナス同所ハ島
 中ノ東北端ニ位シ時機ヲ見テ得撫島ニ渡リ其島内實況ヲ視察シ得ルノ便アルヲ以
 テナリ而シテ同所滞在中ハ烈風降雪ヲ冒シ常ニ近傍六七里ノ地ヲ探險セラレ或ハ漁舍
 ニ宿泊セラレ同村字「ビシキベツ」杯ハ雨露ヲ凌クコリノ小屋ニ滞在セルト一週間ナ
 リシト時漸ヤク降雪深ク遠ク探險スルト能ハス春季堅氷ノ節ヲ待チ二月十五日陸
 路出發全十九日紗那ニ着セラレ同郡役所ヲ訪ヒ親シク風俗民情物産等ヲ尋テラレ
 全地滞在中二月廿八日郵便船單冠灣ニ着港郵便ヲ得テ初テ昨年進航以後ノ内地實
 況ヲ聞テ得ラレタリト三月二月留別ニ至リテ戶長役場以下ヲ巡視セラレ全六日同
 所ヲ發シ「ヒトカツ」灣等ヲ巡視セラレ全月廿日ニ再ヒ「スベトロ」ニ歸リ全廿三日同
 所ヲ發セラレ該島東北端ヲ巡視シ「モヨロ」ニ至リ小屋掛ヲナシ盡ク其近傍ヲ巡視シ
 全月末「シベトロ」ニ歸ラルル四月十二日流漸ノ季ヲ待テ端艇三艘ヲ泛ヘ以テ流漸ノ間

ヲ委曲シテ進航シ辛フ「オアタリ」ニ着スト今其實況ヲ聞キコレヲ記サシニ海面數
 十里全ク氷結シ其景况實ニ凄然タリ一行ハ「コ」ニ勇氣ヲ鼓シ進航スルニ大山ノ如
 キ流漸左右ヨリ來リ將ニ狹擊セントスルモ辛ニ其險ヲ免ル、ヲ得彌々進テ「オア
 タリ」ニ近ゾキシ時俄ニ西北ノ風烈シク吹キ起リ流漸再結合セントスルノ寒氣トナル
 船ハ却流ノ進マヌ一同力ヲ限リニ助合ヒ「オアタリ」ニ着セントスレモ風ハ益烈シク彌
 ヲ進メハ彌々却流シ百方術盡キ舟ヲ結氷ノ上ニ曳キ揚ケ恰モ陸ニテ雪舟ヲ曳ク如
 ク力ヲ協セテ曳キ進ミ氷ノ盡ル所ニ至リテ再ヒ海面ニ泛ブ荷モ薄氷ト認レハ碎キ
 テ進ム千辛万苦尙ホ同所ニ達スル能ハス更ニ一計ヲ案出シ一塊ノ流氷ニ乘シ以テ
 筏トナシ辛フノ安着スルヲ得タリト(聞者ナシト據然クラシム)上陸ノ函館ノ人平出喜三郎ノ漁
 舍ニ一泊セラル、ヲ得テ初テ蘇生ノ思ヒヲナセリト翌十三日同地ヲ發シ前日ノ如
 ク「オトイマウシ」ニ達シ「コ」ニ二日ノ間ニ於テ已ニ必死ノ場合ニ臨メル幾回ト云フ
 數ヲ知ラス幸ニ舟ノ小ナル爲メ僅ニ危難ヲ免タリ若シ大船ヲ以テ進航スルハ或
 ハ此一行ノ安否ハ實ニ知り易カラサル也同十六日陸路紗那ニ向テ出發セラル路傍
 仰キテ氷山ヲ見ル「ナイボ坂」ニ至テハ攀ルニ道ナク堅氷疊々其狀頭上ニ墜落セント

スルノ勢アリ一行ハ足ニ鉄製ノ「カンダキ」ヲ穿テ手ニ驚口ヲ擲ヘ此驚口ヲ氷角ニ引掛テ兩足ヲ矮縮シ一步ツ、登ル一滑一步ヲ失スレバ生命ヲ誤ルニ至ルヤ知ルヘキ也故ニ此行水中ニアリテモ其寒ヲ知ラス危險ヲ冒メ暑ニモ暑ヲ苦マス背ト面ト只冷汗ノミ「ホロシ」ト云ヘル難所ニ達ス一方ハ岬々タル禿山ニシテ一方ハ塊氷劔山ノ如キモノ凡ソ七里辛メ紗那ニ着シ定期船ノ來ルヲ待ツ本年ノ積雪タル六十才ノ老人モ未曾有ニノ平年ナレハ四月中旬頃ニ定期船ノ航行アルモ本年ハ五六月ニ至ラザレハ航行難カルヘシ元來一行ハ端艇ヲ以テ航行スル見込ナリシモ實際ヲ取調タレハ行ハレ難キヲ以テ遺憾ナカラ空シク滞留セリ然ルニ五月一日ニ至リ第一千島丸流水ヲ凌ギツ、紗那ニ寄港セルヲ幸ヒ船長ノ承諾ヲ得テ乗船シ紗那ヲ拔錨スルヲ得テ五月十八日得撫島西端ニ投錨不同島ニハ水産會社ノ漁夫十三名昨年ヨリ越年「ラツコ」等ノ獵ニ從事セリ堀助十郎ナル者監督シ一同健全ニ越年セリ千島丸ノ着島スルヤ互ヒノ喜ビ云ハソ方ナク聞ク所ニヨレハ該島東西兩端ニ分住セルモノナリト全十八日右十三名ヲ乗船セシメ東海岸ヲ進行シ「イシノコタン」ニ投錨シ直チニ拔錨セントス俄ニ激風起リ通常漁船ニテハ進ミ難キモ漁船ノ事ナレハ毫モ屈ス

ル色ナク怒濤ノ間ニ漁獵ヲ爲シツ、チリホイ島地方ヲ巡廻シテ得撫島「アガマ」ニ至ルヨリ所ハ同島北端ノ良港ナリ六月五日上陸夫ヨリ一行ノ中子林多羅尾ノ兩屬外ニ名ヲ滞留セシメ侍從ハ又々千島丸ニ投シ即日出帆「シベトロ」ニ全八日上陸セラレ(堀助十郎外十二名)翌九日拔錨再ヒ全十八日ヲ以テ「アナマ」ニ投錨侍從再ヒ一行ノ人々ト相會シ全廿四日ニ行「アナマ」拔錨「チリホイ」ニアラツト「チネルボ」イフ「プロト」シ「シ」シ「和島」ヲサオ「松輪」ホロモシ「ノ」諸島西南端各所ニ寄航シ七月四日「オツト」マ「イ」島ノ北東端ニ投錨セリ該島ハ北方第一ノ良港ニシテ外國船ノ碇泊スルコトアリ(密獵松ナ)却說一行ハ東南凡ソ三哩餘ノ沖合ヨリ外國密獵船ノ全港ニ向テ來ルヲ發見セシカ千島丸ノ入港ヲ見ルヤ俄ニ方向ヲ轉メ逃ク去レリ想フニ全地ハ千島諸島中ノ東北ニ位シ各地碇泊スルニ頗ル便利ナルヲ以テ彼密獵船ハコトヲ根據トシ來ルナルヘシ七月五日占守島モヨロフ灣ニ上陸一行ハ茲ニ草小屋ヲ作り根據トシ海陸諸般ノ取調ニ從事セラレ千島丸ハ他ノ島嶼ニ至リ獵業ヲ營ミ一行ハ該船長ヨリ「ボ」ト「ト」一艘ヲ借り請ク近海巡航ノ用ニ供セラル七月十八日千島丸ヨリ一層大ナル外國密獵船同灣ニ投錨上陸ス一行ハ彼レニ向テ來航ノ理由ヲ詰問セシニ彼答フ

ニ魯領ニ於テ捕鯨漁者ナルカ飲料水欠乏シ之ヲ求ムル爲メ上陸シタリト尙彼等一行ニ魯人ナリヤ日本人ナリヤヲ問フ彼等ノ滯留一週間斗リニ「ホロモシリ」ノ西方ニ黒烟ヲ認ム是レ亦ターノ密獵船ニシテ其山ニ放火セルナリ一行ノ各島巡視中各所ニ密獵船ノ伐木跡又タハ外人ノ屯集セル痕跡等ヲ發見セシテ數々ナリ蓋シ是皆密獵船ノ横行セシモノナラン八月四日ニ千島丸再ヒ全島ニ投錨セリ全六日午前拔錨凡シ數哩進航セシニ遙ニ黒烟ヲ吐キ此方ニ向ヒ來ルニ大漁船アルヲ近寄りテ之ヲ見シハ彼艦モ亦我カ方ニ針路ヲ向ク接近シテ初メテ我カ帝國軍艦警城號ナルヲ知ル兩船ノ人互ニ見テ喜悅ノ情ニ堪ヘス雀躍甲板ニ登リ手ヲ揚ク帽ヲ振フテ喜ヲ表シ歡聲ヲ發シタリ殊ニ侍從ノ一行ハ是迄絶海ノ孤島ニ幾多ノ艱難辛苦ヲ忍ハシタルヲナシハ今本艦ニ相逢フテ實ニ大船ニ乘リシ感アルヤ知ルヘキナリト云フ抑千島ハ地震及雷鳴ノ稀ナル土地ト見ヘ一行ニハ七月廿一日「シムシリ」島ニ於テ只一回ノ微震ト全日幽カニ雷鳴ヲ聞キタルノミナリト又タ七月五日占守島上陸暴中モ單衣ヲ用ヒタルト一切ナシ華氏寒暖計ノ最高ハ正午過キ數分ノ間七十度ニ昇リタルノミ其他ハ七十度以下ナリト又タ一行ヲ乗セタル千島丸ノ取調タル七月ノ表ヲ

得タルニ平均温度五十五度半雨日十三晴日十曇天八海霧ノ起ルヲ十四日ナリト云フ

沿道識者及ヒ實業諸士皆唱道ス開拓使設置以來是迄數人ノ探險官吏アルモ片岡侍從ノ如ク驗難ヲ冒シ酷寒風雪ヲ厭ハス實地ヲ跋涉セル人未タ嘗テ見聞セサル所ナリト(七日侍從ノ始メヨリ是迄片岡侍從ノ記事ニカハル)

八日 前正 上陸ニ付キ記載ヲ欠ク以下之ヲ諒セヨ

九日 前正 四十七度

同夜始メテ片岡侍從ニ謁ス肴酒ヲ饗セラル此前日艦長ニ東察加鎮府ナルペートルボルシク港ニ航行シ先ニ根室ニ於テ爲シタル約ヲ履マンコトヲ請フ艦長曰フ侍從長々ノ絶域滯留今又タ航シテ魯ニ至リ侍從ノ滯留ヲ長クシ其辛勞ヲ加フ我レ是レヲ忍ヒスト然レモ我カ銳意挫折スヘカラス本日侍從ノ饗筵予ト艦長ト三人ナリ故ニ又タ侍從ニ謀ル侍從是ヲ可トス艦長曰ク然ラハ熱考セント予竊ニ魯境ヲ見ルヲ得テ歡ナ

十日 前正 四十九度
后正 四十八度

午前七時予等占守島モヨロツフ灣へ上陸ス該島ハ樺太交換以前ハ魯領ニシテ同國人ノ住居セシ所ナレバ今ニ尙ホキリシヤ教會堂及ヒ各商店等ノ殘礎アリ故ニ一見スルニ宛モ魯國ニ入ルノ感アリ灣ヲ去ル一丁斗ニシテ高二間四方二尺斗リ半ハ腐リタル一標木アリ上部ニ鷲其次キニ方二寸位ノ魯字數千其次キニ方七分斗リノ魯字數百ヲ彫刻セリ又タ明治十七年根室縣建ル所ノ我カ國標アリ其他墓標三四本ト土窟七八所アリ土中古煉瓦酒瓶及ヒ「ブツキ」罐詰等ノ古罐多ク鐵ノ「ストフ」シムヘル等ノ舊形ヲ存セルモノアリ

土人土窟ノ側即チ片岡一行ノ小屋ヲ掛ケラントル所ニ柱アリ表札ヲ掲ク文ニ曰ク「千島探險ノ救命ヲ奉シ廿五年七月來島茲ニ草屋ヲ營ミ本居トシ各所巡廻了リテ全年八月千島丸ニ乘船歸航ス紀念ノ爲メ之ヲ記ス」

明治廿五年八月五日 侍從片岡利和 侍從屬子林精一

隨行員 道廳屬 多羅尾忠郎
省丁 早川 彦重
隨行員 從者 小川 猛虎
寫真師 遠藤 陸郎
予カ一行三八共ニ舊土人ヲ居住セル「ボツト」古跡ニ赴シトス熊狐ノ足跡ヲ導者

トシ無知不案内草木ノ野ヲ踏ミ分ク行ク海霧四方ニ塞カリ數歩ヲ隔ツレハ同行ヲ失フニ至ル行ク廿丁斗リニシテ一湖(水)アリ平均十町四方位全島ノ西北ニアリ又タ行ク十餘町ニシテ一大湖アリ長サ一里余巾二十丁斗リ十丁斗リ五六丁ノ間小湖連綴其下流北東方「ボツト」ヲ經テ海ニ注ク全島最大ノ湖ニシテ又最大ノ川流タリ其上方ニ土人聚落ノ跡ヲ認ム廢土窟凡ソ二十斗リ各所ニ散在ス各窟ノ入口ハ皆北ニ面ス蓋シ風雪ヲ避クル防禦ノ實驗ヨリ出タルナルヘシ窟ハ先ツ地盤ヨリ深サ五六尺ニ堀リ下ツシ周圍ハ窟ノ大小ニ依テ廣狹同シカラス四壁ニ破綻ノ板ヲ並ベ四隅ニ柱(添木ナリ)ヲ立テ棟ヲ掛ケ流水或ハ板ヲ架シ上ニ土ヲ盛り一爐ニ煙出シト一ノ明リ窓アリ一入口ニ必ス階ヲ設ク出入ノ便ニ供ス棟ト桁ノ要部ニハ寸ク八九寸以上ノ鉄釘ヲ以テ留メトシ竈及爐ニハ鉄鍵ヲ鈎ル其狀内地ノ極粗ナル農家ニ異ナラス每窟ノ外圍ニハ必ス長サ七間半巾六間位ノ棒柱ヲ四角ニ並列ス藁茂セル草ヲ分ク意ヲ留メテ見ルニ耕地ノ跡ナリ大凡ソ四十五步位ヲ以テ一戸ノ耕地トナセルモノハ如シ其四圍ニ杭ヲ立テタルハ犬牛ノ乱入ヲ防キタルモノナリト云フ之ヲ土人「イヨ」

(我カ軍艦根室拔錨ノ際水先案内且ツ風土顧問トシテ色丹土人副會長「アネチ」云フ)

ニ問フ曰ク蕪菁大根馬領薯牡丹菜ハ皆作レリ凡テ根生菜葉ノ類善ク繁殖スト
 舊土人酋長ストロロソリアヤリコフ五十三才(露語ヲ能ク又タ土人語ヲ兼メ明治十七
 年今ノ色丹島ヘ移ル迄ハ此兩人初メ色丹
 土人一統此占守島ニ居住セリ故ニ此地ヲ詳識ス) 蠶キニ根室帯在中予ガ全郷人對馬伍三郎ノ紹介ニテ此兩人
 小談話スルヲ得タリ則チ云フ占守在島ノ折ハニケ村ニ別レ四十余戸アリ人口二
 百〇六人洋牛卅七頭ヲ飼ヘリ其飼料ハ野草ヲ刈リ與フ欠乏ヲ告レバ原野ニ放牧シ
 「ヨリ」草ヲ食レシム冬季ハ乾草ノミヲ以テ飼フ故ニ筋肉瘠セ居ルモ春夏青草ニ就テ
 ハ常ニ能ク肥大ナリシナリ
 探險中ハ各種草木ノ標本六拾余种ヲ採取ス草根葉及木實ノ食フヘキモノ多シ其重
 ナルハ烟草ニ代用スル「チンホキ」草夷語ニハ「イシ」ト云フ酒ヲ釀造スル「ヤク」草食用
 草ハ「ワクシヤハル」ト云フ
 山ニ薪材トナルヘキアリ但シ建築材ニハ成リ難シ建築材ハ海岸ノ寄リ木ヲ用ヒテ
 餘ヲアリ予カ一行晩ニ歸リテ「モヨロツ」土窟ニ露宿ス手ヲ分ク互ヒニ寄リ木ヲ海岸
 ニ拾ヒ携フ處ノ鑼ニテ割リ火ヲ焚キ終日海霧ノ爲メ濕レルヲ乾シ「ビスケツ」ヲ食
 ノ寝ニ就ク或時ハ夜雨ノ爲メ寝所ヲ襲ハレ或時ハ食盡キテ飢ニ困ム然レ海霧ト風

浪ノ爲メ本艦ニ歸リテ食ヲ得ル能ハス大雨ノ時ニハ唐附木濕リテ火ヲ点スル能ハ
 ス始メテ從來用ユル所ノ火打道具ノ必用ヲ感セリ此必用ナル火打道具ヲ所持セザ
 リシハ予探險中ノ不覺ナリ破船ノ釘ヲ取り麻糸細ニ付クテ河魚ヲ釣ル亦々以テ飢
 テ凌シニ足ル「エトロフ」ニ於テハ熊笹ノ芽葉ヲ食フ飢ヲ救フ或ハ深泥ニ陥リテ泥土
 屢ニ及ビ其儘儘ニ体温ヲ以テ乾シ或ハ雨中ヲ冒シテ總身青ザメブルト戰慄ス
 此行飢寒交々迫ルモ亦々真樂其中ニアリ初メ「エトロフ」ニテ忠告ヲ受タリ曰ク無人
 島ニ渡リ草ノ少シク倒レ小徑ヲ爲スハ狐狸ノ往來スルナリ以テ行クモ害ナカルヘ
 シ其三尺位大キク倒レテ徑ヲ爲スハ熊ノ往來ナリ之レ決シテ踏ム可ラスト今實驗
 ニ當リ飢寒ニ際シ運一ニ天命ニ任スルノミ何ソ熊ノ害ヲ恐レテ予ガ探險ヲ捨シ
 ヤ熊族往來ノ道最モ予カ行歩ニ便ナリ之ヨリ探險中常ニ熊族ノ道ヲ往來シ熊糞ノ
 未ダ暖氣ヲ失卻セザルニ遇フ屢々ナレ熊族仁慈アルカ予ヲ憐シテ決シテ害ヲ加フ
 ルナシ然シテ若シ彼ノ君子者流ヨリ之ヲ見ナバ危キニ近キ暴虎憑河ノ徒ニ近キヤ
 必セリ然レモ予豈ニ世ノ所謂君子者流ノ誹嘲ヲ恐レテ宿昔ノ素志ヲ空フスルモン
 ナランヤ爾後常ニ斯ノ如キヲ以テ筆録ヲ略ス

十一日 曇 正 五十八度 前 五十四度

予一已午前八時出發モヨロツ川ノ水源ヲ探險ス事ハ地理ニ詳記ス

十二日 雨 正 五十二度 前 五十二度 后 五十二度

十三日 小雨 正 五十七度 前 五十七度 后 五十七度

本日風浪穩ニシテ測量ノボート來ル便乗シ本艦ニ歸リ飢ヲ癒シ腹ヲ肥ヤセリ予カ上陸中去ル十日午後一時頃潮流俄ニ急激トナリ錨ノ重カヲ奪ヒ本艦ヲ東岸占守灣ニ流シ殆ンド陸上ニ盪揚セントス艦員一同防禦ヲ極メ尙ホ支フルコト能ハス僅カニ瀛力ヲ借り幸ニ盪揚ノ難ヲ免ル、コトヲ得タリ翌十一日モ午後十一時頃ニ至リ潮勢ノ激奔前日ノ如シ艦長初メ一同寢テス防禦ニ盡力セリ嘗テ島島(八海里位)測量ノ爲三回迄ボートニテ(左右舷ノ格取人扣手二人)好天氣ヲ擇ヘル中途ニシテ或ハ海霧ニ掩ハレ或ハ激潮ノ流ス所トナリ其目的ヲ達セス其後本艦ヲ向ケタルニ一時間八海里ノ速力ニテ進メ依然進航ヲ覺ヘスコ、ニ於テ速力一層ヲ倍シテ僅ニ其目的ヲ達スルコトヲ得タリ其潮汐ノ時アルヲ激甚ナルヲ知スルニ足ルヘシ

十四日 雨 正 五十九度 前 五十九度 后 五十九度

上陸人三名アリ飢餓ニ迫ルヲ以テ迎ヘ船ヲ出サシコトヲ分隊長ニ請求ス風濤險ナルヲ以テ辭ス午後一時石炭庫ニ火アリ原因ハ決シテ怪火ニアラス石炭ノ粉ハ數十日海霧アルニヨリ水氣浸入熱シテ庫底ニ火ヲ蒸發シタルノミ艦体中心ニ備ヘアル大砲ノ押柱トシテ松底ニ設置セル方五寸角柱ノトタン包ノ部分六尺斗リ焚炭ニ變セリ一同ノ盡力ニテ后七時鎮火ニ至ル軍艦ニ火藥庫アルヲ以テ皆寒心セリ此際予片岡侍從ヲ慰問シタルニ從容自若トシ毫モ恐ル、色ナシ徐ニ答禮シテ曰ク死生命アリ死ナハ諸君ト同ク快ク死セノミト予侍從其人ノ沈勇ナルニ敬服セリ

十五日 曇雨 正 四十九度 前 四十九度 后 四十九度

十六日 雨 正 四十九度 前 四十九度 后 四十九度

十七日 雨 正 四十九度 前 四十九度 后 四十九度

侍從ノ一行云フ占守島上陸以來五十余日ノ中ニ晴天東察加ノ山嶽ヲ望ミタルハ昨十六日ト三回アルニミ以テ海霧ノ濃多ナルヲ了知スベシ土人「イヨ」曰ク「ベツト」ヨリ一里半先キノ海岸ニ銀礦アリ又タ曰ク「以前此島ニ居リシ時ハ長サ七八間巾一間半位兩舷高ク底深キ舟ヲ造リ東察加地方ヨリ牝牡ノ牛種買取ノ爲メ數々往來

シタル別ニ危険ナカリシト又々異形ノ一船アリ其制トノ皮ニテ袋ノ如ク製
 シ中ニ木ヲ入レ土人一人ヨリ三人迄乗ル大小同シカラサルモ乗テ袋ノ口ヲ締切リ
 水ノ入ラザルヤウニシ櫃ニテ左右ニ搔キ走リ暴風波濤少シモ恐ルニ足ラズ巨瀾
 來ルモ其底ヲクモサ岩石ニ觸ルモ損スル患ナシ陸へ上レハ船骨ヲ去リ皮ハ疊ミ
 置クナリ土人此船ニ乗リテ弓鐵砲ヲ以テ島ヲ逐ヒナカラ櫃ハ左右ニ搔ク中ニ糸仕
 掛アリテ然ルナリト此船ヲ土人ハトンドチツト云ヒ魯人ハ「マイタン」ト云フ又嘗
 テ魯人ノ一船ヲ見タルトアリ其小船銅板ニテ包ミ甲板ナク入水ト破損ノ患ナシ以
 テ此海峽往來ノ用ニ供セルトアリト云フ然其人ハ...

十八日 前 四十七度
 后 五十二度

午前「ホロモシリ」島へ上陸海霧深濃ナリ東端岬ニ至リ探險ス事ハ該島ノ部ニ讓ル
 午前海霧少シク晴レ又占守島ニ渡リ露宿ス
 十九日 雨

午前五時風雨ヲ冒シ海岸ニ沿ヒ進ミテ銀鑛ヲ驗セシトス數丁ニノ三本柱ノ密獵帆
 前船乙女灣ヲ指シ進航シ我カ軍艦ヲ見テ急ニ大洋ニ遁走ス予カ同行二人扼腕切齒

「ボート」ヲ派シ詰問セン「ト」ヲ求レ得ス是ヨリ岩石ヲ攀チ海岸ヲ十余丁(「モヨロツ」
 ニ)大小ノ流木山ノ如クナルヲ見ル其長キハ拾五六間太サ直徑二尺以上ヨリ尺或
 ハ五三寸ニ至ル者ニシテ岩石ニ磨リ皮ハ去レリ然レモ寒國ノモノト見ヘ木理細密
 質ノ美ナル驚クヘシ予皇居建築ノ用ニ供シ度トノ感ヲ起セリ其數幾万本アルヲ知
 ラス東京深川ノ木場ヲ見タル思ヒアリ如斯場所二箇ヲ見タリ土人云フ春夏流水盛
 ニシ秋ハ減ス其何國ヨリノ流木ナルヲ知ラズト寒風激烈ニシテ家屋材ヲ生セザル
 ノ地ニハ天如斯流木ヲ賜フテ其用ニ供ス造化ノ妙ト謂フヘキカ前九時予一行數々
 倒テ尙ホ止マズ險ヲ冒シ足ノ爪ヲ損シ手足ヲ痛メテ漸キク「マツ」トテニ着テ風雨益
 々強ク寒氣凜冽タリ流木ニ踏メ「ビスケツト」ヲ食ス同川ヲ涉ラント川ノ上下ヲ尋レ
 雨増シ五六尺ニ至ル渡ルヘキ方ヲ得テ空シク銀鑛ヲ驗セズ歸路ニ就ク時
 ニ先キノ密獵帆深霧ヲ冒シ該灣ニ進入セントス近ク數十間ニ予等一行ノ影ヲ見
 テ再ビ沖へ逃馳ス是ヲ予密獵帆ヲ見ルノ初メナカ後六時再モ「モヨロツ」ニ露臥ス
 二十日 前 五十五度
 后 五十二度

前午時本艦ヲ發シ測量ニ從事ス又々密獵帆ヲ見ル本艦ノ進ヲ見テ滿帆東南ノ遠洋

ニ逃ル此日ホロモシク東岸ヨリ古守ノ北岸東察加ニ對スル方面ヲ測量ス
二十一日 正前 五十六度
后 五十七度

午前九時本艦板鋪島近海ヲ測量シ后七時歸港本日ニテ東察加ノ山嶽ヲ望ムト三
回ナリ昨二十日以來季候頓ニ一變シ毎日ノ寒風厲ヲ刺スカ如ク内地十二月ノ候木
葉落ルノ季ニ毫モ殊ナルナク波浪從テ強ク加フルニ時々ノ激潮ヲ以テス僅カ滞留
ノ日數ニ數々本艦ノ錨潮ニ流サルト出火ト數回ノ危難ヲ經加フルニ石炭食糧ノ
欠乏極ニ達セリ時候ハ風止メハ雨トナリ雨風止メハ海霧トナリ從テ寒冷加ハリ滿
艦ノ人々皆ホ歸航ヲ望ムノ狀況ヲ呈スルニ至レリ爰ニ於テ三人東察加視察ノ計畫
モ遂ニ空シク齋餅ニ屬シ遺憾實ニ茲ニ在リ噫

二十二日 正前 六十五度
后 六十七度
二十三日 正前 七十九度
后 八十七度

是ヨリ先キ「ボルト」ニテ古守ノ西南岸ヲ驗ス海岸砂石ニ大熊ノ糞ト丸サ六尺四方位
ノ穴數十アリ足形砂地ニ順ハルモノ尺四方楕圓海草ヲ食シ休憩シタルノ跡ナリ
云フ

二十四日 小雨 正前 五十三度
后 五十二度

本日又々潮流風濤ノ爲メ重錨流漂艦体陸上ニ擲揚セラレトス

二十五日 正前 五十五度
后 五十一度

本日軍艦殘餘ノ糧食ヲ驗スルニ米ハ九月六日迄分一飯ニテ白米一斗五升ヲ炊テ百
二十五名ニ供ス可ク清水一日平均四石ト云フ又「ビスケット」ハ九月十二日頃迄ノ
貯アリト云フ

二十六日 正前 四十五度
后 四十八度

二十七日 正前 四十四度
后 四十一度

二十八日 正前 四十五度
后 四十七度

午前八時廿分乙女灣出帆速力ヲ緩メ行々島島迄「ソット」ヲ打テ該島ノ調査ヲ遂ク
午後一時卅五分海温四十五度「ソット」ヲ止メ南々微西ニ向テ返航歸途ニ就ク

各島別記

古守島

コノ島ト「ボロモシリ」島トハ一葦帯水ヲ隔テ、魯領東察加ニ對シ我カ國境ニシテ眞

ニ北門ノ鎖鑰ナルヲ以テ片岡侍從ノ一行ト是迄水産會社千島丸筆記ト八年交換ノ
記録十七年該島土人色丹ニ引移記録及スベリヤ鎮臺東察加史實瀛水路誌ト土人ヤ
「ユブ」イヨ」ノ說話ニ基テ之ヲ再ヒ詳記ス以下諸島ノ調査モ皆前例ニ倣ラヒ敢テ
毫モ一己ノ臆説ヲ雜ヘザル也讀者幸ニ之ヲ諒セヨ

地理 面積ハ凡ソ百平方海里周廻凡五十海里(千島群島未ダ地形ノ實測ナキヲ以テ今
ハ唯地理局出版ノ五十万分之一ノ圖ニ因
テ大體ヲ記スノミ眞ニ近クシテ大
ナル誤ナカレベシ以下之ニ倣フ)

一ノ噴火山ナク又タ熄火山ノ痕跡モナシ、コノ一島ハ所謂高原ナルモノニシテ海面
ヨリ最高ノ地四百尺ニ過キス中ニ谷地沼澤ヲ交ヘ土壤極メテ肥沃其實タル皆火山
作用ノ集成石ニシテ地層上部ハ數千年來草根木葉ノ腐化シテ成リタル赤黑色ナリ
多量ノ有機分ヲ含有シ尤モ佳良ナリ南北ニ長ク東西ニ短シ巾東北ヨリ西南ニ亘リ
凡十五里位西北ヨリ東南ニ亘ル十里位而テ地脈ハ「ホロモシリ」火山ノ麓ヲナセル平地
ハ暗ニ連續セシモノナリ我カ軍艦小千島則チ一名「クリル」海峽ヲ實測セルニ最深卅
二尋ニ過キス東經百五十六度十分ヨリ百五十六度卅七分ニ盡キ北緯五十度四分ヨ
リ五十度五十五分ニ盡キ(實測標ハ「モヨロツフ」)
東北東察加岬ト相對シ直徑八海里ヲ

隔テ根室港ヘ直航六百四十四海里(軍艦根室港出帆ヨリ占守島經泊迄九十七時ヲ要ス同
寄港經泊等々)之ヲ本艦速力一時間八海里少割テ以テスルハ三晝夜ト八時三十分
ヲ要シテ根室ヨリ占守ヘ直航スルヲ得ル計算ナリ然リト雖トモ三年ノ后群島ノ測
量整頓シタルノ日ニ望ム可ク現今ハ測量未ダ全カラス加フルニ潮流ノ激ナルト海
霧ノ濃ナルアレバ四晝夜以上ノ日時ヲ要スルト知ルヘシ

氣候

本艦八月七日ヨリ全廿七日ニ至ル三週間ニ得タル結果ニヨレハ高温六十七度低温
四十四度八平均五十六度也日本全國一年間ノ平均温度ニ同シ然カモ盛夏三週間ノ
時日ニシテ斯ノ如シ其氣象ノ酷惡ナルヲ知ルヘシ温度ハ大概五十二三度風勢ハ一
若クハ二ナリ舊土人及魯商皆云フ寒氣ハ根室ヨリ稍強シ然レモ他ノ諸島ヨリ稍暖
ナルヲ徵セリ「モヨロツフ」灣ニ年々貯ヘシ魚物ノ冰ヲサルヲ以テナリ是近島火山ノ
多ク燔燔スルニ依ルモノカ東察加ヨリ北海道駒ヶ嶽ニ至ル其火脈一線ナリト了知
スヘシ
東風最モ烈シク飛鳥方向ヲ失フ時トシテハ海潮ヲ吹キ送りテ丘山ノ崖壁ヲ襲フ又

一夕ノ中ニ高サ數百尺ノ砂山ヲ造ル沿海ノ砂地点々砂山ヲ見ル
 降雪例年十一月ヨリシテ五月頃ニ終ル積雪ニ尺強ニ過キス少雪ノ年ニハ枯草ノ出
 ルヲ見ル融雪後直チニ地ヲ掘リ見ルニ下底氷結セス(以上土人俗語ノ)北海道誌ニ七
 月占守ハ暖極五十度寒極四十一度ニ至ル又最寒ハ十二月ヨリ二月ニ至ルノ間ニシ
 テ正午ノ温度平均華氏ノ計零度以下十度タリ天氣陰翳多クシテ朗晴少ク動モスル
 ハ霧霧忽チ天地ヲ蔽フテ咫尺ヲ辨セサルニ至ル
 本艦碇泊中某日頗ル好天氣ニ會セリ寒暖計六十四度ヲ示シ体温輕快宛モ小春ノ如
 シ然ルニ俄然霧起リ終ニ濛然トシテ天地ヲ吞ミ惡寒四休ヲ震慄セシム既ニシテ寒
 暖計ヲ見ルハ降リテ五十四度ヲ示ス瞬間ニシテ忽チ十度ノ差アリ斯クスル一ニ二
 時間ニシテ濃霧消散シ計ハ元ノ六十四度ニ復シ天ハ靜ニ海穩ニ四顧甚ダ明麗斯ノ
 如クハ日トシテアラサルナシ其時候ノ劇變ヲ致ス所以ノモノハ此水面ヨリ起ルト
 コロノガス空氣中ノ温度ヲ吸収スルヲ以テナリ
 潮流ハ一晝夜ニ唯ダ一回ノ滿潮アルノミ午九時十分頃ニ最モ高ク午前九時十
 分頃ニ最モ低キヲ見ルノミ潮汐ノ毎時刻々ニ移リ行クハ實ニ法外ナリ唯潮流ノ海

峽ノ南ヨリシ又北ヨリシテ交迭スルモノ一晝夜ニ二回アリ而シテ北流シ或ハ南流ス
 ルノ潮流ハ内地潮汐ノ刻々ニ移リ行クカ如ク日々變化ヲ示ス且潮流ハ滿月ト新月
 トノ時ノミ最モ激キテ例トセリ此地ハ滿月ノ後及新月ノ後ノ第四日ニ最モ急激ナ
 リ海峡ノ中流ハ其速度一時間五里ナリ又急潮ハ大概風嵐伴ヒテ七若クハ八ノ大速
 度タリ之ヲ要スルニ波濤ノ荒キ一degree實地ヲ經タル者ニアラサルハ殆シト想像ノ及
 ビ難キモノアリ

港灣

〔洋名〕モヨロツフ(土人稱ス)ヲ以テ第一等トス左右ニ暗礁アリ灣口西ニ面シ小千
 島海峡ニアリテ距離廿餘丁ニシテ前ハホロモツリ島ノ火山ニ對シテ波浪極々穩
 カナリ我カ軍艦ノ測定ニヨシハ小艇碇泊スルニ便ナルモ大艦ヲ入ルニ足ラヌト
 云フ然シテ從前魯國漁船ノ定繫場タリシ其良港ナルヲ以テ魯商ヘリヒーラス手代
 〔テ〕シニエフ居宅ヲ茲ニ定メタリ其南三丁ニシテ一ノ瀑布アリ景殊ニ佳ナリ北一丁
 ニシテ小川アリ極メテ清泉飲料ニ適ス
 其南部三哩位ニシテ島アリ「ホルモツリ」島モツリ「島モツリ」三層腹ヨリ成立ス大小

群島ノ居ル所眞ニ鳥島ノ名空シカニス該島ヨリ東二里ニ一岩礁アリ其北ニ小
「ヨクスカ」ト云フ南方ヨリ來航スル者必ス之ヲ經過ス又占守ノ南西海峽ニハ海底
淺キノミナラス岩石多ク散布ス故ニ航海者必ス西部ヨリモシリ岸ニ沿フテ航ス
川流沼湖

「メット」川ヲ以テ大トス其中十三間餘平水深サ三尺位水源ニ湖アリ長サ一里ニ巾
十八丁位西側ニ沿フテ一湖アリ大湖ト通マ長四十間巾十五間位其上西北邊ニ一湖
アリ長十町巾八町位其他二三ノ小湖アルモ數フルニ足ラス予嘗テモヨロツ川ノ
水源ヲ檢セント欲シ登ルコト二里半ニシテ其源ヲ認ム此全島最高ノ處(海面ヨリ四
百尺ト云フ)其
西側ニ又タ一川源アリ之ヲ下レハ西南ニ流レテ海ニ注ク「キルフベツ」川ト云フ第二
ノ大川ニテ巾三間余深サ二尺迂回シテ三里余ニ流ル其三ハ「モヨロツ」川巾二間深
一尺五寸其他西南ニ七里余東北ニ四里余ノ實踐タル沿岸小川流三十餘所ノ泉水ヲ
飲ミ試レモ皆清水ニシテ食料ニ適ス是本島ハ一ノ火山オク又熄火山ノ痕跡ナキニヨ
ルカ
草木

秋冬熊笹ハ無シ唯草ノ重ナルハ「草艾葦蘆」其他針葉草ノ天然牧草至ル處アラサ
ルナシ故ニ水草共ニ便ナリ實ニ牛馬牧畜適當ノ地ナリ唯動物ノ烈風冷雨ヲ避クニ
キ廣澤ト高樹林地ナキテ欠点トナス(「アザミ」「イソチヂミ」「ベンク草」「シヤク」
ナキ「コゲノミ」「蒲公英」「草イナズメ」)アリ
「イダヤ」檀「エソマチ」ト「ノ木」ナシ五葉霜降松「ハシ」ノキ「樺柳」ノ類アルモ皆細ク短クシ
テ且横臥セリ故ニ高サ五六尺ニ滿ツルモノナシ枝條走リテ數間ニ至ルアリ是レ烈
風ノ爲メニ斯如ノ状態ヲ呈スルモノニシテ一モ用材ニ供スヘキモノナシ上帝幸ニ
方テ以テ數フルノ寄リ木ヲ以テ建築ノ用ニ供セシム豈奇ナラスヤ予其流木ヲ檢ス
ルニ多クハ「ドマツ」「カラマチ」ノ類ニシテ柳モアリ一目シテ他郷ヨリ來ルヲ知ルヘ
シ得撫以東北ノ島々ニ生スルヲ見ス柳ハアレモ大木ヲ爲スナシ「エトロフ」以南ニ
アレモ東北ニ向テ流、ノ海流アルヲ聞カス然レバ樺太以東北シベリヤ地方ヨリ來
ルモノナランカ

禽獸類

陸ニハ熊狐狼貂鴨鵲鷓「エト」ヒリカ其他小鳥アリ川ニハ紅鱒及「フナ」ノ一種「イ
「イワナ」ヲ産ス

海ニハ

臘虎水獺海獺海豹海狗比目魚杜父魚雪魚梭魚王余鯨昆布黑菜真珠菜裙帶菜鹿角菜等多シ

現今ハ無人島トナリタル故カ占守ホロモシリノ二島ハ熊狐ノ巢窟ト云フモ可ナリ或ル書ニ占守ニハ臘虎ナシ或ハ少ナシ杯ト云ヘハ實際ハ然ラス昨年九月三日ヨリ第三千島丸此灣ニ碇泊中臘虎八頭ヲ獵セリ又東西端ノ兩側ハ臘虎出產ノ一原地ナリト該年取締トシテ乘船ノ警官報ニアルヲ以テ徴スヘキナリ

占守島沿革

我々寶永三年(洋曆一千七百六十六年)日本人ノ東察加ヘ漂流セル者ニ聞キ東察加ノ支配人ヲシリ、ヨシノ之氏ヲバツカ岬ニ至リ一番島占守アルヲ親シク目撃セリ我カ正徳元年中御門天皇御宇(洋曆一千七百八十一年今明治廿五年)都督ダニイロアツチマエロフ副官イシノコマシマスキ一及吟薩克兵ノ替テ罪ヲ犯セル者償罪ノ爲メ同年八月副官以下ヨサツク兵ヲ率ヒテ出帆千島諸島ヲ經歷セリ此前年モ亦タ(二度)日本ノ漂流人ヨリ親シク諸島ノ情况ヲ聞ケリ其第一若トシテ己方對岸ニアル一番島占

守ニ向ヒ土人モ自家防禦ノ爲メ戰シカレ打負ケ途ニヨサツク兵上陸キヨサツク當年ノ報告ニ其一番島ヲ降伏セシメタルヨリ詳記セリ故ニ魯ノ占守ヲ領シタルハ實ニ此年ニカハレリ是ヨリ先キ元祿十年(千七百九十三年)五十人隊ノ長ウチロヨミルアトラソフカヨサツク兵ヲ率ヒ初テ東察加半島ヲ征服セシ時迄千島群島ノクワリル人ハ其數寡ナシト雖モ北民カサツカ人ヲ震慄セシメタル剛ノ者共ニテ小松ニ乘テ東察加人ヲ侵掠セルコ數々ナリ然レモ己ノ何人種ナルヲ知ラス自カラアイノトイヘリ此語途ニ全島人種ノ總稱トナレリクワリル人ハ他ノ北方ノ人種ト異ナリテ壯年ニ及ヘハ肢體ニ黒毛ノ濃ク生スルヲ以テ毛人ノ稱ヲ得シナリ純粹ノクワリル人及東察加ノクワリル人モ諸事凡テ隣人ノカマチキダルトハ甚タ異ナリ其面貌モクワリル人ハヤ、活潑ニ支體ニ毛深キト色ハ黒キヲ以テ一目ノ下ニ其隣民ト別種タルヲ知ル東察加半島南部ニアル土人固ヨリクワリル人種ニアラサルモクワリル人ト近ク交リテ結ビシヨリ固有ノ風俗言語ヲ改メ顔色容貌ニ至ル迄クワリル人ニ化セリヨサツク等來往セシ以來「カムチキダル」ハ勢ヲ得テクワリル人ヲ襲フテ南進スルニ至レリ(右ハヨサツク東察加人ト實話ト云フ)

千七百十三年、ヨシノフスキ氏二番島ヲ征服シ、歸陣ノ折リ、野蔴ニテ織タル衣類、日本木綿、絹刀、金錢三枚、人質二名及、エト、ロ、フ、島、ヨリ、日本ノ品ヲ携ヘ、二番島ヘ貿易ニ持チ來リ、シ、遠島ノシ、リ、ル、人、シ、ヤ、マ、ノ、イ、ナル者ヲモ捕ヘ來リ、ト又諸島人民ノ鍋釜器物刀、劍、木綿及絹類ハ、南島ノク、リ、ル、人ト貿易シテ之ヲ得ルト云フ予考フルニ、魯國東察加ヲ開カサル以前ハ、千島土人必要ノ貨物ハ、總テ東夷人ノ手ヲ經テ其用ヲ供セリト見ヘタリ、蝦夷人ノ貿易モ亦古キニアラスヤ

是ヨリ十餘年後酋長(魯人ト云フ)等ヲシテ耕耘ヲ試ミシムルニ、馬、鈴、薯、蕪、菁、大根、牡丹、菜、ノ類皆能ク生殖セリ、ク、リ、ル、人ハ元來耕耘ノ事ヲ解セズ、カムサツカヨリ種子ヲ送テ、彼等ニ植ヘシメタルヲ耕耘ニ手ヲ下ズノ始メトス

享保十五年、同十六年(千七百卅一年)再ヒ燕麥及菜大根類ノ種子ヲ送リ、ク、リ、ル、人ニ植シ、メ、シ、ニ皆能ク發育ス、レ、モ悉ク喰ヒ盡シ、來年蒔クベキ種子モ殘サマリシナリト當初、面ノアタリ如斯成功ヲ見ルモ之ヲ永續セシメ、トノ念慮更ニナシ

寛延二年(千七百九十九年)五月廿九日占守トヨシノノ願ヲ許ス、非職官「ヨサツク」ノ「シエルギン」ヲ教導トス、アルセ「ヤシ」ト「ハ」教導書ヲ編集メ、此者ニ與ヘタリ「シエルギン」ハ是ニ由

テ大人ニハ宗理ヲ説キ童子ニハ讀書數字ヲ教ユ之ヲ教導派遣ノ初トス、次キ「ニ」メン
「シ」ノ「次」キ「ニ」ロ「シ」ノ「フ」禮拜堂建立後ハ是ヲ學校ニ兼テタルヲ以テ學事モ大ヒニ進
歩セリ(千七百四十八年、ミツシヨチリ、ニ「ヒ」モ「ナ」ク「ロ」シ)
寶曆元年(千七百五十五年)占守ニ於テ牧畜ヲ試ミ、ボ、リ、シ、キ、ソ、ク、(カムサツ)ヨリ、牝、牡、牛、三、匹
ヲ携ヘ來リ、ク、リ、ル、人モ之ヲ盡力シテ蕃殖ニ從事シ、遂ニ「ホ、ロ、モ、シ、リ」島ヘモ移シ、其數
四十頭ニ及ヒ、就中「ホ、ロ、モ、シ、リ」ハ最モ好ク「ク、リ、ル」人ハ牧畜ノ爲メ小屋ヲ設ケ床ヲ張
リ「我」カ居住ヨリモ清潔ニシテ其乳汁ヲ飲ミ或脂ハ酪ヲ製スルノミニシテ肉ヲ食フ
爲メニ屠ラザリシ故漸々繁殖シテ七十餘頭ニ及ヘルモ「オ、モ、ツ、ク」海ヨリ船舶修復ノ
爲メ第二番島ヘ來リ家畜ヲ買入シヨリ千七百七十九年ニハ占守ニ纒カ三頭ヲ剩ス
ク、リ、ル、島ノ南方ニ銀、鐵及其他ノ礦物アルヲ發見セリ
寶曆六年(千七百六十年)希臘教會堂初メテ創立ス、此禮拜堂ハ一商社ノ番頭セシヨ「ロ、シ、ム」
ト云人此島ニ臘虎獵ノ爲メ出張三年間ニシテ莫大ノ利益ヲ得タリ其報謝ノ爲メ本
年ニ至リ建立シテ「ニ」ヨ「ライ」ト云フ聖像ヲ祭リ宣教ノ元トナセリ、千八百卅年ノ頃モ

舊形猶存シ信者益々増加スト云フ是ヨリ先キ初メテ洗禮ヲ行ハシメタルハ千七百卅四年土族ノテクアラシメシノイ氏ナリ千七百五十二年カムチヤツカノアウアチンボク又ハボルセシツクノ僧宣シフツオラト云フ人來リテ教門ノ儀式ヲ行ヒ「クリル」人二十七人ヲ其教徒ニ入レ僧ウオルヨフハ一千七百五十六年ニ五七番ノ島人卅五人ヲ其教門ニ入レ學校ヲ會堂ノ傍ラニ設ケ後千七百八十五年閉校迄ホロモシリヨリ來學スルモノト不斷十五人以上習學スルモノアリ「ロシノフ」ノ去リシ後ハ此學校ニテ學タル「クリル」人教師トナリ初メ師ハ千七百六十二年ニシテ「アゲシチン」ト云フ人也其後モ「クリル」人ナリシ

千七百六十六年ツェイ氏ノ調査ニ一、番、二、番、十、四、番ノ島々ニ居ル魯屬ノ土人男、二百六十二人、内、百廿一人ハ「ヤサシ」ヲ納ル「モノ」ニテ其高毎年臘虎皮四十七枚「ヨシエ」(見也)皮卅一枚三毛狐皮四十三枚ナリ爾來千八百卅一年魯米商社ヘ引渡シタル時一番ニ廿二人二番ニ五十人七番ニ十五人ノミナリ其後商社ノ報告ニヨレハ一、二、十四、十八番ノ諸島ニ「クリル」人一人モナラス此島々ニ臘虎ヲ獵スル者ハ遠ク「アゲシチン」ヨリ來ルモノノミナリ然レ唯五番島ニナミ九十七人「クリル」人住タルンミ

一千八百年ノ調ニヨレハ洗禮ヲ行ヒタルモノ男七十七人女ハ八十七人ナリ法教ノ支配ハ初メ「カマサツカ」ノ寺ニ屬シタルシカ千七百卅年以來「アレシ」(見也)「群島」一「クリル」(アツカ)ノ寺ノ所管トナシ「カマサツカ」ノ寺ニ屬シタル島々ニ出立シタル者ハ

千八百年ノ始メ魯政府此島々ヲ魯米商社ニ引渡セシ以來官吏ノ出張スルモノ甚々稀ナリト云テ明治八年(一千八百七十五年)樺太「クリル」交換ノ約成ル右交換理事官トシテ開拓中判官長谷部辰連同五等出仕時任爲基ト魯ノ理事官ト「クリル」ヲ巡廻シ諸式ヲ行フ其前東察加「ベ」ト「トル」ハウルスキ港ニ行キ該地方官ヨリ得タル所ニヨレハ當今占守新知得撫三島ニ住民アリ宗門ハ希臘宗ナリ諸島中ニ政府ノ所有物ヲシ諸島ノ需用品トモ毛皮交換ノ爲メ政府ト北米ノ「ホツチン」(シ)「商社」ト取結ビ其期限ハ今年二月一日ニ終レリ現今諸島之交易ハ魯商「ビ」(ベ)「ウ」(ウ)「ス」(ス)「氏」ノ手ニアリ

「クリル」諸島ハ其地ヨリ生スル食糧ノ乏シキヲ以テ人民ノ去就ヲ各地ニ決定スルハ全ク他ノ地方ヨリ輸送スル食糧ニ關係ス且ツ從來ハ米國ヨリ回送スル服食什器ト獸皮トヲ交換シ來レリト云フ

人口魯商家族七人其他土人ノミ三十三人現今「チ」(チ)「コ」(コ)「ダ」(ダ)「ン」ヘ寄留ノ者ヲ合スレハ

七十餘人ト云フ其他各島ニ居ルモノノ數亦未審查ト云ス
第三號

今般々リル諸島ニ魯國政府ヨリ日本政府ニ受取タルニ付住民ニ食用品其他需用イ
物ハ從前ノ制度ニ照準シ日本政府適宜ノ方法ヲ立テ年々輸送差支ナカラシムル條
各得其意聊疑念スルコトナク安堵致スヘキ事

同八年九月

日本理事官某印小野寺魯譯

前々リル三島ニ居住イ人民總數百六十四人内(アレルック王八種七十二人)ヨリ他ニ繼

業ニ出稼不分明イ人員モアルト云フ

臘虎ヲ以テ主産業トナセリ

本島獵業ヲ營スルハ海面凍合ノ冬月ヲ以テ好時節トス

漁業ハ其季ニ從テベツトオ湖ヨリ其下流ニ沿ヒ營ムル云フ

占守ニ七十餘口ノ住民アリテ(ホロモシリ)各地ハ一時ノ出稼場トナリ東察加ニ(ペー

ル)ハ(バウ)ル(シク)港ヲ開キヨリ自然占守ハ全島ハ要津トナリ土人貿易ニ便ナル

ヲ以テ此最北ノ一小島ニ移住スルモノ多クナリト云フ

是ヨリ占守以下十八島千島一圓我カ帝國ノ有トナル

明治九年該千八島ヲ三郡ニ分チ

一占守ニ(ア)テ(イ)ト(三)カ(ロ)モ(シ)リ(四)ヤ(ガ)ン(ル)シ(五)チ(ン)チ(コ)タ(シ)六(ハ)ル(ム)ゴ(ダ)シ(七)キ

カ(ル)マ(八)シ(ヤ)シ(ユ)タ(ン)九(モ)シ(リ)ノ九島ヲ合シテ占守郡ヲ置クニ新知郡トス

一得撫ニ(チ)リ(ホ)イ(三)テ(ロ)ト(三)島ヲ合シテ得撫郡トス右拾八島ハ魯國ヨリ樺太交

換ノ爲メニ請取リ後三郡設置セルナリ

互換地居島ノ彼我人民共歸向各自ノ勝手ニ任セ日本ニ移住スル者アレハ又タ魯ニ

移住スル者モアリタリ是ヨリ人數大ニ減少セリト云フ

明治十七年七月占守居住ノ土人九十七名ヲ色丹島ニ移ス是ヨリ占守以下拾八島魯

國ヨリ請取タル分悉ク無人島トナル

附(新)從(上)正(用)來(其)處(八)千(島)地(圖)ニ(於)テ(新)舊(諸)島(ノ)界(限)ヲ(示)ス

加(望)圖(ノ)我(カ)千(島)文(化)洋(行)八(年)五(月)未(だ)航(海)者(之)記(セ)ヨ

海(濱)者(之)記(セ)ヨ

予魯國接壤千島最北ノ占守島ヲ跋渉シ舊土人ノ敗土窟ヲ見以テ長大息流涕セス
ハアラス抑樺太交換以來十有八年間十八島ト六百五十海里ノ沿海漁獵ノ利ヲ放棄
シテ末々嘗テ顧ミス以テ外國ノ專橫密獵ヲ恣マニヒシム殊ニ占守殘余ノ夷民ヲ
色丹島ニ移シ以テ一時ノ苟且偷安ヲ貪ル外人ノ覬覦アル者往々我カ國ノ虛弱國土
ヲ捨ルノ愚ヲ冷評スルアルモ官民擧テ之ヲ意トセス我カ國家ヲ愛護スル精神何ク
ニアル腐敗此極ニ至ル對等ノ權何クニ求ムヘキ願レハ宇内ノ形勢各國互ニ競フテ
殖民政略ヲ執ル今ニ及ブテ奮進シ既往ノ過ヲ改メスハ國家ノ獨立期スヘカラス
愛一言ヲ附シテ職者ニ問フ職者其レ此ヲ思ヘ

附錄 東察加略記

予ガ身布衣智淺ク才劣而シテ敢テ邊境防衛ノ策ヲ講セントス眞ニ僭越恐悚ノ至リ
ニ堪ヘス然レ我カ邦今尙キ無人ノ島嶼有ルアリ剩ヘ強國ノ境ヲ接シテ其後ニ在リ
此地此境防衛是レ一日モ猶豫ス可ケンヤ此ノ急務實ニ予ヲシテ身邊ノ前後ヲ顧ル
ニ追テテザラズ而シテ防衛ノ策ヲ講ス接壤外國ノ形勢知ラザル可カラス故ニ今
此記ヲ錄ス

319478

東察加ハ亞細亞大州ノ東北端ニ連ナル一大半島ニシテ北緯六十二度ノ平行緯圈内
ニアリ此半島ノ最初發見者ノ名譽ハ一商人ナル「フヒードル、アレンキスイツ」氏ニ屬
スルナリ全氏ハ一千六百四十八年(我カ慶安元年ナリ)ニ此半島ヲ發見セシモノナリト云フ其
後一千六百九十七年五十八人隊長「コサツシ」ノ兵隊ヲ率ヒテ之ヲ征服セシニ依リ爾來魯
領「アイクツク」ノ支配ヲ受ク毛皮類ヲ貢納セシメタリ一千八百四十九年十二月魯帝
ノ詔ニ因テ新服ノ地始メテ整定セリ然シテ東察加ノ管轄地方及疇哥德斯科ノ北東
部ナル「ギイチ」ノ地方ノ部ニ之ヲ併入セリ

コノ半島ノ自然界ハ其最北部ノ東隅ナル「イルビンスキ」ノ西方一灣ニ於テ之ヲ劃セ
ルモノナリ又民區ハ「タクオートル」河ヲ越ヘテ擴張セリ土人ニ二種アリ「カムチヤダ
トル」人及「ヒカリヤクス」(即チ「コリ」)ト云フコレ等ノ土地ハ「チウキ」ノ「スノイ」岬ニ於テ
疆界ヲナセリ「カムチヤダトル」人ハ身体ノ粗立ヨリモ生活ノ法頗ル特異ニシテ稍
々蒙古人ト同類ナルカ如シト云フ
コノ半島ノ地理ハ儘カニ一二ノ記スヘキモノアルシテ該東岸中ハ「ク」氏及「ヒ他
ノ航海者ノ概略ヲ觀察セシ數件ノ外ハ「ペーリ」ノ「ク」氏ノ記述セル一二ノ概況書ノミ

年前迄ハ一疋ノ臘虎ヲサカリシカト千島邊ニテ銃獵セシヨリ次第ニ移シヨリ同
地ニテ無臘虎ヲ獵スルモ至リト云フ

該港ヨリ桑港ニ至ルニ帆走船ニテ二十日ニテ行クモ(潮以テ風向共ニ便ナル)是ニ反シ

桑港ヨリ當港ヘ來ルニハ五十日ヲ費スニ至ルト云フ我國境ナル占守島ヨリ凍察加

バトルホルスク港ニ至ル一百九十海里我カ根室ヘ歸ルノ三分一ヨリモ近シ後

來必ス關係多キノ港トナランカイヨン云フカムサツカ岬ヨリ北西岸十五哩斗リニ

メ大村落アリ是ノ地ヨリ先年種牛ヲ買ヒテ占守ニ移セシヨアリ該村ハ毎戸皆十

頭斗廿頭位ノ牧牛ヲ飼テ置ケリト云フ

波羅牟加島記

占守郡第三島サモシノ大凡周回百七十海里面積千五百平方海里

該島地位東北ハ小千島海峽ヲ夾シ第一島占守ニ隣シ其西南ハアムヒツトライト

海峽廿三哩ヲ距テサマ守伊ヲノ東北角ニ對ス西北二十七里洋ニハ第四島マカ

ナルスアリ該島ハ千島諸島之中第二位スル巨島ナリ島勢東北ヨリ西南ニ下リシ

限約五十哩ニ下ラズ全島山嶽多シ最高峰ハ三千尺ニ下ラス噴火山マ

切常ニ白煙ヲ吐シ東南ニ平原アリ昔時牧牛盛ナル時ニハ七十余頭ヲ放牧セシ處小

云フ沿岸乙女灣ヲ除ク外ハ皆斷崖絶壁ニシテ小艇ヲ藏スルモ不便ナリト云フ我

カ軍艦碇泊セルカ即チ乙女灣ナリ予等數々上陸シ地質ヲ見ルニ西海岸ハ赤土圓石

ヲ混合スル集成石ニシテ且シ圓錐狀ノ舊火山數十アリ蓋シ此島多クハ火山作用ノ

岩石ヨリ成リシモノナラン

川湖

南西端カベリウ岬ノ奥ニペイトブノシハポットノ兩湖アリ共ニ周圍五十余町皆

河流アリテ海ニ注シ河質小石ニシテ其水清シ東岸ニトルキ川アリ稍大ナリトス

巾二十間余等ボトトニテ廻ル鐵砂多シ其他小川アリ中ニ硫黃氣ヲ含ミ飲料ニ適

セザルアリ又々飲料ニ供スベキアリ

草木

種類占守ニ異ナルナキモ山岳ノ間ニ生スル樹木ハ占守ニテ見ル能ハサル長七八尺

太サ尺以上ノ木マノ之シ有リ

物産

百九

硫黄ハ特産ナルヘシ多羅尾技師ノ調査ニヨルハ現今顯著タル八坑ニテ大凡二万石以上以出ダヘシ精査ヲ遂クシハ尙他ニ巨多ノ鑛物アルヘシト云フ鐵鑛アリ鷲尤モ多シ熊ノ真窟ナルハ古守ニ異ナルコトナシカバリウ岬沿岸ニハ臘虎群居スルコトアリ諸川紅鱒多クスリト云フ

沿革

我正徳三年(一千七百)コサツクノ氏ノ命ヲ以テボルシヤ河ヨリパイタルニ乗テ大砲二門コサツク五十五人カムチヤダル十一人ヲ率ヒ第二番ホロモシリ島ニ着セシニ其島民ハ全ク獨立ノ民ニテ純粹ノシリル人毛人ト唱フル者ニ元來第五「チチコタン」島並ニ其以南ノ諸島ヨリ移リ來リシモノナリ何トナレハ「チチコタン」ノ諸島ハ既ニ總括ノ頭目ナク只其一親族中ニテ各頭目ヲ立テ以テ之ヲ服従セリ然ルニ甲族ト乙族トノ間ニ一致協力ヲ欠クテ以テ互ヒニ相忌ミ常ニ相惱マサント謀ル加之内亂並起リ竊盜ハクワリ諸島ノ常トスレハ微弱ノ族ハ其危難ヲ避ク爲メ安佚ノ地ヲ擇フニアリ或ハ婦女ヲ掠メ貿易ヲ爲シ或ハ海獸ヲ獵スル等ノ爲メニ次第ニ南ヨリ北ニ移リテ遂ニ第三島迄モ延及セルナリ「コサツク」人ノ「カムサツカ」ニ來リシ

時ハ右ノ存様ト云フ此年遂ニ戦ヒ勝テ「ホロモシリ」島ヲ征服シ遂ニ魯國ノ版圖ニ入レリ千七百五十二年納税ノ員數三十六人ト云フ當初「ボル」セシツク「ニアマナト」(人質)ヲ取置キ「ヤサク」皮税ヲ収メタルルノ調査ナリ又千七百六十六年ノ此島ノ人口「ヤサク」ヲ課セシ者七十六人ト云フ
宗教ハ總テ第一番島ヨリ指揮シ或ハ出張シテ其式ヲ行フト云フ以下ノ諸島皆同シ
其他現今迄ノ沿革ハ古守ニ異ナルコトナシ
土人「ヤ」コ「ブ」云フ「コウズキ」ヨリ「カバリウ」一回ハ巡行八日程ヲ費セリ又今ヨリ三十年前ハ「カバリウ」ニ「九戸」ヘ「ト」フ「三四戸」ノ土人アリ

阿頼度島記

第二島位置 東ハ海峽廿二里ヲ隔テ、第一島占守ニ對シ南ハ第三海峽十里ヲ隔テ、
「ホロモシリ」島ノ北西南ニ面ス南北大凡七里東西六里ト云フ千島群島ノ極西北ニアリ其狀富士山ニ類シ海中ニ屹立ス盛夏モ全面白雪ヲ被ムリ眞ノ雪山ナリ周沿海岸皆絶壁ナルモ其南部ハ低ク丘陵ヲ象鼻ノ如クニ突出シ最高ノ處三千尺余ニ及ツト云フ此島モ又「シリ」同シ「ホロモシリ」ニ屬セシニ島ニ往時ハ魯ニテ番號島

各ヲ附セス其ノコソ有ルハ近時ニ初マルト云フ四周險惡ナルヲ以テ往昔ヨリ土人ノ
 外往クモノ稀ナリ明治九年三郡設置ノ際ニハ此島ヲ以テ第二ニ置キ「ホロモシリ」ヲ
 第三ニ置ケリ山ニ小木茂生シ赤狐群居ス海岸ニハ寄セ木聚リ海狗多シ「ヤリゴブ」云
 フ今ヨリ十八年以前ハ山上常ニ白煙ヲ吐キシト蓋シ慣火山ノ一ガラン
 二十九日
 前夜遠クシリシキ島即テ「ホロモシリ」屬島（番號）「シリソキ」ハ主島ノ南西角ヨリ六里ヲ
 隔テ西北少シ西ニ當ル一島ニノ高山ノ海中ニ屹立スルモノト云フヘシ其大サ週回
 僅カニ六里ニ過キス此際「トレンヂ」（第三）ト爲ス魯人多クハ「ホロモシリ」島ニ合テ
 之ヲ稱セリ「ヤリゴブ」云フ鳥獸海狗群居ス
 「マカナルシ」ハ第四島ニ位シ（此數字ハ明治九年郡名ヲ附ス時）東北ハ「ソヒットライ」海峽
 廿七里ヲ隔テ第三島「ホロモシリ」ニ對シ東南ハ第五島ヲ海峽十三里ヲ隔テ第五島
 「チンチゴタン」ニ面ス東西六里南北四里島ノ南西凡ハ八里ニシテ一大岩島「ヌアウ
 ヌ」ト稱ス土人呼テ「ホロモシリ」トナス其周邊ハ暗礁集時シテ接近スベカラサルモ本

島ノ屬島トス臘虎水豹多シ「ヤリゴブ」曾テ秋ヨリ冬ニ涉リ他ノ一人ト共ニ臘虎拾頭
 ヲ獵獲セシコアリト云フ

第五島「チンチゴタン」ハ千島群島中第六番ノ大島ニ位スルナリ本島面積百五十六方

里周圍五十六海里東北海峽二十里ヲ隔テ第三島「ホロモシリ」ニ對シ西北ハ海峽十三
 里ヲ距テ、第四島「マカナルシ」ニ面シ西南ハ海峽九里ヲ離レテ第六島「オレンゾコク
 ノ」ニ隣ル島ノ長サハ北々東南々西ハ廿四里ニシテ巾狹キモ五里廣キモ十里ヲ出テ
 一ス南北隅ハ北緯四十九度十九分東經百五十四度四十四分

北面六灣アリ南ヨリ數フンハ第四番灣ハ小舟ヲ以テ上陸スルヲ得ヘシ灣内廣サ廿
 三町ニ過キスト離レ北岸ノ灣中コノ灣ヲ以テ兄位ニ置クヘシ一河アリ市ニ間深サ
 尺水清フシテ飲料ニ適ス其東北ノ砂場ニ殘礎アリ是ヨリ東百歩ハカリニ一丘アリ
 舊土窟二戸アリ戸ヲ開テ之ヲ見シハ殘食敗肉アリ蓋シ密獵船員ノ上陸セルナルヘ
 以テ北第五灣ニ三大流アリ二十丁余廻ルモ猶川巾四間位アリ野鼠縱橫ニ徑ヲ爲ス海
 濱ニハ無數ノ寄木標着シテ其長キモノ五六間ニシテ一箇以上ノモノアリ尤モ舊土

窟ハ元土人ノ出稼止宿所ニテアリシト云フ
地質ハ占守ホロモツリニ同シ「バシガシリ」トウガシリ山ハ高サシツヤ山ト同シハム
カシリ嶺上常ニ白煙ヲ噴ク沿岸都テ平夷細樹茂生シ野草又繁茂ス
海豹水豹ハ多カラス赤狐臘虎多シ「ヤトコブ」嘗テ他ノ土人兩三名ト一冬ニ臘虎三頭
ヲ獲タリト冬時沿岸ハ氷結スルモ洋面ハ然ラズ故ニ漁業ニハ冬季モ猶障碍ナシ又
嘗テ臘虎ノ海嶽中ニ十四五頭群臥シタルヲ見シハ此沿岸ナリト米ノ密獵船此島ノ
「チウベニミツ」ノ沖合ニ碇泊セルヲ數々アリト云フ

「カトシムコタン」島「ニルムコタン」ト云フ記

第六島「カトシムコタン」ハ面積四十方海里周圍二十七海里東北海峽九海里ヲ隔テ、
第五島「チマチコタン」ニ對シ西南ハ海峽廿三海里ヲ隔テ第七島「エカルマ」ニ面ス東西
凡ソ八里南北六里「チンチヨ」カトシムノ海峽ハ舟楫頗ル安全ナリト雖北湖ノ急激
ナルニヨリテ帆船ノ通行ハ極メテ危險ナルヲ認ムルナリ（傍島航海日誌中ニアリ同
人ハ廿四年ニ航海セル也）
「ヤトコブ」云フカトシム山ハ「マサキ」山ヨリ稍々低シ昔シハ噴火山ナリシト山岳間所
々小疎林ヲ見ルカヒニ「ドム」ト「ベドム」ト「雨小湖」アリ魚類生息セズ（ス）

沼ノ近傍ハ原野ニシテムリ「百合草多シ」（土人語ニハトハ百合草多キニ依テ）海岸ニハ
水豹多ク赤狐海豹少ナシ「バル」ト「ドム」トニ臘虎稍々多シ

「エカルマ」島記

第七島「エカルマ」ハ東北東ハ海峽二十三里ヲ隔テ、第六島「カトシムコタン」ニ對シ東
南ハ海峽五里ヲ隔テ、第八島「シヤスコタン」ニ面ス東西凡四里半南北四里又島ノ西
方ニ十二里ヲ隔テ「チリンコタン」ト稱スル小島アリ周圍凡ソ七里「エカルマ」ノ屬島
トス「ヤトコブ」云フ本島ハ「チリンコタン」ノ二倍ノ大サナリ「エカルマ」山ハ高サ「バル」モ
コタン山ト全シ獸類絶無ナリ臘虎少ナシ冬期ニ海豹水豹ヲ見ルアリト
「シヤスコタン」島記

第八島「シヤスコタン」面積凡六十四方海里周圍四十海里東北ハ海峽四里ヲ隔テ、第
七島「エカルマ」ニ對シ西南海峽十三里ヲ距テ第九島「ムシル」ニ面ス島勢東北ヨリ西南
ニ流シ長サ凡十三里半巾廣キ處六里狭キハ四里且ツ二處ニ土窟ノ跡合セラ十九個
アリ皆昔時ノモノニシテ悉ク頽敗シ近時ノモノニアラスト云フ
北灣 此島東西二岳アリ其嶺相距ル凡ソ二里北東ニアルモノ現今烈シク噴煙シ

山脈縱横、險ヲ磨ス南西ニ在ルモノハ方ニ發セントスルノ勢ヒアルカ如シ其際ニ高サ一百廿尺位ノ丘陵アリテ陸上樹木甚々短小ナルアリ宛モ芝草ノ如シ北面ノ陵下ハ小灣ヲ爲ス故ニ海濱ニ岩石多シト雖トモ其中央ニ細砂平坦小舟ヲ容易ニ出入セシムヘシ是ノ灣ヨリ「エカルマ」島ヲ二百九十九度ニ望メリ之ノヨリ二町半ノ海岸岩下ニ温泉數所沸騰セリ溫度ハ華氏ノ百二十五度ナルモアリ其狀往々少シク蟹眼ニ類スルアリ其地長サ三町斗リ此灣ハ北ヨリ西ハ「エカルマ」チリンコタンノ二島ニテ風濤ヲ遮ル東ハ本島ノ嶽ニヨリ西南ハ丘陵ヨリ西位ノ岳ニ依テ水面大ヒニ穩カナリ又常ニ海鷗群集スルヲ見レハ魚兒ノ多キヲ証スルニ足レリ其地質タル西部海岸大略ハ火山作用ニヨリ成リタル岩石ニシテ三坐ノ活火山ヲ目撃セリ又温泉ヲ檢スルニ多量ノ炭酸氣ト鉄鹽分ヲ含有セリ

當地經過ノ洋人皆云フ千島群島第一位ノ硫黄山アリト「ヤーコブ」云フ「エグリベシ」ヨドリメンタリノ兩山ハ共ニ硫黄山ニシテ噴火恒ニ絶ヘズ「ゴドリ」メシタリ山ハ稍薄シ硫黄半腹ニ露出シ殆ト全山ヲ蔽フカ如シ「エグリベシ」坂ヨリ海岸迄一里斗リ「ゴドリ」メンタリ坂ハ半里斗リナリ兩山共細樹ニシテ五葉松ノ類多シ

小川アリ飲料ニ供スル十分ナリ嘗テ「モイスト」洋へ魯人「ビリベ」ウスナル人陸奥丸ヨリ稍々大ナル漁船ニ駕シテ泊スルコトアリシ「モイスト」ニハ土人ノ舍七百アリ此邊ニハ五葉松繁茂セリ「ルポモイ」近岸及「ホト」ホノチ近岸ニハ臘虎群居ス數年前函館物産會社硫黄坑探險ノ爲メ特ニ漁船ヲ派遣シタルモ風波荒々數日滯留スルモ上陸スル能ハス空シテ拔錨シ歸リタリト云フ

午前六時我艦捨子丹島十余海里洋ヲ北面ニ見テ走レリ

ムシル島記

第九島「ムシル」ハ洋中ニ四ノ小巖島ヲ連合スルモノニシテ各島幅員一里半ヲ出テス東北ハ海峽十八里ヲ隔テ、第八島「シヤスコタン」ニ對シ西南ハ海峽二十三里ヲ隔テ、新知郡第六島「ライコク」ニ面ス千八百〇五年提督「クルセン」スター「氏」ノ發見ニカ、ル洋人ノ注意恐ルヘシ

「ヤーコブ」云フ丘陵平低ナントモ河流及樹木ナシ東嶼中嶼ハ海狗西嶼北嶼ハ水豹住

第一島占守ヨリ「コ」第九島「ムシリ」迄ヲ占守郡ト號ス

是ヨリ第六島ニ至ル第六島ハ新知郡ニシテライコケ正南ゴロニシ海峽五海里ヲ隔テ、新知郡第五島ヲ「マタラ」ニ隣リ東北海峽二十三里ヲ隔テ、占守郡第九島「ムシ」ニ對ス東西三里半南北三里ヤ「コブ」云フシリソキ島ヨリ稍小ナリ半日間ニテ一週スルヲ「得」ライコケ山ハ「シ」ヨク「山」ヨリ稍々高シ樹木ナク「ム」リ草多シ獸畜魚類棲息セス周回皆岩石沿岸海豹群集スレドモ臘虎少ナシ

第五島「マタラ」本島面積凡二十二方海里周圍二十六海里西南「ナ」テサ「海峽」十七里ヲ隔テ、新知郡第四島「ラ」ソテニ隣リ正北「ゴ」ロ「ニ」シ「海峽」五里ヲ隔テ第六島「ライコケ」ニ對ス南北八里東西九里ト云フ

「ヤ」コ「コ」云フ「マ」タ「ラ」山ハ「マ」サ「モ」山ヨリ稍低シ白煙恒ニ岳上ヨリ出シ遙ニ硫黄ノ半腹ニ露出スルヲ見ル土人其山麓ニ轉落スルモノヲ拾ヒ歸ルト云フト該山及近傍ニ細揚木茂生シ野草叢生尤モ多シ北岸混布モ「イ」洋面ニ昆布茂生ス少石嶼アリ冬季臘虎少シク來住スルヲ見ル「ベ」ス「ボ」細流ナリト雖も清潔飲料ニ適ス此邊最モ平坦ナ

カ爲メナリ

カ獸類ハ赤狐少シク居ルノミ東岸ニ水豹多ク西岸ニ海豹多シ

「チ」ユ「ク」ニ「港」灣「ナ」ラ「サ」ントモ外國密獵帆船數々碇泊セシ「ア」リ蓋シ飲水ヲ得ン

カ爲メナリ

「土人」ラ「ス」コ「ト」云フ「英」記

第四島「ラ」ソテ島ハ面積十四方海里周圍十五海里西南ハ海峽五里ヲ隔テ、新知郡第三島「ス」レ「ト」テニ隣シ東北ハ「ナ」テ「サ」海峽十七里ヲ隔テ第五島「マ」タ「ラ」ニ對ス東西六里南北六里

「ヤ」コ「コ」曰フ「ハ」ル「ム」コ「ダ」ン島ヨリ稍大ナリ該島ハ色丹土人ノ占守ヘ移住巳前永住セシ地ニシテ「オ」ル「シ」テ「ア」イ「ナル」所ニ今ニ九戸ノ土人舍アリ即チ酋長「ヤ」コ「コ」本陣アリシ地ナリト

「ボ」ロ「チ」ヤ「々」々「ノ」ボ「リ」山白煙常ニ噴出シ硫黄露出ス「ボ」ン「ノ」ボ「リ」山兩山共ニ高カラス山麓樹木繁茂ス其種類ハ「チ」メ「コ」(内尺)「ガ」ン「ヒ」(前尺)五葉松等ナリ野草亦々茂生ス

「ラ」ヤ「コ」ラ「ス」ベ「ツ」ト「川」巾「ニ」尋「位」ヲ「シ」ヨ「ル」コ「ム」魚「アル」モ「多」カ「ラ」ス「エ」バ「ラ」フ「ツ」川巾ニ尋位「ヲ」シ「ヨ」ル「コ」ム「亦」少シ

「モ」モスモ「近傍ニ刺草」イタノ草茂生ス刺草ハ蓋シ蔘麻ノ類ナラソ昔ハ土人之ヲ取リテ絲ニ造リ綱ヲ脩理セリ黒狐斑狐頗ル多ク赤狐ハ少ナシ氷結ノ季節ニハ「ク」クニ臘虎海豹群集ス「コ」コト「モ」モス「バ」水豹多シ本島中最モ廣キ所モ半日間ニテ横絶通行スルコトヲ得南岸中央ニ外國密獵船ノ來泊セシコト數々アリ該島材木伐採スルカ爲メナリ

ウシシル島記

第三島「ウ」ウシスリ「ハ」二島比隣密接スルヲ以テ之ヲ併セ新知郡第三島ト爲ス西南ナル「ウ」ウシシルト云ヒ東北ナルヲ「ス」スントト云フ「ウ」ウシシルノ西南海峽十二里ヲ隔テ、新知第二島「ク」クト「イ」イニ對シ東北海峽五里ヲ隔テ、新知郡第四島「ラ」ラト「エ」エニ面ス二島皆裸体ノ一岩礁タルニ過キス唯少シク灌木ト蕪草ヲ見ルノミ其縱三里横七八町ヨリ三四町ナルベシ其中央二島ノ際ハ小岩星羅ノ如ク其廣サ七百廿尺モアルヘシ而シテ其西南「ケ」ケイト「ス」スント「子」子島ノ海峽ハ他ニ比スレハ甚タ靜ナリ

本島近傍ハ航海困難ノ處ナリ一昨廿三年水産會社第二千島丸ノ難破セシ處ナリ「ヤ」ヤ「コ」コ「フ」フ「甲」甲「乙」乙兩島ヨリ成立ス甲ノ大サハ根室辨天島ニ二倍位也南端ニ小山ア

ハ高サ色丹山ニ全シ樹木ナク野草茂生ス北端ニ沼アリ「ハ」北海ニ流レ「ハ」西方ニ流シ此兩川ニ沿テ原野アリ野草茂生ス又兩流ニ四箇ノ温泉アリ其大サ二箇其近傍ニ硫黃ヲ産ス其他小泉許多アリ皆沸騰シテ四方ニ散布シ蒸騰シテ煙トナリ宛モ一面ノ噴火山ノ如シ硫黃多ク露出ス山及沿岸ニハ鴨類常ニ群ヲ爲ス時季ニヨリ手獲スルヲ得ベシ舊土人「ラ」ラ「ソ」ソ島ニ住スル時ハ鴨ノ皮ヲ剝キ縫連シテ衣料ニ供セシト云フ又以テ其多キヲ徵スヘシ東岸ニ海豹多シト

乙ハ辨天島ヨリ稍々小ナリ全島平坦草野アリ鴨ヲ産スル多シ往時字「ア」アト「ニ」ナル所ニ土人出嫁小屋五戸アリ甲乙兩島相去ル「ハ」四五十間干潮ノ時ハ徒步シテ渡ルヲ得ヘシ臘虎水豹少シク棲息スト

カトノ島記

第二島「ク」クト「イ」イハ面積凡十五方海里餘周圍十八海里地位西南「ハ」ダヤチ「海峽」十六里ヲ隔テ、第一新知島ニ對シ東北「(無)海峽」十三里ヲ隔テ第三「ウ」ウシシル島ニ面ス東西六里南北三里半ト云フ山岳ヲ以テ一島ヲ成シ船ヲ寄スルニ使テラス

小山許多ナリ全島丘陵起伏シテ平坦ナルヲ見スト
樺木熊笹茂生シ野草亦叢生スベシ
斑赤狐共ニ群棲スル所ニシテ海豹少ナシ鷲ハ時々飛來ル臘虎ハ稀ナリト

三十日 正前 四十八度 后 五十四度

午前六時新知島ヲ北ニ見テ西々微南ニ向テ進航ス

シ、ム、シ、ル、島、記

第一島新知ハ面積百三十九方海里全周囲六十五海里地位西南ハボロン海峡五十
六里ヲ隔テ、得撫郡第一島ニ對シ東北ハマヤチ海峡十六里ヲ隔テ新知郡第二島ニ
面ス千島群島中五等ニ位スル大島ナリ島勢西南ヨリ東北ニ流レ長サ廿八里巾廣キ
ハ六里狭キハ三里峯岳多ク山間小樹林アリ原野少ナシ周回峻絶壁ノ所多シ
港灣

「プロトン」灣ハ英ノ艦將發見スルヲ以テ直チニ其人名ヲ以テ港名ニ冠セリ用意周到
ト謂フ可シ「プロトン」ハ英稱ニシテ土人ハ皆魯稱ヲ用ヒ「ブンスナヤブ」ト呼ブ
昔清泉灣ノ義ナリト港門北ニ面シ巾二町半港内周回七里港形ハ北ヨリ望メハ四角

形ヲ爲ス巾東西二里南北廣キ處ハ二里狭キハ拾四丁四面山ヲ繞ラシ能ク風波ヲ遮
斷ス故ニ列島中屈指ノ良灣ナリ恨ラクハ港門ノ海底巨石布列シテ且淺ク滿潮ノ時
モ其中央ニ尋ニ過キス昆布ハ一圓ニ生長シテ潮流ノ去來ニ從テ其尾ヲ南北ニ軟流
シ端艇ニ膠シテ進行ヲ得ザラシム其密生知ルヘシ港内ノ深サ五十尋ニ及フ所アリ
(火脈ノ動キ「ケリ」諸島ニ於テ最モ甚シキ一証也)其東岸ニ昔シ土人ノ住居スル家五戸アリ皆數十年ヲ經過セ
ルモノニカ、ル家屋ヲ距ル一町余ニ二ヶ所ノ墓地アリ十字架ノ墓標ヲ建テ羅馬字
ヲ認ム大風起ルモ波浪最モ穏カナリ船脚ノ水中ニ入ルコト一尋半以下ナレハ出入
容易トス

實測標ハ日本岬ニ建ツ日本岬ハ港門ノ西岬ニアリ其名稱古ク千八百六十三年ヨリ
唱來ルト云フ明治八年樺太クルル交換調書ヲ按スルニ該時占守新知得撫ノ三島ノ
ミニ人民居住シ其他ノ各島ハ無人島ナリト本島ニ住メル人種ハ「アノウト」ニシテ我
カ文久ノ初メニ當リ北米「アラスカ」島「アット」等(古來管亞細亞米利堅トヨリ轉住シタル
モノ)現今男女五十九人魯商店アリ手代一人ヲ置ク其家族三人皆魯ニ轉籍請願中也
ナリト云ヘリ

商業殘品ハ鳥麥粉米精製砂糖茶火藥鉛煙草食鹽麥粉等ナリ第四島ニ於テ獵業ヲ營
メルニ臘虎ハ當時ニ至リ木トニ滅却スト千八百七十四年ニ於テハ百二十頭ヲ捕獲
セルニ翌年ニ至リテ唯六十頭(明治八年)ノミ是則チ米船數々來リ臘虎ヲ獵シ發砲スルヲ
以テ住民ノ獵獲年ヲ逐フテ滅スルトハ住民一般ノ愁訴スル所ナリ
狐獵ハ魯曆十一十二ノ二ヶ月ニアリ狐ハ灰色黑色赤色トス千八百七十四年ニ十五
頭ヲ獲ルノミ魚ハ唯鱒ノミヲ産ス

港南ニ樹林アリシムシユノ比ニアラサルナリ圓經五六寸ヨリ大ナルモノ少ナシ薪
ハ寄木ヲ用ユ飲水ハ河流ニヨリ然レモ又一井ノアルヲ見タリ野草茂生ス
土人曰ク十一月ノ中旬ヨリ十二月ノ際雪尤モ多シ翌年四月ニ至テ全ク融溶シ灣中
ハ水結リナシ

物産ハ臘虎狐ナリ而シテ海豹シユトウチ(海豹ノ一種ヲ捕獲シテ食料トナス本年ノ
臘虎皮六十枚其上草一枚百五十ルールブル)我カ三十圓(黑狐皮一枚五十ルールブル)我カ
十圓

陸産ハ菜類蕪菁ハ能ク出來ントモ此地馬鈴薯ハ不熟ナリト恐クハカヲ土地ニ盡サ

マルニヨルナルヘシ占守ハ五十一度ニ接シテ尙能ク成熟ノ三四寸ノ薯ヲ得ルヲ以
テ推知スヘシ又牛三頭ノ放牧スルヲ見タリ

「ヤルコブ」云フ樹木ハ五葉松ヲシヨ樺木竹(木サ二寸位長サ六尺位)皆繁茂セリト

ア、ハ、ト、ノ、島、記

是ヨリ得撫郡ナル第三島「プロト」ハ得撫郡第二「チリボイ」島ノ西北五里ニ位シ距離
十一里ノ小孤島ナリ東西二里南北一里半四周絶壁樹木ヲ見ス硫黃山ナリ

チ、エ、ル、ボ、イ、島、記

第二島得撫郡「チエルボイ」ハ第一島得撫ノ東北ニ位シ距離十一里ニシテ二ヶノ小島
ヲ連合シ即チ「ウルツ」郡第二島トス樹木ナク灌木ト野草ノ岩礁ナリ其南島ハ壁立
高峻東西三里半南北二里位全島皆火山ニシテ常ニ白煙ヲ吐ク僅カニ少許ノ水アル
所アリ南岸ニ海狸見テ育スル所アリ又海驢多シ北島ハ休火山ナリ乾燥磽确南北五
里東西二里位沿岸海驢海豹ヲ産ス南北二島ノ間凡ソ一里半ト云フ
正午得撫島「チリボイ」島ノ海峡ヨリ得撫東雲岬ヲ左舷ヨリ西南ニ見テ太平洋ヨリ再

ビ「メ」ヨツク「海」ニ入ル是「東岸」ウ「ルツ」フ「エ」ト「ロ」フ「間」ノ「海峡」ニ「激潮」アルヲ以テ「西岸」ヲ「ヨツク」海ヲ航セリ

ウルツフ島記

第一島得撫郡「ウルツ」フ「ハ」西南北緯四十五度四分東經百四十九度廿一分ニ起リ東北ハ北緯四十六度廿分東經百五十五度廿五分ニ盡ク其面積ハ凡四百五十九方海里周圍百十八海里千島群島中第四ニ位スル大島ナリ西南ハ「海峡」廿里ヲ隔テ、「エ」ト「ロ」ノ「島」スベト「ロ」郡「モ」ヨ「ロ」岳ニ對シ東北ハ「海峡」十一里ヲ隔テ第二島「チ」エ「ル」ボ「イ」ニ面ス全島延長ハ凡ソ四十里ニシテ其巾廣キ所モ凡ソ四五里ニ過キス地味ハ他ノ無人島ニ比スレハ極メテ膏肥ナリ

明治八年交換ニ際シ得撫島ハ占守新知ト同シク住民アルヲ以テ引渡ノ式ヲ他二島ト共ニ舉行セリ小船灣（土人ノ稱英人ハ之ヲ呼フ）頭ニ二十戸アリ「アレウ」ト「人種」及「ク」リヨ「ル」人種（テ「レ」ウ「ト」ト「白」種トノ雜種）三十三人は亦皆魯國へ復籍ヲ願フト云フ酋長所管ノ一倉庫アリ現時ノ殘品ハ麥粉火藥鉛茶砂糖食鹽シヤボン蠟燭ノ類トス室ハ皆土窟ナリ皆愁訴シテ云フ當年三艘ノ帆船米國ノ旗章ヲ揚ケテ臘虎獵ノ爲メニ此島へ來レリ三

艘ノ中ヨリ一人ノ米人此地ニ在留セリ米人ヲツコヲ獵スルニ必ラス發砲ヲ以テスルカ故ニ住民ノ獵獲年ヲ逐フテ減少スト又獵業ノ時期ハ魯曆五六七ノ三ヶ月ニアリ彼等臘虎ヲ獵スルヲ以テ産業トセリ千八百七十五年ニ於テハ唯十五頭ヲ獵獲スト獵場ハ本島ト「チ」リ「ボ」イニ營メリ沿岸ニ多ク鱒及「パ」ル「チ」ウ「ス」（魚名未詳）ヲ産ス「黒赤狐」臘虎海豹海狗獺ニシテ是等ハ「チ」リ「ボ」イ「島」ト「ウ」ル「ツ」フ「ヨ」リ東北ニ隣レル島ニ於テ獵獲スルモノトス

「アレウ」ト「人」本國ニ移リテヨリ無人島トナル明治十四年ニ至リ栖原角兵衛西岸床丹灣ニ漁場ヲ開キシモ航通不便ナルヨリ十九年ニ廢業セリ此漁期ノ外ハ全ク日本人ノ住居セシ「ナ」シ明治廿四年ニ至リ根室柳田藤吉此所ニ漁場ヲ再興スルモ昨今兩年共ニ出入相償ハスト云フ變キニ栖原ノ廢業スルヤ一冬ノ中ニ漁夫十餘人死セリ世上飲水不良ナルニヨルト唱へ人皆得撫島ヲ畏ルハニヨリ根室病院ノ分拆表ヲ左ニ掲ク

得撫島床丹川水質分拆成蹟表

反

中 性

臭味

真

浮遊物

多量

有機物 十万分中

〇・一三

格魯見

少量

安母尼亞

〇

硝酸

〇

硫酸

少量

石灰

少量

重金屬

鉄

硫化物

〇

計

源ヲ雪山ニ發スルヲ以テ温暖ノ候ト雖モ特ニ清冷ヲ覺ユ西岸ニアリテ「ピリカモイ」
 「ドコタン」ヲトイマモイノ三港灣アリ東岸ニハ小船灣(名鐵灣)創成灣ノ二ヶ所トス以
 上ノ中小船灣ヲ除クノ外到底船ヲ泊スベキ所ニアラス且小船灣ト雖トモ亦タ僅カ

ニ一艘ノ小涼船ヲ入ルレハ余地ナルヲシ床丹灣ハ二十四年矯龍丸(噸積)ノ寄泊セ
 シ所ナレトモ風波荒キ時ハ寄セガタシ唯風ノ向背ニ從テ臨時難ヲ避クルノ港タル
 ニ過キス

全島中最大ナルモノヲ床丹川トス巾凡十間深サ四尺トマリ川ヲトイマモイヨリキ
 ハマソウセイ川ハ其重ナルモノナリ凡テ清麗ニシテ飲料ニ適ス唯アソクイワソ近
 傍ノ諸川ハ源ヲ硫黃山ニ發スルヲ以テ混濁白色ヲ呈ス

「スリパチ」山噴火山高サルソ三千尺ト云フ温泉ニテ所西岸床丹ノ東二里ノ所ニオン
 センザキノ硫泉トソフソルイモイトナリ
 二十四年神保技師得撫島滯留中ノ寒暖表ヲ得タレハ左ニ掲ク

六月十六日

七、〇

午后二時測定溫度攝氏計

十七日

一一、五

廿八日

一四、日

十八日

一三、〇

廿九日

一七、五

十九日

一六、五

三十日

一六、五

廿日

七、〇

七月一日

一三、五

廿一日	一六、五	二二日	一三、五
廿二日	一三、〇	三二日	一八、〇
廿三日	一四、〇	四二日	一六、〇
廿四日	一一、五	五二日	一九、〇
廿五日	一〇、五	六二日	七、〇
廿六日	一四、五	七二日	一一、五
廿七日	二〇、〇	八二日	一五、五
終計			

植物ハ矮小性ノモノ多ク樺及赤揚ノ周圍五寸乃至一尺高サ五尺乃至十五尺ノモノ
所在山岳ノ間ニ成長ス又冬ノ占守ホロモシリ邊ニナキモ爰ニハ成育ス最モ多
キヲ葦トス
實測表ハ小船灣(註)畔ノ丘上ニ建ツ(明治九年)
海草ハ黒菜眞珠菜裙帶菜鹿角菜石花菜食料トシテ最モ美ナルハ衆ノ知ル所ナリ生
産ノ景狀ハ新知島ノ沿岸ヨリ一等ヲ減セリ
有用礦物ハ銅鐵脈ハ西岸ノ一ニ並ニ其東一里余ノ間トモクダシヨリ凡ソ十一里ニア

ヲ尙探鑛セシ充分ナル鐵脈ヲ發見スル望アリ今日ニ於テ知ラレタルモノハ正シキ
石英脈ニ少量ノ銅鐵並ニ鉛鐵ヲ附屬シタルモノ多ク別ニ多量ノ銅鐵ヲ含ミタル線
狀脈多ク綠色硅質ナル安山岩變性物中ニ含マレタリ(右ハ神保技師ノ廿四年ノ探鑛
魯史ヲ按スルニ我カ明和五年西曆一千七百六十八年六月二日魯人百騎隊長「テヨル
ソ」エト「フ」ニ至ル途次前後二ク年間得撫島ニ滯留征服シテ「ヤサク」毛皮稅ヲ収メ
シヨリ其間一兩度紛擾アリシニ拘ハラズ長ク魯ノ版圖ニ歸セリ後チ之ヲ長崎關人
ニ聞キ倉皇天明六年幕吏山口高品最上常矩ヲ派遣シ寛政三年再ヒ最上及和田某ヲ
派遣ス其後享保元年六月幕吏富山保高深山運營得撫ニ上陸魯人滑失力ニ會シ且ツ
渡海ノ證トシテ標木ヲ立ツヘシトテ調役富山筆ヲ執ラ太キ柱ニ天長地久大日本屬
島ト書キ文字ヲ夷人ニ彫ラシメ「カイワタラ」(一書ニ「アタツ」)「イ」(三書ニ「ア」)「ト」
ニ建テタリト云フ又「エト」ロフ「近傍」ノ蝦夷三年間得撫ニ至リ交易スルヲ嚴禁シテ
得撫ノ魯人ヲシテ飢餓ニ苦マシメ放逐セントシテ計畫アレドモ其要領ヲ得ル能ハス爾
來幕吏モ其念ヲ絶テ「エト」ロフ「島」ヲ以テ我カ國界トシ得撫島ヲ以テ魯ノ國界トシ明
治八年樺太交換條約成リテ我カ版圖ニ歸シ翌年得撫郡ヲ置クト云フ得撫島ハ舊來

「アツタシ」子ムロ「クナシリ」エト「ロフ」諸島ノ蝦夷夏季出稼シテ臘虎ヲ獵スルノ地タリ
 其後魯人來リ争フ所トナルモ松前氏問ハス幕府奮ハスシテ永ク魯國ノ有ニ歸セリ
 嗚呼後人ニツ之ニ鑑サレハ再ヒ松前幕府ノ覆轍ニ陥ルナカラシヤ職者之ヲ思ヘ
 ナルニモ關セズ是迄無人島故ヘ確實ナル地圖モナク一昨年頃出版ノ北海道地圖中ニ記スル
 ハ昔八十年前英魯ノ圖ニ基キテ購製シタル地圖ニ過キス地圖ノ較々眞ニ近キモノハ帝國水産會
 社ラツコ取締役今村瑠山下三氏ノ手ニ成レル見取地圖ヲ以テ最
 トスヘシ故ニ予ハ該圖ニ大山郡長ノ取關ニ依テ一圖ヲ製セリ
 午后十一時得撫澤捉島ノ海峡ヲ通過ス進航中南東ノ風強ク加フルニ艦中ノ器械破
 損ス進行ヲ止ムルコト凡ソ三時間余
 エト「ロフ」島記 再出

八月三十一日 前六十二度

午前十時四十五分「エト」ロフ島「スベト」郡「スベト」灣へ投錨ス午後一時上陸
 港灣西ニ面ス東方ニ硫黃山アリ海岸ニ沿フテ「スベト」村アリ北方海濱ハ皆石ナリ
 「スベト」川「アツタ」村ノ北ニアリ源ヲ「スベト」湖ニ發ス延長五里余川巾十間背後ニ山
 ナ負フカ爲メ海霧至テ稀ニシテ本村ハ「エト」ロフ「全島」中ニ於テ最モ暖和ナリト云フ
 戶長役場病院アリ又全島ノ東北部ニ僻在スルヲ以テ人民モ質朴ノ風アリ

戶數三十五其西南沿岸數里ニ乙今丑村アリ戶數九戶合シテ四十四戶内本籍移住四
 戶本籍土人二十八戶人口三百〇一人内男百三十九人女六十二人内九十三人ハ土人
 ニテ其他ハ本籍寄留等ノ内地人トス漁業期節中一時出稼人三百人位
 本村ハ昨冬ヨリ片岡侍從千島探險根據トシテ越年セシ所ナリ
 「スベト」郡「全郡」ニク村輸出

鹽鮭千四百四十九石
 鷺尾百八十羽 但一羽代價 金壹圓卅錢位
 熊 五頭

鹽鱒二千三百四十七石
 川瀬拾頭 但一頭代價 金三圓位
 狐三拾頭 但一頭代價 金一圓位

計

輸入調査者不分明ナリトノ戶長代理ノ答ニヨリ其輸入重要物品ノ代價ヲ調ヘタル
 ニ左ノ如シ

二拾五年八月卅一日相場
 白米 一石九圓五拾錢 冬ナレハ 十二圓位
 三盆白糖 一斤拾八錢

醬油一樽八升入二圓五拾錢
 大坂酒壹升小賣五拾錢 冬ナレハ 六十錢位

大山酒一樽三圓卅錢

石油一升

二拾錢

漁夫傭賃鮭鱒兩季ニテ一人金貳拾圓位

本郡スベト戸村ヨリ紗那郡役所迄陸路二十三里同村ヨリ本郡ノ東海岸モヨロベツ迄四里

二拾五年中寒暖ノ最高最低

二月七日	十六度	最低	午前十時華氏計
七月十二日	八十二度	最高	同上

本年七月卅一日根室港抜錨以來今日初メテ戸長役場ノ新聞ヲ讀ミ内閣變動ノ事ヲ侍從ノ一行ト共ニ承知セリ又々當地産ノ麥穂一本惠與セラル能ク成熟セリ本郡北海岸盡頭得撫島ニ對スル地ヲカムイワツカチイト云フ寛政十二年近藤守重魯ノ十字標ヲ倒シテ我カ國標ヲ建テシ古蹟ナリ當時ノ揮毫者水戸藩士中村鎌次ナリ從是大日本ト書ス安政三年再ヒ幕領ニ復シ紗那ヲ直轄トシ其他ハ仙臺藩ニ委ヌ同藩醫某國標ノ腐朽スルヲ痛ミ更ニ同寸ノ標ヲ建替ヘタルニ明治三年開拓使中原大主典國標ノ背面ニ必誠百歳之後勿屈膝魯國ノ十字ヲ書スト云フ同八年國標ヲ移送シ

ヲ函館博物館内ニ裝置セリ(是ヨリ前魯人イソユニ我エトロフ島ニ七年間在留ス四寸角其風俗ヲ變スル者アルニ至ルト云フ)午後九時歸艦

九月一日 正前 七十八度
后 六十八度

午前八時十分スベトロ灣抜錨

午後五時紗那郡シヤナ灣へ碇泊直チニ上陸シヤナ灣ハ西ニ面スチリツブ山ノ南西

ニアリ西方有崩岬小灣形ヲナス海岸少許ノ砂礫ナル所アリ紗那川アリ巾拾間余水

源其沼ニ發スト云フ沿岸近傍ニ三村アリ有崩村内岡村シヤナ村也シヤナハ其中間

ニアリ前二村ハ戸數僅カ二十戸ニ充タサントモ紗那村ニハ郡役所アリ(即チ「スベト

郡十ヶ村ヲ管ス)病院アリ學校明治十三年開校戸數百五十八(内々地人百十戸)人口四

百廿三(内々地人二百六十一)稍市街ノ体ヲナシ商家旅人宿等備リテ需求ヲ欠カス栖

原所有ノ罐詰製造所ハ元官立ニテ無双ノ建築ナリ年々鮭鱒ノ罐詰十三万個ヨリ十

八万個ヲ製出スト云フ又土人高木重吉ハ洋和折衷ノ大ナル居宅ヲ構フ三万圓以上

ノ財産家也本日千島義會ノ占守丸該灣ヲ去ル數丁ノ所ニ碇泊ス右ハ八月十二日函

館抜錨シ濱中へ碇泊全月二十五日シヤナへ着岡本監輔以下二十六名ノ壯士乗組セ

カト一壯士云フ船主ノ言ニ船ハ脆弱ニシテ是ヨリ先キニハ進航ニ耐エズト故ニ進退未ク決セスト后予ノ歸途函館ニテ義會ノ人ニ聞ケハ三名ハ歸京シ残り總員ハ鮭漁ト炭焚ト二手ニ分レ各自勞力シテエトロフ島ニ越年シ失敗ノ再擧ヲ講セントセリト予岡本翁ニ傳言シテ曰ク一先ツ速ニ歸京シ後圖ノ計畫第一ナルヘント翁モ又タ歸京ノ途ニ就キタル由予ノ旅亭ハ一昨年永ク密獵船々長ノ止宿シタリト云フヲ以テ親シク其内實ヲ聞クヲ得タリ該船ハ船主ト傭人トノ間ニ苦情起リ遂ニ裁判沙汰トナリ長々當地ニ滞留シタリト從來横濱ナル密獵船會社ハ毎年二月中旬横濱拔歸シ直航ニテ三月中旬迄ニハ占守島へ碇泊漁獲ニ從事シ四月下旬ニハ横濱へ歸ルナリ又タ一方ハ暮秋水産會社漁事終了引上ケ后ニ帆船ヲ發シ千島群島ニ至ラシメ各所ニ五三人ツ、屯在越年セシメ熊狐ノ銃獵ヨリ鱈魚等ニ從事シ鹽漬等ヲ製シ翌春四月初メテ横濱へ歸ルト大概毎年ノ密獵ハ右ニ様ニ出テスト云フ別ニ密獵取調報告書寫アレトモ今略シテ記セス

今ヨリ五日以前ハ占守島ニテハ濱蕪ノ花盛最中ナリ紗那ニ至レハ花ナクシテ果實既ニ紅色ヲ帶ヘリ同シ千島ニテモ季候ノ差異如斯當事者宜ク注意アレ

本良午後八時ヨリ大雨雷鳴強シ全十時止

二日 前 六十度 后 六十度

午前五時郡役所ニ至リ當直員ニ面ス郡長不在ナルヲ以テ代理者ニ面謁ヲ請ヒ輸出入ノ調ヲ問フ曰ク廿四年ノ調アレトモ實ニ不完全ナリ

輸出品代金 三十八万二千九百二十圓

輸入品代金 五万〇〇五百廿六圓

七月中 八十五度 暖極トス

二月中 零下 寒極トス

霜降 九月下旬ヨリ五月ニ至ル

雪降 十月中旬初降十一月下旬ヨリ根雪トナリ翌年四月ニ至

ル周圍面積不分明ナレトモ舊記ニ基クニ(南四十三里東) 周廻二百八十里根室港へ百八

十七海里

實坐貸金一ヶ月金壹圓ニ付最高九錢最低七錢平均八錢五厘

土人戸口調	廿四年郡役所調ニ依ル近藤氏云フ寛政ノ始ハ奥男女七百八ニ過キズト	同享和元年調「エトロフ」	全文政五年調「エソ」	明治五年調根室支廳調			
「シヤナ」	四十九戸	百七十三人		廿五戸	百十二人		
「フルヘチ」	七月	八十六人		十五戸	七十七人		
「エトロフ」	十七戸	七十九人		十三戸	六十三人		
「ヌベトロ」	廿一戸	八十五人		廿四戸	百廿三人		
全島合計	九十四戸	四百廿三人	百九十戸	千百十八人	八百四十九人	七十七戸	三百七十五人

右ハ土人戸口ノ一斑ヲ見シ爲メ明治廿四年郡役所ノ調製ヲ元トシテ舊記ヲ參酌シ享和元文政五明治五ト三ク年ノ調査ヲ附記ス聊カ以テ後來當業者ノ參考ニ供セントノ微意ニ出ツルナリ僻島寒村ノ民モ亦タ我邦ノ民ナリ其増殖ヲ計畫スルハ治者ノ本職ナリ其之ヲ賊害スルノ障碍ヲ芟除セハ何ソ古ニ及ハサルコトアラシヤ

全島四郡十ヶ村總戸數三百十九(外九十四)人口千六百十七(外四百廿三)(男三千三百十八)(女三百〇六)北海建誌全島戸百十一人口七百七十四人十三年間ニ八百四十三人ノ増加

漁獵期出稼人千六百人位ト云フ

昨廿四年十二月片岡侍從へ呈シタル「エトロフ」全島ノ景况書ノ扣書一覽ヲ請ヒ大畧ヲ寫ス左ニエトロフ島ハ享徳以來松前氏ノ所領タリ然レトモ五穀ノ種蒔耕牧ノ業文字ヲ知リ内地ノ言語ヲ習ハス筈ヲ被リ脚絆草鞋ヲ着ク總テ内地ノ教化ニ染ハ嚴酷ニ禁制セシテ以テ土民ヲ愚ニ陷ラシメ治メ易カラシメシトノ政策ヲ取レリ故ニ漁場持一二ノ商人聚斂ヲ事トス土人憤怒シ反テ魯人ニ親狎ス魯人此機ニ乘シテ「ウルツ」ヲ蚕食シ遂ニ本島ノ備ナキヲ視ヒ煽動誑惑シテ竊ニ土人ヲ招服シ土人魯風ニ染漬シ殆ソト呑噬ノ勢アリ松前氏恐惶禦シ能ハス

天明五年幕府勘定奉行松本秀持ヲ遣ハシテ蝦夷ヲ巡視セシム時ニ魯人既ニ本島ニ至リ跋扈シテ已マズ松本氏魯人伊如欲等ヲ召シテ諭スニ國法ヲ以テス魯人止ムヲ得スシテ「ウルツ」ニ至リ遂ニ本國ニ還ル

寛政四年最上徳内幕命ヲ奉シテ千島ヲ按驗シ痛ク「エトロフ」島ノ警衛忽ニスベカラサルヲ諭ス

全十年目付渡邊胤使番大河内政壽勘定吟味役三橋成方ヲシテ巡察セシム
 全十一年書院番頭松平忠明目付石川忠房使番大河内政壽三橋成方安藝守羽太義正
 テシテ土地開拓土民保護ノ事ヲ掌ラシム閣老戸田氏教參政立花種周ヲシテ總司ト
 ス屬吏近藤守重山田嘉充ヲシテ島中ヲ按驗セシム魯人伊加欲立ル所ノ十字標ヲ倒
 シ大日本國標ヲ立ツ南部津輕ノ兩藩ニ命シテ各兵五百ヲ出シテ要地ニ備フ孤獨ヲ
 懲ミ病者ニ醫藥ヲ給スル等務メテ德化ヲ布ク土人悅服政効大ヒニ觀ルヘキモノア
 リ全十二年再ヒ近藤山田ニ命メ拓撫ノ實ヲ舉ケシム此時始メテ會所ヲ振別ニ立テ
 攝津ノ商高田屋嘉兵衛ヲシテ始テ汐路ノ碇泊ヲ計リ漁場ヲ創設セシム御用船義温
 丸ノ船頭ニ命シ全年再ヒ手船辰悅丸(石積五百)外一艘ヲ本島老門ニ泊セシム土人ニ賑
 給ス漁場十七ヶ所ヲ開ク漁法ヲ土人ニ教ユ初メテ中國ノ德恩ヲ感戴シ之ヨリ本島
 ハ永ク光化ノ域トナシ
 文化四年四月魯船(ユノナ號水兵四十三人)二艘水兵六十六人内保灣ニ侵入成卒五郎治
 外三人ヲ捕ヘ米鹽諸物ヲ掠メ火ヲ番屋ニ放チ次テ紗那ヲ侵ス時ニ南部津輕ノ兵三
 百余人戰ハスシテ遁ル戸田又太夫有萌近傍ノ澤畔ヲサウシニ於テ憤死ス(戸田氏那

ヨリ一里先キニアリ 藤原常保墓文化四年五月朔日トアリ今ノ戸田澤之ナリ幕吏關谷等ト逃走セシ兩家
 シ兵于三名路ヲ失ヒ振別字ボロボロノ斷崖ヨリ落死ス其墓ハ擇捉郡丹根前村ニア
 リ
 髻塚エトロフ郡ニアリ寛政年間幕府直轄ノ時夷民德澤ノ洪大ナルニ感シ被髮左
 衽ノ陋姿ヲ愧テ上國ノ風ヲ慕ヒ請願自ラ髻髮ヲ剪リ豎四尺五寸幅一尺三寸ノ碑ヲ
 立テ髻塚ト題シテ其德ヲ表セリ筆者正義ニシテ文化四年三月立ルト云フ
 東北丹根萌葉取地方ハ樹木ニ乏シク家木供給足ラス
 漁獲ノ實況

鮭鱒全島産セサルナシ殊ニエトロフ郡内保紗那郡留別紗那有萌別飛振別郡振別葉
 取郡スヘト郡當路ノ諸村ニ多シ其他各地ノ川流沼湖ニモ多シ産ス紅鱒エトロフ
 郡茂別沼スヘト郡當路沼紗那郡年萌湖ニ産ス鯡ハ全島悉ク産セサル所ナシト雖
 亦モ漁獲極メテ少額ナリ鱈ハ全島悉ク産ス漁業未タ盛ナラス昆布エトロフ郡沿
 海ニ多ク産スントモ採取スルモノナシ若芽ハ紗那郡沿海ニ産スントモ採取スルモ
 シナシ魚族ニハ雨鱒櫻鱒鱒鯨油子大鮮鮓オシヨロコマ鯨イツナ章魚金槍魚甲貝族

海鼠フレンツ^ハヤ海老蟹海扇海膽海草ニハ布苔海若裙帶草全島大抵産セサル所ナシ
 漁場ハ西岸ニ充テ空地ナキカ如クト雖トモ猶良好ナル鱈場數十ヶ所鮭場ハ六七ヶ
 所鱒場ハ十四五ヶ所アリ東岸ハ得茂別年萌等ニ開場スレトモ未タ盛ナラス鱈十七
 八ヶ所鮭場七八ヶ所昆布場數十ヶ所ノ良好ナル空漁場アリ鱈ハ東西海ニ多ク昆布
 ハ東海岸ニ多シ今后沖漁ヲ盛ニシテ合セラ鱈鮭等ヲ漁スル時ハ漁獲舊ニ倍スルヤ
 必セリ
 耕地反別ハ拾壹町四反七畝六歩アルノミ人民漁業ニ餘裕アルヲ以テ農業ニ心ヲ入
 ルハモノナシ
 鑛山ノ實況

歷足別山ハエトロフ郡丹根前村ニアリ硫黄ヲ噴出ス礦脈甚タ廣カラス其質也明治
 十三年七月試堀ニ着手ス礦夫三十名行事日數百卅三日ニ堀出硫黄七百八十石ナ
 リ山麓ヨリ五十町ノ坂路曲折小車ヲ以テ運搬スルモ一往返ヨリ越ル能ハス不便ノ
 爲メ収支相償ハスシテ廢坑トナル座拉山ハ燒山タリ明治十一年試堀ニ着手シタ
 トモ現今廢業ス其留別山刺牛登硫黄山ナルヲ以テ常ニ白煙ヲ噴ク昔ハ高田屋嘉兵

衛試堀ニ着手スレトモ運送不便ナルヲ以テ廢業セシト云フ硫黄山ハ茂與呂山ノ一
 脈ニシテ葉取郡ノ東隅ニアリ山腹常ニ白煙ヲ噴ケリ明治十二年試堀セリト雖トモ
 運送不便ナルヲ以テ廢業セリ明治十六年二月十二日葉取郡ノ東方三里茂與呂灣ヲ
 距ル二十町字若男瀬登ノ半腹トスヘトロ川ノ水源ナル湖水ノ間ヨリ噴火廣袤一里
 余大地噴烈ス其礦ハ硫黄ト鉄質ナリト云フ
 鳥獸類ノ實況

河獺貂黑赤及三毛狐熊金毛黑白毛海馬ハ葉取郡年其利島ニ多ク産ス海豹ハ東海
 岸ニ多シ臘虎モ稀ニ東海岸ニ來ルコトアリ鷲ハ産セサル所ナシト雖トモ就中葉取
 郡當路ニ産スル物ヲ以テ第一トス鯨ハエトロフ郡内保灣ニ時ヲ限リテ群集ス鷹鴨
 鵝兔等ハ産セサル所ナシ獵法ハ鉄砲トアマツボヲ用ルノミ
 二拾三年度獵獲高
 海馬廿四頭代金廿七圓熊六十五頭代金四百八拾七圓五十錢(平均一頭七圓五拾錢)河
 獺六十一頭代金百五十二圓五十錢(一頭平均二圓五十錢)狐六十五頭代金七十七圓五
 十錢(一頭壹圓廿五錢)貂廿二頭代金十六圓五十錢(一頭七十五錢)海豹五十二頭代金七

十八圓(一頭壹圓五十錢)鯨三百七十頭代金三百七十七圓五十錢(一頭壹圓廿五錢)鯨ハ
漁法行ハシサルヲ以テ只死鯨ヲ拾取スルノミ

明治廿四年十二月

紗那外三郡役所

片岡侍從殿ヨリ御質問ニ付キ取調差出候扣

昨廿四年十二月道廳編集北海道地質報文石川技師神保技師ノ實查ニカ、ル千島列
島ニ特有ノ形態ハ總テ西南ヨリ東北ヘ延長ス

面積凡百九十九方里(日本陸路程也)

現住民二千百人(未開ノ地寄留本)内ニ土人ノ日本ニ化セル極テ不活潑ナル者アリ

シヤナ(シヤナ)ヨリ冬候ノ温和ナルハ著シキ事實ナリ

全島拾三ヶ所ノ港灣アリトモ安全ナル良港ハナク總テ西西北并西南ノ風ヲ防クコ

ト能ハス此等ノ風位ニ對シテ紗那郡シヤマンベ港ヲ以テ最モ安全ノ港トナス(明治

年稻原支那人若松忠二)東岸ニハ殆ノト一ノ住民ナク唯トシモイ灣ニ水産會社出張所

一ヶ所漁家一戸アルノミ該灣ハ廣濶ニシテ防風ニ便ナラサントモ冬日西北ノ風烈

シキ時ハ船ヲ泊スルニ便ニシテ冬日モ流漸ノ爲メ港口ヲ鎖サルコトナシト

最高ハトカア山ニシテ海面ヨリ五千尺アリ

農業ニ適スベキ地ハアレバツノ邊并ニトシモイノ西ニアリト八ヶノ火山アリ五ヶ

ノ温泉アリ尙精シク調査セハ此他ニモアルヘシ二十四年海門艦ノ報告ノ概畧ニ擇

擇捉島ハ西北岸ニナイホ振別留別シヤナニシヤマンベニベツトブニシマトロノ七泊ア

リ北端ニモヨロ灣南東岸ニヒトカツフ灣アリ尙レモ灣口開濶ニシテ大艦ヲ安全ナ

ラシムルコト能ハス海霧終年絶ルコトナシト雖トモ其最モ多キハ五月ヨリ十月迄

ノ間トス南東岸ハ頗ル濃密ナルモ北西岸ハ稀薄ナリ北西岸ノ海霧ハ大抵風向ノ爲

メ南東岸ヨリ吹キ送ラルモノナリ留別及ナイホニ海霧稍々多キハ平地ニシテ南

東岸ニ通スルニヨル

風勢ハ十月ヨリ四月ニ至ル迄ハ北ニ偏シ(海霧寡ナ)且ツ北西岸ニハ海霧殆シト絶無

ナリト十月下旬ヨリ翌年四月下旬ニ至ル迄ハ強烈ナル北西風多ク波浪高クシテ航

海甚々困難ナリ其最モ強烈ナルハ十一、十二ノ兩月ニシテ一月以降ハ稍々其勢ヲ減

シ夏季ハ一定セスト雖トモ偏南ノ風多シ(海霧ノ深キ季候)

潮流ハ確測セサントモ大約冷流ナルヲ以テ北方ヨリ南方ヘ流ル、ヲ知ル其方向一

定セサルモノ、如ク列島間ノ各水道ニ至テハ殊ニ然リトス又タ反對潮流アルヲ見ル航海者宜シク警戒注意スヘシ

結氷及流漸ハ根室以北千島列島ノ北西岸ニ多ク其氷結ハ地方氷ニアラスシテ海流ノ爲メニ北方ヨリ流レ來ル氷塊港灣ニ入り或ハ海岸ニ觸テ相凝結シ漸次海面ニ延長シテ數十里ニ及ヒ厚サ丈餘ニ達スト云フ南東岸ニハ結氷スルト稀ナリ屢々風向ノ爲メ流漸港灣ニ入りテ結氷スルトアルモ數日ヲ出テスシテ溶解ス氷塊ノ漂流シテ來ルハ十二月下旬ニ初マリ五月上旬ニ全ク跡ヲ絶ツ

雪ハ一、二ノ兩月最モ多シ然レモ偏西北風ノ爲メニ吹キ去ラレ各地共山谷凹所ノ外ハ堆積スルト少ナシ五月下旬ニ至レハ全ク消滅ス

氣候ハ五六ノ兩月ヲ以テ最好中和ノ節トシ寒暖計四十度ヨリ六十度ノ間ヲ昇降シ一二三ノ月ハ最モ寒ク七八ノ兩月ハ最モ暖ナリ最低ハ華氏零度ニ達シ最高ハ八十八九度ニ昇ル一ケ年中數日ニ過キス又兩三年ノ實驗ニ徴スルモ近來寒氣大ヒニ減却セルカ如シト云フ降雨ハ稀ナリ六月ハ内地ニテ梅雨ノ節ナレトモ本島ハ良好ノ時ニテ快晴多シ九月ハ不順ニシテ降雨ヤ、多シト

内保灣

「アトサノポリ」トモエケシ島ヲ以テ灣ノ外端ヲナス海岸ハ一對ニ砂石ナリ一部落アリ「ナイホ」村ト云フ戸數十九(内地人六戸十三)人口二百六十人(内地人六十七人、内地人寄留者二百餘人、女六七名ニ過キ)

内地寄留人ハ時季ニ從テ同シカラス冬季ニ少ナク夏季ニ多シ家屋ハ一二ヲ除ク外ハ狹隘ナル茅屋ニシテ茅茨ヲ編テ四方ヲ圍ミ屋根ハ悉ク草葺トス室内ハ僅カ四五坪ニシテ土間ニ廷ヲ敷キ中央ニ火爐ヲ置テ數人茲ニ起臥ス故ニ空氣ノ流通惡シク汚穢ヲ極メ臭氣甚シ全村商賈ナシ當村ハ留別戸長役場ニ管隸ス全所迄陸路廿一里ト云フ内保川アリ水源ヲ海岸ヲ去ル二里内地ノ内保沼ニ發ス

別飛灣

「チリツ」山ノ南東ニアリ南方ハ小高キ平地ニシテ沿岸皆砂ナリ北方ハ山麓ニ接シテ廣闊ナル灣形ヲナス北西ノ風ヲ避ルニ足レリ一部落アリ別飛府村ト云フ戸數八百人口四十餘人ナリ夏期ニ至レハ出稼人二百餘人ニ及フト云フ村内一河アリ別飛河ト稱ス一里余ノ上流ニ沼アリ其近傍ハ温泉場ナリ

シヤマン湾

別飛府ノ北隣「チリツ」山ノ東麓ニアリ灣口ハ東方ニ面ス「チリツ」山高シ登ヘテ能ク猛烈ナル北西風ヲ遮障ス當灣ハ明治十七年三菱汽船宿禰丸初メテ北西風ヲ避ルノ良港タルヲ發見セリ爾後其利益ヲ得ルモノ多シト此港發見以前マテ遠ク「モヨロ」ニ風濤ヲ避シト云フ海岸ニ漁家二戸アリ二十二年初メテ漁場ヲ開キ漁季ニハ數十人ノ出稼アリト

モヨロ灣

「エトロフ」ノ北端ニ在リテ灣口南東ニ開ク山岳三方ニ屹立セリ北東ニアルモノヲ「ラツキベ」ト云ヒ南方ニ在ル者ヲ「モヨロ」ト云フ嶽ノ西方ニ一火山アリ火煙ヲ吐ク南東風ノ外ハ能ク風波ヲ遮障ス河流アリ清泉ニシテ飲料ニ適ス

千島冬期試航

根室國東北海上ハ毎年十一月初旬ヨリ翌年五月初旬迄結氷狂濤ノ爲メ航海スルヲ得ス故テ以テ千島群島ノ交通杜絶スル殆ント半歲島民ノ不便云フ可ラス從來千島冬期航海ノ計畫アルモ奮然挺起シテ之カ冒險ニ當ル者ナカリシカ道廳ト郵船會社ト協議整ヒ本年二月廿三日午前四時函館出帆試航船播摩丸船長布目某ナリ翌日暴

風深雪洋中ニ躊躇スルユ廿廿時間廿五日午前九時根室國花咲港ニ入ル廿六日午前四時花咲灣出帆色丹島ニ向フ海中流漸ヲ見ス同島ノ東海岸松ク濱灣ニ投錨ス灣内結氷ノ跡ナシ二十七日午前四時松ク濱灣出帆「エトロフ」島ニ向フ大流漸アリ航路ヲ遮斷スル前後三回流漸ハ無數ノ氷塊密接連續シ龜甲狀ヲ爲ス其幅七八間長サ數哩頗ル進行ニ艱ハ午後四時全島單冠灣ニ入り解舟ヲ以テ「トシモイ」川ニ向ヒ上陸ヲ試ミシモ波荒レ既ニシテ栖原漁舍ノ番人來リ導キ其東方十四五町ノ所ヨリ上陸シ郵便物及米百廿五俵ヲ陸揚セリ碇泊三日間島民ノ歡喜名狀スヘカラス單冠灣ノ形狀ヨリシテ考察スレバ「トシモイ」沿岸ハ東西北西風ニ障害ホクシテ南風ニ危險ナルヲ覺ユ蓋シ南風ハ「字」ヲ「ベツ」岬ニ避ルヲ得ヘシ冬季航海ヲ開クニ方リ宜シク先ツ定繫港ヲ擇ハサルヘカラス今回實視スル所ニ依レバ「トシモイ」ニ波止場ヲ建設セハ或ハ可ナラン

三月三日午前二時單冠灣出帆色丹島西海岸斜古丹灣ニ向フ忽チ流漸ニ遇フ前日ニ數十倍シ或ハ斷チ或ハ連リ一望際涯ヲシ本船迂廻シテ之ヲ避ク或ハ其斷所ヲ突進シテ午後三時松ク濱灣ニ入ル三日午前四時全灣拔錨ス流漸益々多ク益々大ナリ本

船風力強カテ合セ危険ヲ冒シテ直突前進シ辛クシテ午後二時花咲灣ニ入ル前況ヲ以テ考察スレバ毎年十二月下旬ト二月初旬ノ二回ニ航行セバ多少風濤ノ危険ヲ免レズト雖モ流漸期ニ至ラサル爲メ其害ヲ受ケサルヘシ今回試航ノ如キ流漸ノ期ニ會スルニ於テハ容易ノ事ニアラス四日午前四時全灣出帆暴風雨ニ遭ヒ進行困難ニ拾余時ヲ遅レ六日午前一時無事函館港ニ入ル此航海タル古來絶無ノ試航ナルモ幸ニ此好結果ヲ得ル實ニ今後本道ト千島トノ間ニ一大交通ヲ開クモノト謂フベシ

二日午前十一時三十分紗那灣拔錨午後九時トラス海峡ニテ激潮ノ爲メ本艦動搖三十八度ニ達ス四十五度ニ至レハ轉覆スト云フ

左舷ニ色丹島ヲ見ル右舷ニ國後島ヲ見ル

「シヤナ灣」ニテ軍艦買入食品價格

馬鈴薯 壹貫目ニ付キ 金拾二錢
大根壹貫目ニ付キ 金拾二錢
蕪菜 全 生鱈壹貫目ニ付キ 金拾五錢

北海道廳地質報文中ノ横山壯次郎氏實見

本島ハ千島列島中ノ第三ニアリ三十三島ノ一ニシテ根室港ヲ東北東ニ距ルコト六十三海里北緯四十三度四十一分ヨリ五十三分ニ至ル東經四十六度卅八分ヨリ五十分ニ至ル周廻凡ソ三十二里ト稱ス

島形ハ東北ヨリ西南ニ走リ長十五里幅最モ廣キハ七里稍長方形ニ似テ千島帯ノ方
向ニ從テ延長ス(地理局北海道全圖ニ於ケル全島圓形ヲ呈セ)此島ハ往古土人住居セシ
モノ擧テ根室地方ニ移轉シ一旦人跡絶ヘタリシカ明治四年ノ頃根室ノ柳田藤吉ナ
ルモノ昆布採取ノ見込ヲ以テ漁民ヲ本島ニ移住セシメシカ其収獲ノ寡ヲ以テ數年
ニテ其業ヲ廢止セリ今ハ唯當時建設セル家屋ノ零落セルヲ見ルノミ然レモ其時試
ニ放チ置キタル四頭ノ馬ハ人ノ飼養ヲ待スシテ全ク天然ノ牧草ヲ喰ミ無人ノ島ニ
年々増加シテ已ニ四十餘頭ニ及ベリ漁民引キ去リシ後チ再ヒ進入島トナリシカ明
治十七年七月十一日占守島ノ土人九十七名該島出發五日間ニシテ本島シヤナ灣
ニ上陸低地ヲ撰ミ矮少ノ家屋ヲ構ヘ之ニ居住シテ又戸長役場ヲ設ケ戸長一人筆
生一人醫員一人ヲ派遣シ年々救助費金壹千圓ヲ投シ開墾漁獵ヲナサシメ傍ラ牛豚
ヲ移畜セシメ専ラ土人ヲ耕耘ニ就カシメントセリ

先ニ根室滞留中シヨタケ_ノ戸長和田瓦成_(鹿兒島)及ヒ土人會長ヤ_ノコナ_ノ次役イヨ
 下數々面晤シ該島ノ景況ヲ聞クニ土人移住以前ヨリ雜漁場三ヶ所アリ現今
 人口五十七名戸數十六戸アリト云フ
 明治十七年ヨリ本年迄僅カ八年間ニ人口四十名減損セリ此例ヲ以テ推セハ向フ十
 年間ニシヨク_ノ土人ハ皆無ニ歸スル_ノ形趨ナリ
 耕地四町九反七畝九歩 本年ハ二町歩ヲ別ニ新開スト云フ
 播種ノ重ナルハ一ニ馬鈴薯ニ麥三ニ蕎麥等ナリ
 昆布場一ヶ所毎年収獲七十石位ト云フ
 當春根室ニ行_キ賣却セルハ熊皮十枚狐皮二百枚内三毛_ヲ狐多シ故ニ代價壹枚四五
 圓ノモ_トア_リト鱈油子魚鱈ハ_ノア_リトモ未タ試漁セスト
 海霧ハ根室ヨリ薄シト云フ
 村中共有積金五百圓位ヲ_ノト
 女夷_ハア_チス_ニ三十反位織出ス
 土人_ノ稱號及冠婚等總テ希臘教傳道師之ヲ授行スト

昔時占守島ニ居_リシ時ハ一_ハニテモ臘虎三三十頭モ獲ル_ヲアリ其語中ニ占守島ヲ
 指シテ我_カ國ト云_フ舊郷土ヲ慕_フノ情言外ニ顯_カル占守ニ居_リシ時ハ臘虎一_ハ年
 二百五十枚ヲ獲シト積雪ハ二尺位ト
 戸長月給二十圓外ニ郵便手當金七圓五十錢役場病院費共悉皆ニテ一_ハ年千圓餘又
 土人救助費千〇〇四圓八十五錢
 土人ハ昆布及狐_ハア_サラ_シ等_ノ皮ニテ一_ハ年二百五十圓位ノ収入ナリト
 建築材ハ山林アレハ十分トス
 昆布場所ハ未タ着手ヲ經サルアリ一_ハ所ノ仕込金二百圓ニテ百五十石位ノ収獲
 リ尤モ百石目ノ相場本所ニテ四百廿圓ト_(以上戸長以下)
 又報文ニ曰_フ人種及風俗ハ該土人モ亦_タアイ_ノ人種ナリトノ說アレトモ体格容貌
 共ニ矮陋ニシテ本道土人ニ比スレハ甚_ク劣_レリ蓋シ此土人ハ己_レノ本國ヲ去_テ氣
 候稍_ヤ温暖ナルトコロニ移_リ凡_テ官_ノ恩澤ニ浴_シ坐_シテ食_フヲ得ルカ故ニ海山
 ニ漁獵スル_コ少_ク唯村吏_ノ督責スル儘從來經驗_ナキ耕作ヲ以テ日ヲ送ル_ノミナ
 レハ進取_ノ氣象ニ乏_シキ源因ナル_ヘシ况_シヤ未開人_ノ風習トシテ早婚_ノ弊アリ且

ツ極メテ小數ノ範圍内ニ於テ相結婚スル故ニ自ラ体格縮少セサルヲ得ス其上一種ノ肺勞症遺傳病トナリ之ヲ享有セサルモノ殆シト稀ナリ現ニ六十名(二十三年ノ調査シト知)ノ内勞力ニ堪ユベキ壯丁ハ僅カニ六名ニ過キサレハ日ヲ遣フテ益々虛弱ニ陥ルヘク眞ニ憐ムヘキノ至リナリ(廿二年ノ如キハ死者三名生)土人ノ家屋ハ穴居ト蕪小屋トテ併セタルモノニシテ冬間ハ穴居シ夏ハ蕪小屋ニ住ム土人ノ衣服ハ男女共ニ洋服ヲ用ユ男ハ斬髮ニシテ帽ヲ頂キ女子ハ一種ノ束髮ニシテ金巾等ノ風呂敷ヲ被ル防寒用トシテ鴨皮四十枚位ヲ縫合シテ外套ヲ作ル袈衣ハ毛布及外套ヲ應用ス漁産ハ雨鱈鱈大鯡鯉コマ井アブラコカシカ鯨等トス皆港内ニテ漁獲ス又牛三十頭豚九頭近頃ニ至リ牛八十頭豚二三頭毎年産出スルモ冬季飼料ノ不給ヨリ斃死スルモノ多シト冬期肉食ノ不足ヲ補フニハ夏期中鴨ヲ干シ或ハ海豹ヲ捕獲シテ蓄テ男女共ニ酒煙草ヲ嗜ムコト甚シ

土人宗教心厚ク學ヲ希臘教ヲ尊信シ教會堂ハ各自ノ家屋ヨリ一層鄭重ニ作レリ酋長ヤイコナノ如キハローマ字ヲ善クシ毎年一二度魯語ヲ以テ東京ニユライノ許ニ手書ヲ送レリト云テ(櫻田大我居士根室ヨリ色丹島ニ渡リ實驗ノ歸途予ニ語テ云フエラシク)

守ニ居ル際東森加ベリトルホルノ學校ニ入ル者也然レモ人望ハナシコトイハレニ及ハスト又根室希羅教會ノ宣教師小松福藏年々一兩度該島ニ渡リ宗教ニ限リテ遊カニ月長ノ上ニ重望ヲ負ヘリ又浴場ハ密室ニ新ト焚石ナ山積シ水ヲ注キ其湯氣ニテ身体ヲ拭フ熱フロナリト

交通ハ夏半年間ハ毎月一兩度漁船ノ往復アルヲ以テ甚シキ不便ナキモ冬間十一月下旬ヨリ四月下旬マテ海洋氷結シ交通全ク絶ニ島ノ内部ニシヤコタンヨリチボイニ二里半同シクアナムハ三里半ノ樵夫通路アルノミ

港灣

島ノ東北端ニアルシヤコタンハ灣口狭ク灣内圓大ニシテ四五艘ノ軍艦ヲ容ル、ニ足ル實ニ天然ノ良港ナリ又大洋面ニイテモシリ松ケ渡ハ共ニ灣口廣濶ニシテ漁船ノ碇泊ニ應スヘク大陸面ノアナムマタコタンハ灣内狹長ナレトモ小船泊ノ風波ヲ避ルニ足ルベシ西南端ノノトロハ港口狹隘ニシテ小船ニアラザレハ入ル能ハス尙該灣ヲ再記スルハ

アナム及又古丹

アナムハ數々密艦船ノ寄泊スル所ニシテ薪水ヲ此所ニ取リ又物品ヲ積載セシコトアリト云フ又年々獵期ノ前後此津ニ寄泊スルコト多シト小船ノ安全碇泊地ヲ

泉アリ樹木アリ后来密獵船ノ取締ヲ爲スニハ先ツ注目セザルヘカラサルノ要地タ
リ同灣口ニ字峴別ノ小灣アリ河流アリ清水ヲ得ヘシ古丹ハ船舶ヲ泊スルニ足ラズ
松ヶ濱灣

灣口南東ニ開ク強風來ル時ハ波濤頗ル高ク粉塵ノ恐ナキ能ハス其他ノ風波ハ能ク
避ルニ足ル山間樹木繁茂スルノミナラス海岸寄リ木殊ニ多シ後來密獵船ノ取締ニ
ハ又放棄ス可ラサルノ一灣ナリ

山脈ハ島ノ中央ニアリテ東北端シヤコタン山ヨリ蜿蜒西南ノトロ山ニ盡ク之レシ
コタン島唯一ノ分水嶺ニシテ又大洋面ト大陸面トノ境界線タリシヤコタン山ハ直
立千三百五十七尺本島ノ最高山トス又本島ニハ一ノ活火山ナク又休火山ノ痕跡モ
ナシ千島群島ノ内火山ナキハ占守ト本島ノミ

櫻田大我居士曰フ冬間ハ外國密獵船ノ集窟ナルヘシ該灣ニ交々碇泊セサルノ日ハ
少ナント爰ニ水産會社ノ密獵取締出張アレトモモ文具ヲ弄スルノミニシテ云フニ
足ラスト

寒暖計ハ二十四年最高ハ八十度内外最低ハ廿四度ナリ十七年ニハ十七度ニ下リ

ト云フ

シヤコタン港ノ海水氷結セシモ四五寸ニ滿タス其他ハ流漸ノミ

夏季ハ海霧多ク南東ノ風ト共ニ來ル俄然寒冷ナルヲ多ク天候不貞也

シナシリ島記

實見ハ前島ト全一ト知ルヘシ

クナシリ島クナシリ郡ハ千島群島中ノ西南端ニアリテ根室海峡(幅最狭ノ處九海里トス)北海本道

ノ北東端即チ根室國ト相對シ千島國ノ第一首位ニアリ其大サハ群島中ノ第三ニ當
ル

面積凡九十二方里陸路ニシテ一郡四ヶ村トス泊灣上ニ戶長役場警察署病院學校(明治

十二年)郵便局等アリ四ヶ村總現在人口凡ソ一千人ナントモ西岸ニハ殆ソド人家ナ

ク唯漁期ニ寥々タル漁屋ヲ所々ニ見ルゾミニシテ冬日ハ唯「ヨロベツ」ト「オンチト」

ニ住民アルノミ

最高山ハ「チヤチヤノホリ」凡五千〇五十八尺

島形ハ東北ヨリ西南ニ延長シ長サ凡ソ三十里幅ノ最モ廣キハ凡ソ八里港灣ハ泊灣

小根室港ヨリ三十三海里大船碇泊安全ナリト云々酷暑八十六七度酷暑六七度
 降雨因沿岸ハ氷結スルコト少ナリ時ニ地震スルコトアリト云フ西岸ハ東岸ニ比シテ甚
 タ峻阻ナルハ甚タ奇ナリ此島ノ分水線少シク西方ニ偏スルニ因ル者ナリ是全クエ
 トリ之島ニ於ケル状態ト相反セリ山岳沼湖多ク平原四ヶ所アリ
 硫黄山五ヶ所
 温泉 十二ヶ所
 本籍戸數二百戸人口百卅一人(内男七十五人)入寄留千三百四十五人

土人戸口沿革表

文化六年	百卅二戸	七百五十人	内男 三百卅五人 内女 四百十五人	東夷竊々夜話ニ出リ
全 八年	百卅二戸	五百五十五人	内男 二百五十一人 内女 三百〇四人	全 上
安政元年	卅七戸	九十九人	内男 五十四人 内女 四十八人	蝦夷雜書
明治五年	十五戸	六十四人	内男 卅三人 内女 卅一人	根室支廳
明治十四年	十五戸	五十三人	内男 二十六人 内女 二十七人	全 上

泊村外四ヶ村戸長役場費金七百〇七圓八十錢(内四百五十六圓道廳補助
 其他ハ町村費及ビ雜收入)

ラウス山ノ東麓ニアリ灣口南東ニ面シ安全ノ泊地ニアラス一部落アリ人家十戸人

口百餘人ト云フ硫黄ヲ産スル多シ一昨年ハ休業シタルモ昨年ヨリ小野金六製造ニ
 着手ス盛時ハ職人殆シト五六百人ニ及フ

古史ニ稱ス厚岸ハ寛永ニ開ク根室ハ元祿ニ及ビ國後ハ寶曆寛政ノ間ニ漸スト之ヲ
 青魚鱒鮭ノ漁ヲ試ムト其以前未ダ徴スルヲ得ス文化四年魯艦ニ下ロフ紗那ヲ侵ス

ヲ聞キ當時國後在勤ノ幕吏向井久敬夷人ヲ聚メテ守備ヲ爲シ篝火ヲ焚キ幕ヲ山間
 ニ張ル以テ疑兵ヲ設テ魯艦來リ侵撃セントス其軍備周到ナルヲ望見シテ敢テ近カ
 スシテ遁シ去ル比企可滿(市郡)時ニ厚岸ニテテ變ヲ聞キ馳テ國後ニ至リ久敬ト謀リ
 文書ヲ整ヘテ箱館ニ送ル全七年六月ヲシヨリ八八人擄捉ニ來ル深山運營捕ヘテ之

國後ニ送ル奈佐政辰之ヲ鞠訊ス彼レ云フ魯人ノ命ヲ受ケ此地方ヲ探偵セントス
 政辰之ヲ獄ニ下シ全八年五月魯艦ヲヤテ號國後ノ泊ニ入り灣内ヲ測量ス南部兵

銃ヲ發シテ之ヲ却ク爾來擇捉國後ハ魯國接壤ノ界ナルヲ以テ下田條約取結迄交渉
多事ノ地トナレリ

三日 前六十度

本日午前八時三十分根室港投錨午后三時三十分上陸ス
之ヲ要スルニ千島諸島(エトロフシヨクタン)ノ得撫以北無人島ナルヲ以テ港灣岬角山
岳原野等字ニソノ名或ハ魯英ノ原名或ハ日本蝦夷ノ混淆名稱紛々錯雜シ一所ニ數名
ヲ存ス故ニ甲人ニ乙人ニ其答各異ナリテ一ナラス故ニ地理科擔當者派遣ノ上速ニ
一定ノ名稱ヲ確定アラソクテ希望ス
我カ寛政以前ハ魯人擇捉國後ヨリ深ク霧多布厚岸迄モ侵入シ右各地ニ於テ既ニ九
十餘名シ土酋ヲ魯籍ニ編入シ陰ニ皮稅ヲ徵スル勢ニ及ヒタルモ德川家齊將軍松平
越中守定信松平伊豆守信明等老中職ニ有テ精勵治ヲ圖ルヲ以テ既ニ亡失ニ垂ゾタ
リシエトロフクオナシカテ回復シ德化シ覆被スル所途ニエトロフ島ニ巖塚ヲ建設
シ今尙ホ遺跡ヲ留ムルニ至ル是德川家ノ功勞ニシテ舊幕府皇國ニ盡スモ大ナリト
謂フヘシ

千島國密獲警備私見

千島群島外國密獲艦取締當今ノ急務ナリ而シテ予實地ニ就テ是ヲ查スルニ單ニ明
治十八年達ノ如ク一二ノ軍艦派遣ノミニテ全功ヲ收ル能ハス必スヤ海陸ノ警備ヲ俟
テ然ル後功ヲ奏スルコト望ムヘシ誠ニ警備ノ業成テ拓地殖民ノ事自カラ其中ニ存ス
海陸警備ヲ緩慢ニ附シテ獨リ拓殖ヲ事トス是レ恰モ百年黃河ノ清澄ヲ俟ツナリ實効
是レ何レノ時ニカ舉ラシ又警備ノ急務ナル所以ヲ唱フルハ左ノ二要件ヨリ來ルナリ

- 一ハ國權上ヨリシ
- 一ハ國益上ヨリス

先ツ國權上ヨリスルモノヲ云ハンニ千島群島ノ位置タル東洋ノ大勢上ヨリ觀察ヲ下
ス時ハ西朝鮮巨文島ト我カ對州琉球大島ヲ合併シタルモノト千島群島ハ實ニ其位置
價值ヲ均フセリ如何トナレハ魯ノ海軍港ナル浦潮ヨリ我カ日本海峽ヲ經過シテ東西
出入ノ咽喉ニ當レハナリ今夫レ魯ハ全カテ傾ケテサイベリヤ七千魯里ノ大鐵道ヲ布
設シ我カ明治二十八年ヲ以テ其開通ノ功ヲ奏セントス此機ヲ知ルヤ巖キニ英ハ理不
盡ニモ巨文島ニ據リ數十方金ヲ損テ、砲臺ト波止場ヲ築キ魯ノ南下ノ勢ヲ制セント

ス近時英支ノ談判ニテ其海軍ヲ引上タルモ若シ一朝事アル時ハ英支連合シテ之ニ當ラントス假令軍人ヲ置カサルモ艦隊ヲ派遣スル時ハ立トコロニ防戦ノ準備ナル是レ今日我カ西海ノ大勢ナリ然ルモハ往時黒海ノ戰畧一變シテ我カ西海ニ見ルモ遠キニアラサルヘシ夫レ大國ノ全力ヲ傾ケ銳意創設スル鐵道成功ノ曉ニハ我西海ニ於テ英支ニ支ヘラレ意ヲ達スルコトヲ得サレハ再變シテ必ス我カ東北海ニ向テ航路ヲ求メ千島海峽ヲ經テ大平洋ニ出テ其利權ヲ延サントスルハ勢ノ最モ見易キモノナリ歐人ノ銳眼ナル今ヲ去ルコト五十餘年前彼ノクリミヤ戰爭ノ際ハ未タ浦潮港ノ世ニ出テサルニモ關ハラス英佛聯合艦隊ヲ以テ遠ク東察加ノ首府ナル「ペートルボールス」港ニ激戦ヲ開キタルニアラスヤ如何トナレハ魯ヲ苦ムルノ策ヨクニ出テサルヲ得サレハナリ况ンヤ現今浦潮ハ東洋ニ覇權ヲ擴張スルノ海軍要港トナシテ我千島海峽ハ彼レ西ニ志ヲ得スシテ東ニ向テ出ルノ咽喉トナル加フルニ浦潮ヲ出テ、樺太東察加ニ歸航シテ石炭及需用品ヲ整備スルノ便アルヲヤ魯建國以來位置ノ不便ナルカ爲メ初メハ「バルチック」海ヨリ出テ、覇權ヲ爭ハントシ再變シテ黒海ヨリシ三變シテ阿富汗ヨリ歐亞ノ中心ニ出テ、覇權ヲ爭ヒ未タ其志ヲ滿タス能ハサル也四變シテ鬱結ノ

精神潰決シ途ニ荒漠無人ノ北亞地ニ大鐵道ヲ布設ス是レ建國以來ノ宿志ヲ貫徹セんと欲スルモノニ數千萬ノ大金ヲ抛キテ一意其速成ヲ期ス又數千萬ノ大金ヲ費シテ浦潮ヲ軍港トナス予故ニ曰ク彼ノ精神タル一日片時モ其軍港出入ノ咽喉タル日本海ヲ忘レスト我カ日本海ハ東西二航路アルノミ西航既ニ英支連合シテ之ヲ扼スルノ勢アリ彼レ豈ニ航行無碍ニシテ且ツ自國沿岸ニ於テ航海必需ノ用ヲ充タスノ便アル東航路ニカテ注クナカラシヤ英ハ疾ク其然ルヲ知ル本年函館港ニ航スル艦隊ノ中ヨリリヤンダ號一艦ヲ派シテ東察加ニ向ハシム其用意ノ周到ナル推知スヘシ故ニ我カ千島ハ獨リ魯ノ懸懸スルノミニニアラスシテ實ニ宇内各國ノ屬目スルトコロナリ魯ノ雄威ヲ宇内ニ逞アセントスルヤ内治ニ區々タラス近ク歐亞大陸ノ拓殖ノミニ力ヲ致サスシテ荒漠ノ「サイベリヤ」中土ヲ越ヘテ遠ク無人ノ鄉ヲ隔テタル大陸絶東ノ樺太東察加ニ國力ヲ注ヒテ拓殖ヲ事トシ數千里ノ遠キ運輸費用ノ幾層倍ナルモ毫モ顧ミ、スシテ偏ニ樺太全島ヲ掌握セントス而テ其意豈ニ管ニ樺太ヲ掌握スルヲ以テ足レリトセシヤ其眞意實ニ端倪スヘカラサルモノアリ我カ國近古爰ニ見アルモノハ唯林子平、水戸老公、西郷大將三人ノミ

附シテ言フ當時千島ノ拓殖ヲ唱フレハ其極必ス樺太交換ヲ以テ現政府ヲ難ス其甚
 シキヤ黒田榎本兩公ヲ指シテ賣國ノ臣ト云フ新聞ニ演說ニ皆之ヲ二公ニ責ム儀助
 筋ニ之ヲ舊記ニ徵シ之ヲ識者ニ正シテ實ニ二公ノ冤ナルヲ知ル左ニ畧叙セシ
 安政二年幕府北境ノ憂フベキヲ知ルヤ再ヒ松前全島ヲ擧テ之レヲ直管ス當時水戸
 齊昭公堀謙部正利熙ノ議ヲ駁シテ曰ク利源漸ヲ以テ北方ニ及ス者ハ過テリ(利源傍
 本道ヨリ拓殖ニ着手シテキリ)何トナレハ魯國既ニ居民ヲ以テ疆界ヲ分ツ樺太擇捉島
 以テ樺太擇捉島ニ進ントセリ(當時擇捉ハ魯國ノ境)最モ宜ク急ニ着手スヘキ所ナルニ万
 一利源ノ議ノ如クナレハ
 則チ樺太ハ我が有ニ非ラサル必セリト當時老中ニハ阿部正弘アリ(水戸老中ヲ再勤シ
 幕政ニ參セシメ島
 津齊彬公ト交リテ深クシ勝海舟翁モ其度參謀ニハ堀利熙アリ)當時風指ノ其
 二子ノ賢ナ
 ル尙ホ老公ノ識見ニ及フ能ハス遂ニ其議ヲ棄テ用ヒス日ヲ逐テ樺太ヲ危境ニ陷
 ラシム嘗テ聞ク魯ハ一時ノ權客ヲ以テ増々不逞無賴ノ惡漢ヲ移殖シ我人民ノ漁場
 ニ進入シテ堤柵ヲ構ヘ我カ耕地ヲ變シテ墓地ト爲ス如キ暴擧枚擧スベカラス幕吏
 或ハ理ヲ以テ之ヲ爭ヘハ之ヲ聽カカサルノミナラス或ハ捕ヘテ之ヲ縛ス我壯烈ノ
 移民之ヲ爭ヘハ暗殺掩擊立トコロニ至ル年々歳々其暴ヲ增長シテ滅スルコトナク

遂ニ慶應二年箱館奉行小出秀實ヲシテ萬已ムナクハ得撫以北ノ諸島ヲ以テ樺太南
 部ニ換ント決心セシムルノ勢ニ迫レリ續ヒテ維新騷擾ニ際シ彼ノ益々山丹滿州ヲ
 略取シタル慣用手段ヲ以テ侵掠ヲ逞フスルニ至リ明治政府ト雖モ彼カ要求ヲ容ル
 ンカ然ラズハ全國ヲ擧テ魯ニ抗スルカニツノ中一ニ出テサルヲ得サルニ至ラシム
 而シテ當時航海未タ開ケス一部ノ激徒云々スルモ天下ノ大勢死力ヲ盡シテ樺太ヲ
 爭フノ決心ナシ故ニ樺太所有ノ實權ハ既ニ安政年間老公ノ議用ヒラレサルニ至リ
 テ去リ其實際ニ於テ慶應ノ初年ニ至リ全ク失シ我ニ存スルモノ百中一モナキニ至
 レリ明治政府初メ雜居地ノ空名存スルニヨリ千苦万難ヲ忍ヒ之ヲ維持セントス其
 經營ノ慘憺今ヨリ想像スルモ切齒痛嘆ニ絶ヘサラシム惜哉
 千島ノ事忽ニスベカラサルナリ若シ魯ノ千島ニ向テ曾テ支那ノ山丹ヲ略シ滿州ヲ
 掠シテ我が樺太ヲ奪奪シタルノ策ヲ施シタルノ后我レ千島ニ向テ爲サントスルモ
 万事既ニ去リ又如何トモス可カラザルモノアラシ是レ予カ今日天下ノ志士ニ向テ
 訴フル所以ナリ
 世人唱道スル千島群島ノ中第一ノ良港タル望テ屬スルニ足ルハ則チ新知島ノアトト

海、而シテ本海、英艦將ノ發見ナルヲ以テ直チニ其人名ヲ以テ港名ニ冠セルニ
 非ラスヤ又タ「シヤ」シコタン島ノ南々西ニアルステール岩礁ハ千八百五年提督クル
 センスタ「氏」ノ發見ニアラスヤ彼等數千里ノ大洋ヲ渡リ他人ノ國ヲ窺フコト自己ノ
 版圖ヲ視ルカ如シ其意果シテ如何ゾヤ
 眼ヲ轉シテ我カ國ノ現況ヲ觀ヨ海軍省ヲ置ク殆ソト二十年歲月ヲ重ヌル既ニ多ク國
 財ヲ費ス既ニ夥シ而シテ明治八年千島全島我カ有ニ歸セシヨリ既ニ十有七年ノ日月
 ヲ經過シ全シク十八年三月十六日太政官達ヲ以テ千島巡視トシテ年々一回軍艦派遣
 密獵取締可致ト達アルニモカハハラス七年ノ久シキヲ過テ未ダ國境巡視ノ艦アルヲ
 見ス抑モ「エトロフ」色丹島モ千島ノ内ナリ唯々之ヲ廻航シタルノミヲ以テ此達ノ旨意
 ニ副フコトヲ得ヘキカ
 遠ク英佛ニ航セサルモ尙ホ怨スヘシ近ク我カ國內ノ島嶼一回ノ巡航海ダモ敢テセス
 海軍ノ職固ヨリ如斯モノカ幸ニシテ本年我カ
 天皇陛下聖明ノ洪徳ト磐城艦々長以下ノ必死精勵ノ功ニ依テ初メテ魯國接壤ノ島嶼
 海峽ヲ實測スルコトヲ得シニ非ラスヤ然シテ今日ニ至ルマテ我カ航海者何ニ據テ此

海峽ヲ調ヘタルカト問ハ、哀哉英魯兩國ノ海圖ニヨリテ其ノ目的ヲ達シ得タリト云
 フ外ナカルヘシ抑モ自國ノ疆土ヲ查スルニ遠ク數千里ヲ隔テタル外國ノ海圖ニ據
 テ僅カニ自國內ノ屬島ヲ調査ス豈ニ我カ國家ノ一大恥辱ニアラスヤ自己一家ノ住宅
 坪數等ヲ查スルニ他人ノ手帳ニ據テ調査スルトセシカ誰カ其愚ニシテ鈍ナルヲ笑ハ
 サルモノアラゾヤ從來我カ千島群島ノ調査ニ於ケル何ソ是ト異ナルアラソヤ
 宇内雄邦ノ形勢前陳ノ如シ若シ一雄邦我ニ向テ時勢ノ必用ニヨリ我カ不用無人ノ島
 嶼ヲ借リテ一時海軍ノ屯所ニ充テ以テ宇内各國ノ均勢ヲ保タント照會セバ何ノ辭ヲ
 以テ我カ當局者之ヲ辭セントスルカ
 之レ現時ノ勢ヒ假令ヘ招徠ニ万全ノ利益ヲ見サルモ斷シテ招徠警備ノ事ヲ執行セザ
 ルヘカラサル所以ナリ
 又國益上ヨリスルモノヲ云フニ先ツ季候ヨリ論センニ日本ハ西海三十一度ヨリ青森
 四十一度半ニ終ルニ非ラスヤ中帶溫和ノ季候ノ地赤道圈内ニ住ムヲ以テ若シ少シ寒
 帶ニ入レバ直チニ畏縮ノ念ヲ生ス故ニ北海本道ノ如キ四十一度ヨリ四十六度ナルニ
 モ拘ラス酷寒不毛ノ地ト唱ヘタルハ從來ノ有様ナリ然レハ則チ國境占守島ノ如キ五

十一度ノ地ナルヲ聞クハ直チニ人間ノ生息如何ト痛心セリ試ニ之ヲ思ヘ之ヲ内地温帯ニ照セハ少シク寒シト云フニ過キス彼ノ歐人ノ如キハ數多北地酷寒ノ地ニ據テ麥作ノ熟否ヲ驗スルニ五十二度以内ハ麥ノ收穫可ナリト云フ數年前魯領アリシ北アメリカ本州内ノ西北端アラスカ州(太平北冰洋間ノ地)ヲ合衆國ハ數百万ノ大金ヲ以テシテ魯政府ヨリ買受ケタルニアラスカヤ而シテ其地ハ北緯六十度ヨリ七十度ニ亘リ我絶島ノ占守ヨリ十度乃至二十度北方ニ偏スルノ寒地ナリ而シテ米國ハ巨額ノ金銀ヲ出シテ買取セリコレニ由テコレヲ觀レハ我カ占守島ヨリ數倍ノ酷寒地モ尙ホ人間生息物産増殖ノ價直アルヲ知ルヘシ故ニ千島ノ如キハ季候ヨリスルモ利益ノ存スルハ云フテマヨス

明治八年榎本子ノ魯國ニ公使タルヤ親シク彼得保府皮商フレターキミヘルスニ質問シタルニミヘルス氏曰ク毛皮商ハ互市場ニ於テ一個緊要ノ地位ヲ占ル者ナレハ或地方ニ於テハ一大物産ヲ爲ス可キモノニテ其獵法ノ如キハ政府ノ注意ヲ要スヘキ件ナルヲ却テ左迄ニ頓着セサルヨリ此ノ一大物産ノ基ヲ傷フニ至ルハ歎スヘキ事ナリ嘗ヘハ千島諸島ニ産スル狼虎ノ如キハカナダラブラドルアレウートシツカ等ニ産スル者

ニ比スレハ數等ノ上品ニシテ最上等ノ位置ヲ占ム毎年英ノロンドン市場ニ登ル臘虎皮ハ千島産七百枚内外ノ多キニ達セリ而シテ魯政府獵獲取締法ヲキテ以テ其良産ノ斷ヲコテ愛ヘ嘗テ政府ヘ建言セシコトアリ目下ハ貴國屬島トナリタルハ漁獵規則モ定メテ此一大物産ニ意ヲ注キ其物産ヲ擴増スルニ至ラントテ希望ス近年米國ヘ賣却セシ地方并ニアレウート諸島ノ如キモ魯領アリシトキト現時米領トナリタル后ヲ比較スレハ其物産増加シテ所得夥多ナルニ至レルハ實ニ驚クベキモノアリ是レ他ナシ注意ト不注意トニ由テ然ルナリ其取締ノ大要ハ左ノ四條ヲ以テ重ナルモノナリト具陳セリ

第一此獸(臘虎)ノ絶滅ヲ防シ爲メ雌獸ノ孕兒ノ時季ニハ捕獵ヲ嚴禁スヘシ

第二幼小ノ見獸ヲ殺スヲ禁スヘシ臘虎ハ數十年間生存スル獸ナレトモ其成長ノ極ニ達スルハ八ケ年目マテナリ之ヲ過レハ只頭毛ノ次第ニ黃白色ニ變スルノミニテ

其大サヲ増スヨトナシ故ニ生レテ二年目ノ獸ハ五十ル(日本三十七)ノ價アルヲ四年目ニ捕フンハ二百ル(百五十圓)ノ價アリ(小獸ノ未ダ接尾ノ欲ヲ發セサルモノヲ殺セハ其獸種頓

第三(ニ)臧スヘキハ論テ候(ニ)臧スシテ明カナリ

第三各島ニ於テ毎年捕獵ヲ爲スヲ禁ス假令ハ今年ハ某島ヨリ某島明年ハ甲嶋アリ

乙島ト限リテ獵セシムヘシ是レ臘虎ノ繁殖ヲ挫ラシ兼テ絶滅ノ患ヲ避クルナリ

(備考) 明治廿一年五月十日北海道廳令第卅五號ヲ以テ臘虎獵區域取締改正法ノ布

達アレドモ目今水産會社ヘ一任スルヲ以テ徒ニ空文ニ属シ且ツ外國密獵船續々

アレハ何ノ効用モナシ

第四臘虎ニ用ユル器具ヲ改革シ成丈ク綱ニテ捕ヘ銃殺ヲ禁スヘキ事(其皮ヲ扱フノミ

銃ノ音ニ驚キテ其巢窟
ヲ他所ニ移セハナリ)

ニヘルス氏又タ曰ク臘虎ノ其關スル所其巢窟ヲ爲ス島嶼ノ甚々密接セスシテ

相距ル頗ル遠ク且ツ平常人迹ノ至ル稀ナル處ト其食物ノ善惡ニ在リ千島諸島ハヨソ

天則ニ適セルト見ヘ其獸皮他所ノ産ヨリ質カニ優レリ貴國政府上陳ノ四條目ニ注意

スルトキハ之レヲ行フコト五年ニシテ臘虎ノ繁殖スルコト現今ノ倍ニ至ルヘシサキ

ノ米領内ノ繁殖ニ徴シテ明カナリト

明治八年八月三十一日立武號ニ黒田長官隨行員佐藤秀顯クソルル記行中ニコムマンド

ル島嶼ニ小島ヨリ成リテ方五十英里ニ過キス居民アリアツカ八種百五十八人米國ハツ

チンゾン、コール、商會代理者臘虎獵ヲ試ミタルニ五十餘頭ヲ獲タリ其故ハ二三年前

マテ一頭ノ臘虎モナカリシカト千島群島ニテ小銃ヲ發シテ臘虎ヲ獵セシヨリ次第ニ

該島ヘ移轉セシ爲メナリト云フ

昨二十四年同郷人傍嶋甲子太郎東京淺草總一郎所有漁船鶴丸號ノ海員ニシテ米人カ

ロール氏ノ北氷洋探險ニ隨行シテ千島ヨリ白令海峡ヲ經テ北氷洋ニ廻航セリ船中彼

ノ北洋ノ巨利ヲ博シタル英人スノ一氏傍島氏ニ語リタル言ニ日本政府ハ内事多忙ノ

折トハ云ヒナカラ從來海事ニ心ヲトメス千島群島ノ如キハ二十年來外國人ノ蹂躪ス

ルニ一任シテ之ヲ管理セサルカ爲メニ多年ノ間妄リニ獵獲セシメタルノ結果ハ千島

第一等ノ特産物ナル臘虎ヲシテ魯領ベリリノ島及南洋諸島ニ逃亡セシメタリ否ナ

逃亡セシメタルノミナラス今ハ遺類ナキニ至ラシメタリ然レトモ其方法ノ如何ニヨ

リ再ヒ蕃殖ノ望ナキニ非ラス如何トナレハ千島ハ寒温兩帶ノ間ニ位シ潮流風候及群

島ノ構成位置ハ素ヨリ臘虎ノ生活蕃殖ニ適當ナレハナリ

前者ハ魯國巨万ノ毛皮商ニシテ次者ハ全シク寒帶北洋ニ名ヲ轟カシタル實業家ニシ

テ我カ千島ノ海利ヲ説ク一ニ前後符節ヲ合スルカ如シ千島海獸ノ利ソレ忽ニスヘク

傍島氏又曰、此航海ニ「バ」レンシク島ヲ見ルニ數千、百ノ獵虎ヲツトセ、獸群ヲナシ、蝨屯
 蟬集スルヲ見ル且ツ其守衛屯在所ノ屋下ニ腐集スルハ恰モ猶ホ昔日我カ殺生禁斷ノ
 場所ニ魚鳥ノ群集スルヲ如キノ觀アリ此等諸獸群居シテ其住島ヲ逃レ去ルモノナキ
 ハ之レカ保護其宜シキニ適シ捕獲其度ニ適スルニアラスゾハ焉ソ能ク如斯生殖蕃息
 テ見ルコトヲ得ンヤ(右傍島ノ實見説ナリ)

北海道廳第一回勸業報告(十九年出版) 臘虎臘肭獸產地千島國(當時ハコクナシリシヨク) 沿海ニ
 明治七年取締所ヲ「スベトロ」チンチベツ「イリ」フシ「ノ」三所ニ設ク其支場ヲ十九ヶ所ニ
 分置シ以テ國產ヲ興起シ兼テ密獵ヲ監禁セシム當初一ヶ年ノ収獲スル所獵虎三百頭
 已上ニ至リシモ近年密獵船ノ増加ト砲銃ノ響キヲ恐レ遠洋ニ逃去シ捕獲ノ數ヲ減セ
 リ十五年ハ三十六頭十六年ハ五十八頭十七年ハ四十五頭十八年ハ六十五頭ノ官獵ニ
 過キスト云フ又右十五年ヨリ十八年迄密獵ノ顯ハシタル彼ノ外國密獵船雇漁夫天
 宮古愛助出獵日記世ニ公ニセル調ニヨレハ十五年ニハ金十四万二千〇九十圓全十六
 年沒収セラシタル金額四千七百十三圓余全十七年四方三千圓全十八年沒収セラシタル

ル凡ソ金高四万八千九百八十五圓トス其他該密獵船一艘ニテ十年ヨリ十五年迄六ヶ
 年一艘ノ平均金十三万九千九百五十圓又十六年ヨリ十九年迄全シク四ヶ年間一艘
 ノ平均金七万〇七百〇九圓此外密獵船ノ數ハ大凡平均一ヶ年十八艘ツ、ニ當ルト云
 ハハ假リニ該船ノ平均獲獲高ト見積リテ二十年ヨリ十五年迄ハ凡ソ一ヶ年ニ百二十
 五万九千五百五十圓又十六年ヨリ十九年迄四ヶ年ハ凡ソ一ヶ年六十三万六千三百七
 十三圓北海道ノ或水産實業家ハ云フ明細ノ統計ナクハ世上ニ公言シ得サルモ慶應
 三年ヨリ明治九年迄ハ大凡每年少テクトモ二百万圓以上ノ密獵金高ナルヘク全シク
 十年ヨリ十九年迄ハ百三十三万圓ナルヘク全シク二十年ヨリ昨年迄ハ六七十万圓ノ
 高ナルヘクシト云フ實ニ驚クヘキ巨額ニアラスヤ或人ノ調査ニハ昨二十四年中ノ外國
 密獵金高ハ四百六十万五圓トアソトモ信シ難シコトハ記シテ參考ニ供ス

昨年根室警察署巡查伊藤才之助密獵探偵取締ト本年片岡侍從一行トハ數艘ノ密獵船
 ヲ認メ警城艦碇泊中モ一艘ヲ認メタルハ密獵船ノ千島群島ニ出沒スルハ疑ヲ入ル
 抑テ脆弱ノ帆船前船ニ駕シテ万里ノ波濤ヲ渡リ身命ヲ抛テ冒險ス尋常一様ノ利益ニ
 難カ之ニ從事スル者ヲシテ身命ニ代ルニ足ル巨大ノ利益アルヲ斷シテ疑ヒナシ

安政二年水戸齊昭公擢提樺太宗谷ニ奉行ヲ置クノ議ニ基シ

庶務ノ外警察兵事學務例規ノアル裁判ヲ管ス

海産 海獸蕃殖及漁獵海草採取製網製絲

陸産 陸獸蕃殖新耘獸獵測量礦物

衛生 病院海陸產物製造貯藏測候所食草藥草

會計 物品購入販路造船

總テ祝祭日休暇ハ晴天ニハ園圃耕耘採薪ヨリ海陸漁獵ニ從事ス雨天ニハ廳舎ノ

一室ニ集合製網製絲製細草鞋等ノ實務ニ従事スル事右ノ如クシテ一ハ以テ

天皇陛下ノ德ニ報シ一ハ以テ人民ノ本務ニ答フ此意ヲ体シテ別ニ各自ヨリ警書

ヲ徹ス官吏ハ元ヨリ初期ノ移住ハ妻子ヲ攜帶スル者ニ限ルコト

一航海ノ便ヲ開クコト

政府ノ任務トシテ源船會社ニ特約シ一々年兩回ノ定規航海ヲ開キ移住者并ニ學術

上及實業者研究ノ便利ヲ得セシメ進歩スルニ從ヒ來島人及輸出入品ノ増加ヲ見

ルニ至テハ一ハ航海ノ度數ヲ増シ一ハ來島人ノ船賃及輸出入品ノ運賃ヲ半ハ補

助スル等最モ有力ナル保護ヲ行フ可シ

一警備軍艦ヲ春秋二回ツ、特ニ派遣スル事

軍艦ハ練習或ハ測量ヲ兼テ外國密獵船ヲ警戒ス及在島人ヲ保護シ海外ノ侮ヲ防

ク可シ

一燈臺ヲ建築シテ航海船ニ便利ヲ與フル事

航路要衝ノ岬角ニ燈臺ヲ設クルハ航路ヲ開クニ最モ必用ナリ

一要島ニ電信ヲ設ルコト

一島嶼往來ニ適當ノ皮製木製ノ小船ヲ製造スル事

魯人新得撫島ニ據有スル時ハ本國ヨリ該島マテ大船ニ駕シ來リ該島ヨリ更テ

三小船ニ駕シテ擇捉國後根室濱中霧多布厚岸等ニ來リ小貿易ニ従事シタル證例

アリ然レハ習熟ノ后ハ餘ヲ定規航海ノ度數ヲ増サスシテ航海ノ便ヲ得ルニ至ル

ベシ

一色丹土人ヲ占守島ニ移ス事

政府ニ今ノ色丹土人ヲ保護スルノ義務アル事ハ左ノ條約アルニヨル

第一號 此阿證書ハ明治八年魯ト交換ノ時相互

證書

ク、リル諸島シムムシユニ住スル魯國人民ノ同島ニ永住スル者ニ證據ヲ與ヘリク
ル諸島ヲ日本政府ヘ請取レリ乍然是迄住民ノ所有スル建家藏及其他ノ建物ノ
ル地面又現在住民ノ田畑ニ使用スル地所モ同シク其者ノ所有トス

日本理事官 印
魯國理事官 印

明治八年九月

第二號

證書

「ク、リル諸島住民及土人共へ

今般ク、リル諸島ヲ魯國政府ヨリ日本政府ヘ受取リタルニ付住民ノ食用品其他需
用ノ物品ハ從前ノ制度ニ照準シ日本政府適宜ノ方法ヲ立テ年々輸送差支ナカラ
シムル條各得其意聊カ無疑念安堵致スヘキ事

明治八年九月

日本理事官 時任爲基印

同 長谷部長連印

小野寺魯譯

千島交換以來魯國ニ歸ル者アリ但占守島ニ留リテ日本民籍ニ編入セルハ今ノ色
丹土人ナリ我邦ヨリ約ノ如ク必需ノ物品輸送シ彼等ニ満足ヲ與フヘキ義務アル
モ航路未タ開クス爲メニ食言ニ陷リシモノ數回アリ當時外國新聞ニ掲ケテ數
々日本政府ヲ攻撃セリ時ノ北海道長官或ハ根室縣令等ヨリ漁船御委託或ハ島嶼
保護ノ儀海軍省ヘ稟議ニ及ヒタルモ要領ヲ得ス遂ニ十七年ニ至リ意ヲ決シテ今
ノ色丹へ移シテ保護ヲ與フルニ至ルト云フ然ルニ十七年引キ移ノ當時該土人口
數九十七名ノ所色丹へ移住以來僅カ八年間ニ死亡シテ現今五十七名ニ減少セリ
此減少ヲ來セル原因種々アルヘシト雖モ十七年以前占守ニ居ル迄ハ増殖シテ色
丹ニ移ノ以來ノ減少トスレハ重ニ風土ノ異ナルト其職業ノ彼等ニ適セサルトハ
原因ノ主ナルモノト断定セサルヲ得ス夫レ陸生動物ヲ海洋ニ移サハ其生命ヲ全
クセサルト同シク其境偶總テ其身心ニ適セザレハナリ彼等占守島ニ居ルヤ數百
里ノ島嶼海峽ヲ自由ニ跋渉シ各其適スル所欲スル所ニ從フ色丹移住以來ハ一島
ノ小區域ニ限ラン加フルニ其日常ノ業ハ本邦風ノ耕耘ナリ夫レ土着不動産ニ依
テ生活ヲ得セシムト唱フルハ名ハ則チ美ナリ然レトモ之レテ其占守居住ニ比ス